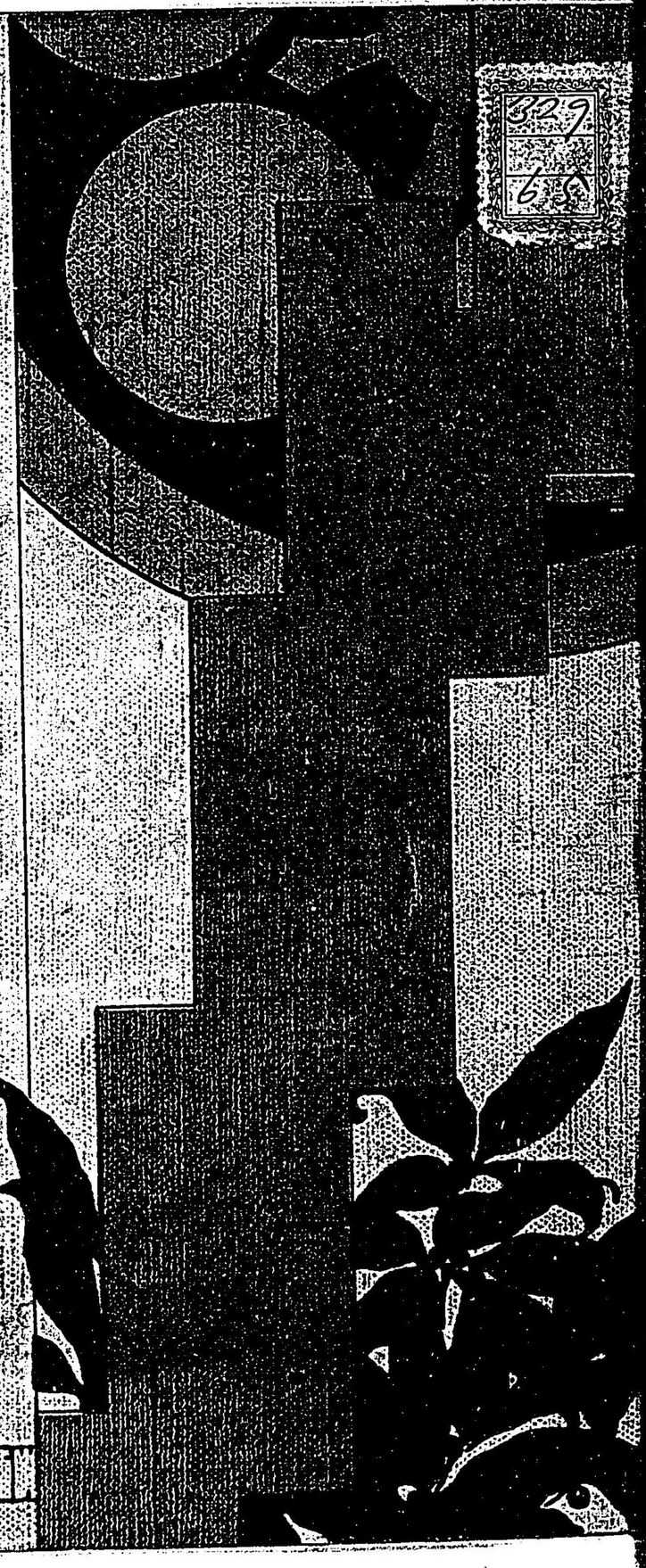
827
6.3

天理教祖

中山美伎子



529-651

天皇陛下御即位礼記念

中山美伎子

明治
43. 9. 26
内交

教化

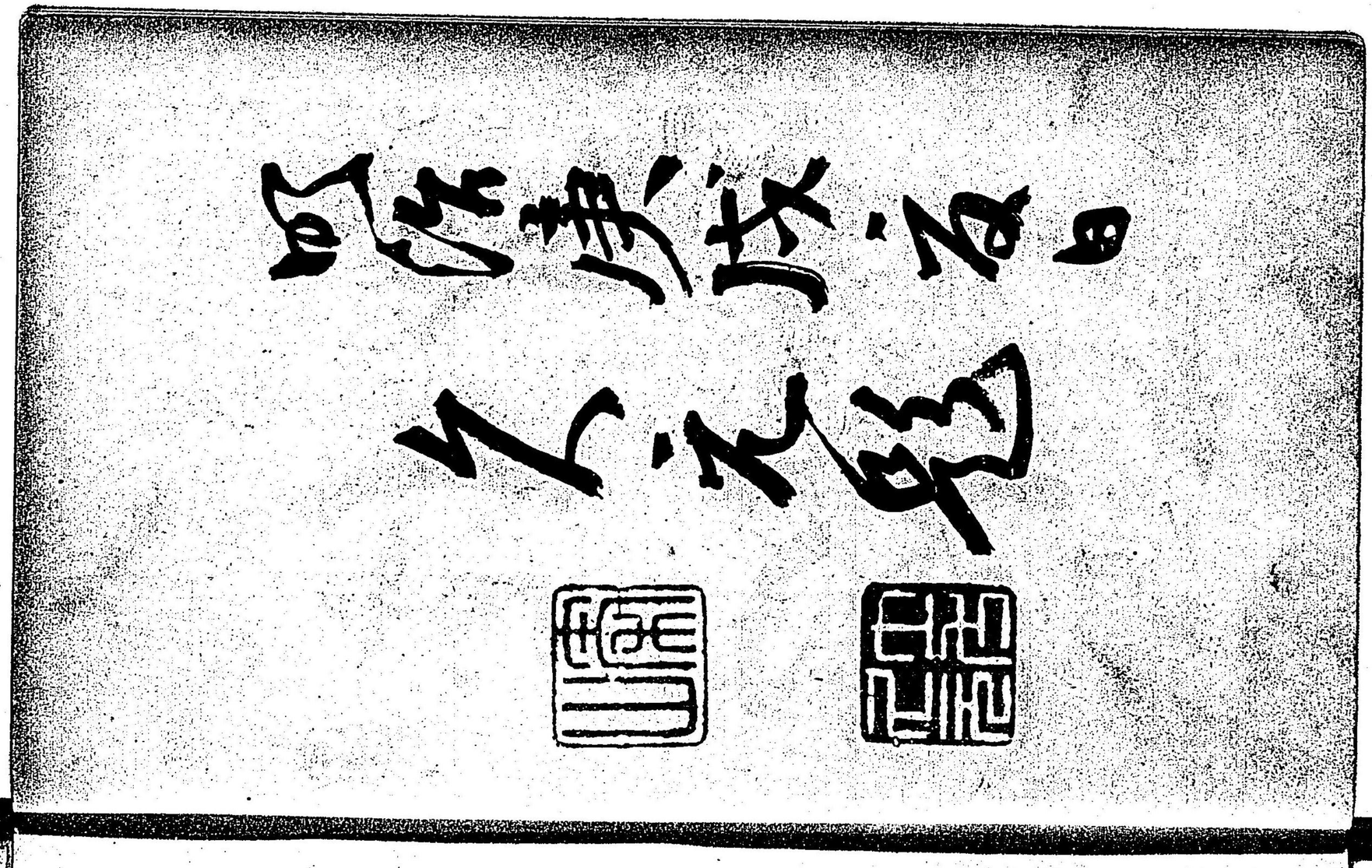
明治庚戌夏日

香

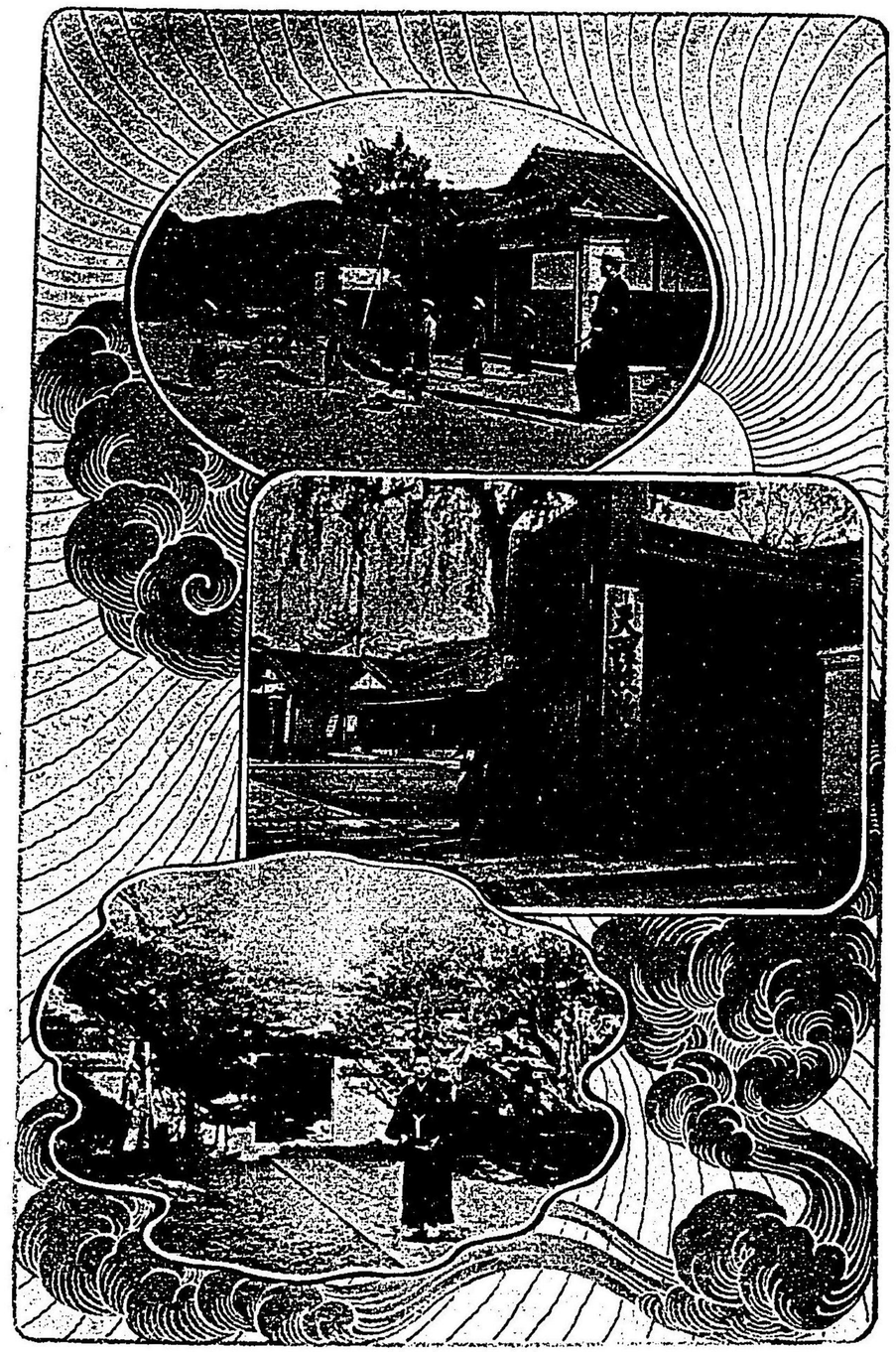
梅菴敬

又

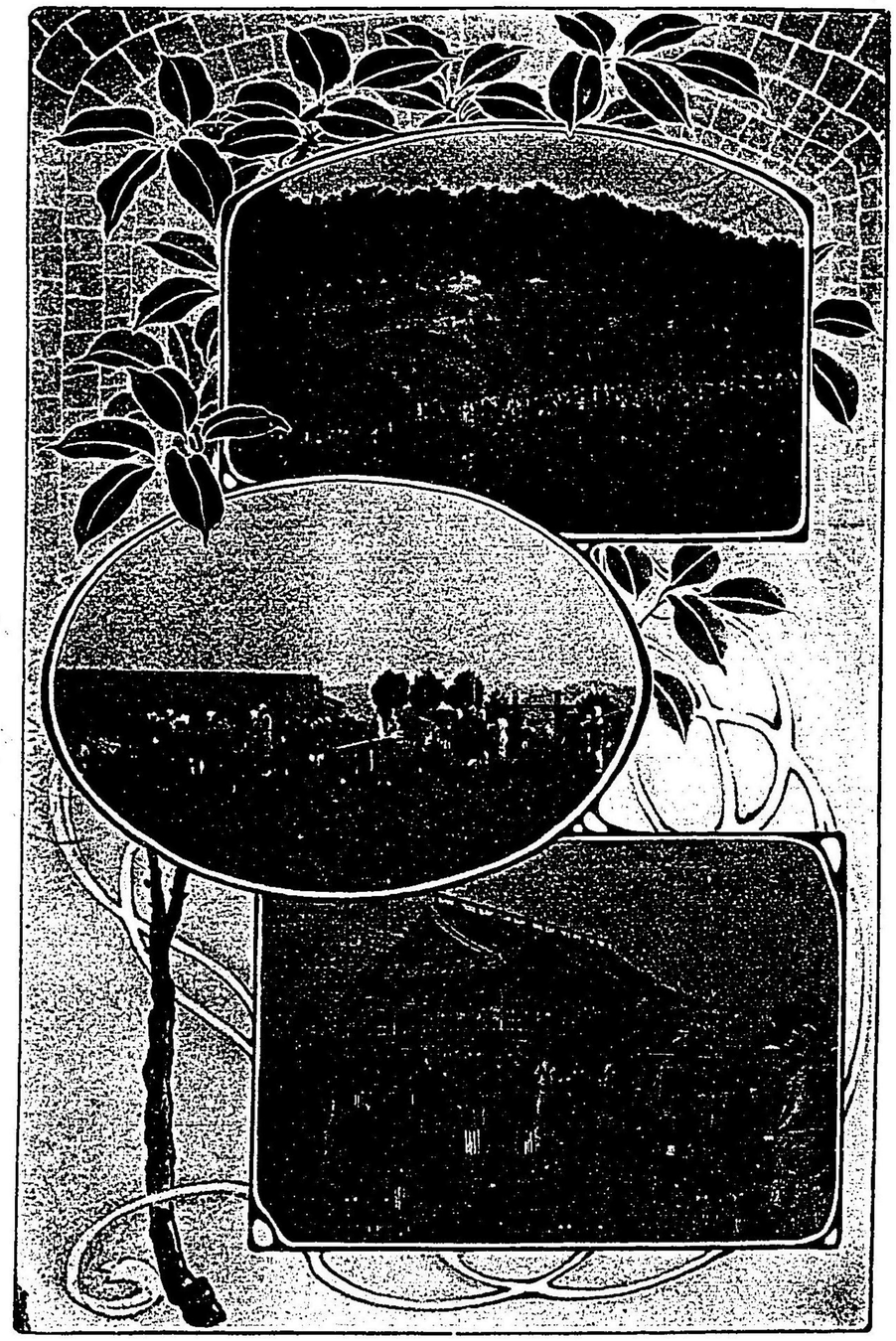
味



天理教祖眞道彌廣言知女命之墓



（上）天理教養德院
（中）天理教廳　（下）飯降邸



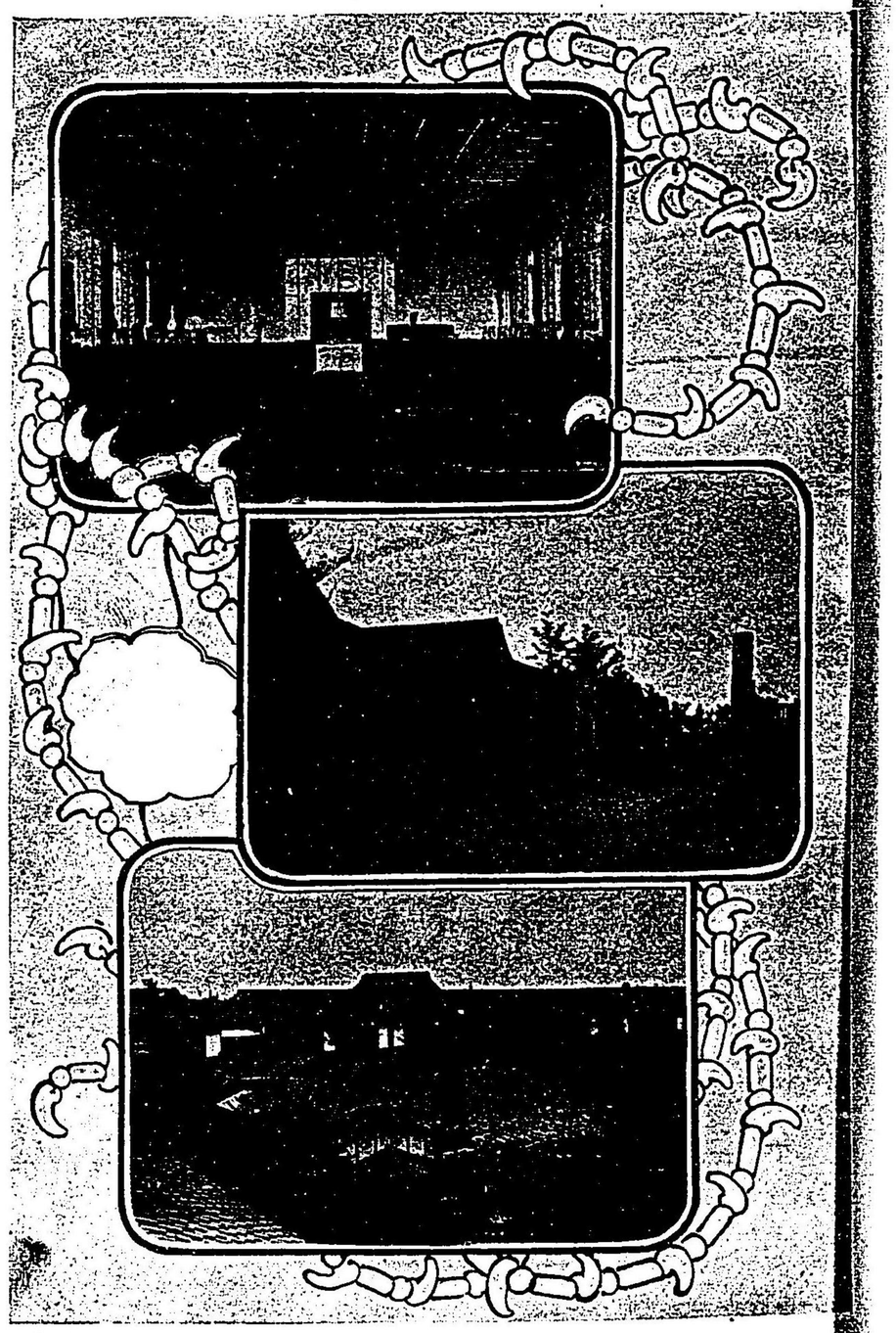
況景の運土進寄の日の徒生學中教理天（上）
（二　其）　同（下）　（一其）進寄の日徒信（中）

一下り目

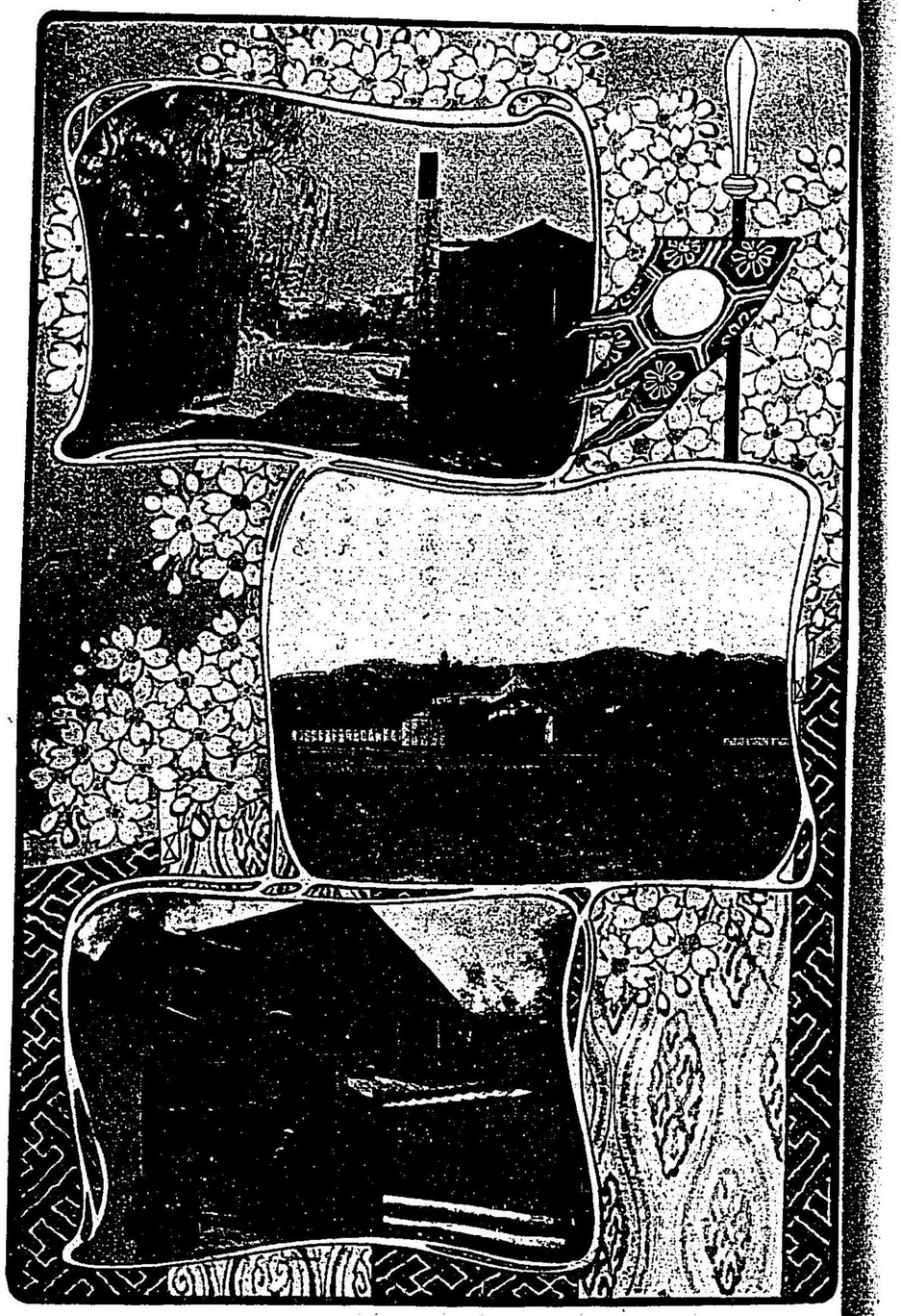
一ツ正月こゝのさづけはやれめづらしい
二にこりさづけもらうたらやれたのもしや
三にさんさいこゝろをさだめ
四ツよのなか
五ツりなふく
六ツむしやうにでけまはす
七ツなにかにつくりとるなら
八ツやまとはほうれんや
九ツこゝまでついてこい
十ドとりめがさだまりた

二下り目

とんく〳〵とんと正月などりはじめはやれおもしろい
二ツふしぎなふしんかいればやれにぎはしや
三ツみにつく
四ツよなほり
五ツいづれもつきくるなればやれおもしろい
六ツむほんのねをきらふ
七ツなんじふかすくひあぐればやれにぎはしや
八ツやまひのねをきらふ
九ツこゝろをさだめねようなら
十ドところのをさまりや



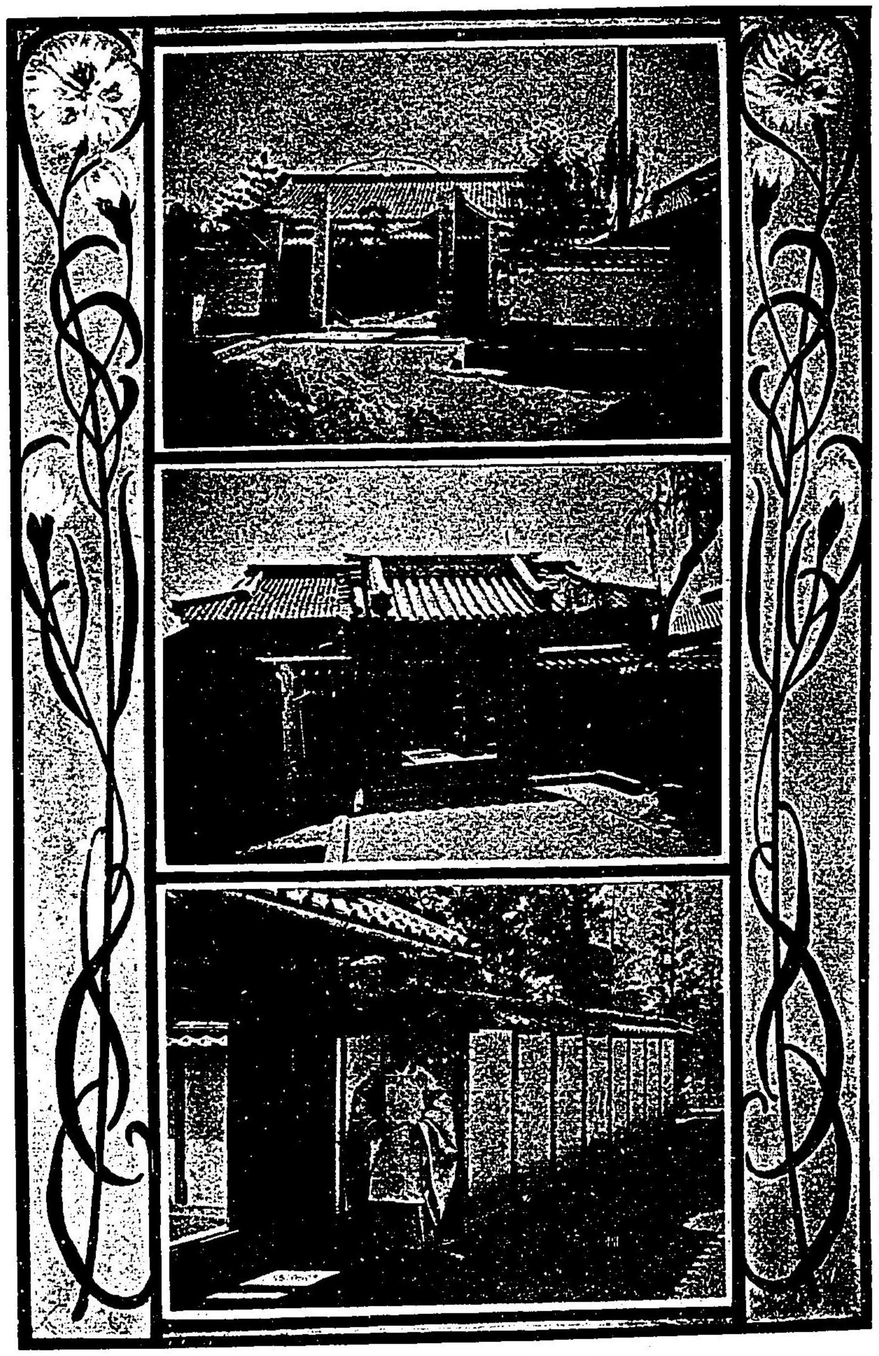
（上）天理中學校講堂
（中）天理中學校　（下）同　校　舍



所詰徒信會教大東湖　（上）
所詰徒信會教大島數　（下）　　泉全の部本會教（中）

三下り目

一ツひのもとしよやしきのつとめのばしよはよのもとや
二ツふしぎなつとめばしよはたれにたのみはかけれども
三ツみなせかいがよりあうてでけたちきたるがこれふしぎ
四ツよう〳〵こゝまでついてきたしづのたすけはこれがらや
五ツいつもわらはれそしられてめづらしたすけなするほどに
六ツむりなねがひはしてくれなひとすぢこゝろになりてこい
七ツなんでもこれからひとすぢにかみにもたれてゆきまする
八ツやむほどつらいことはないわしもこれからひのきしん
九ツこゝまでしん〳〵したけれどもとのかみとはしらなんだ
十ドこのたびあらはれたじつのかみにはさうゐない



所詰徒信會教分堺（上）

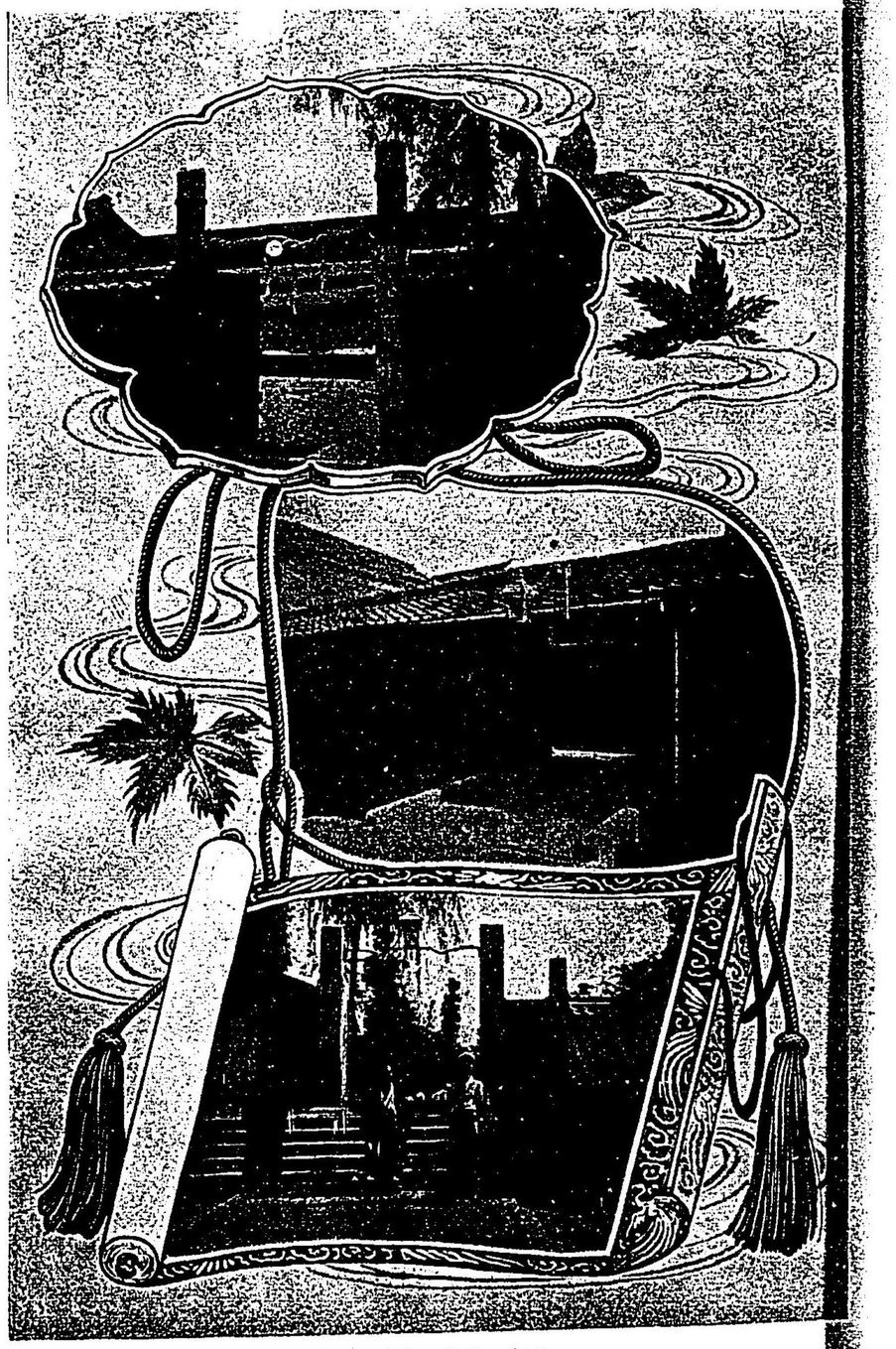
邸　野　堉（下）　所詰徒信會教分知高（中）

四下り目

一ツひとがなにごといはうともかみがみてゐるきをしづめ
二ツふたりのこゝろをさめねよなにかのこともあらはれる
三ツみなみてねよそばなものかみのするこゝとなす
四ツよるひるどんちやんつとめするそばもやかましうたてかろ
五ツいつもたすけがせくからにはやくやうきになりてこい
六ツむらかたはやくにたすけたいなれどこゝろがわからいで
七ツなにかよろづのたすけあひむれのうちよりしあんせよ
八ツやまひのすつきりねはぬけるこゝろはだん〳〵いさみくる
九ツこゝはこのよのごくらくやわしもはや〳〵まねりたい
十ドこのたびむれのうちすみきりましたがありがたい

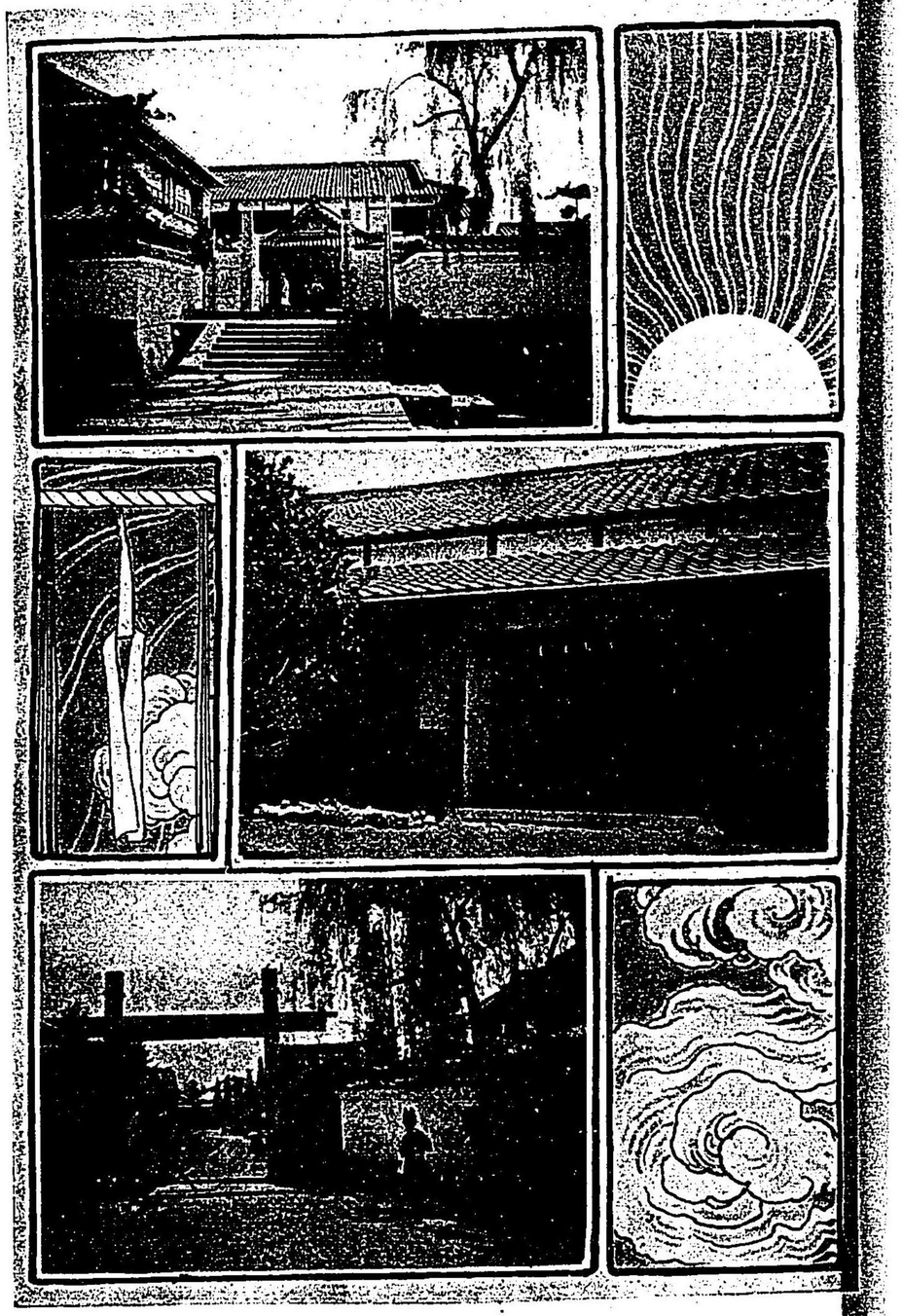
五下り目

一ツひろいせかいのうちなればたすけるところがまゝあらう
二ツふしぎなたすけはこのところおびやはうそのゆるしだす
三ツみづとかみとはおなじことこゝろのよごれをあらひきる
四ツよくのないものなけれどもかみのまへにはよくはない
五ツいつまでしん〳〵したとてもやうきづくめであるほどに
六ツむごいこゝろなうちわすれやさしきこゝろになりてこい
七ツなんでもなんぎはさゝぬそえたすけいちじよのこのところ
八ツやまとばかりやないほどにくに〳〵までもたすけゆく
九ツこゝはこのよのもとのぢばめづらしところがあらはれた
どうでもしん〳〵するならばかうなむすぼやないかいな



所詰徒信會教大北（上）

所詰徒信會教大口水（中）　　所詰徒信會教大賀甲（下）



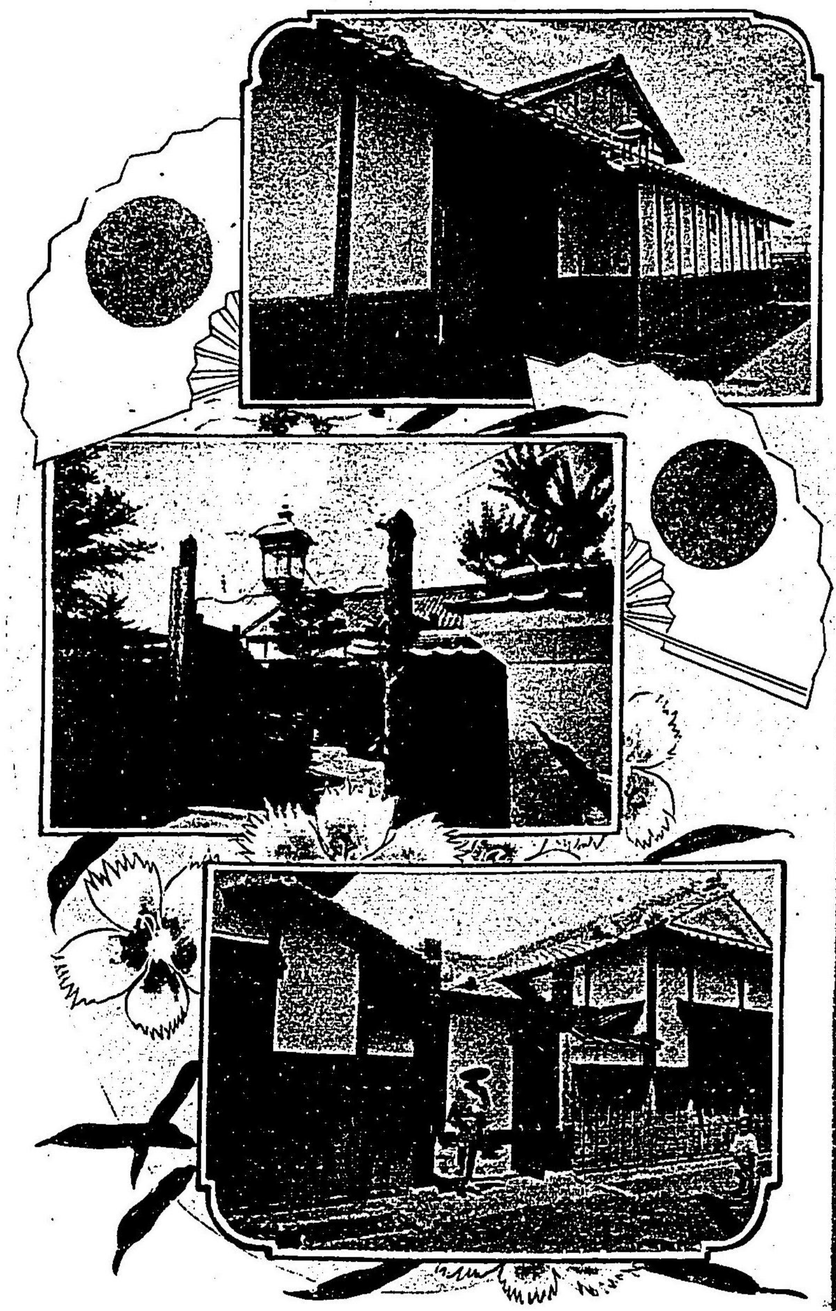
所詰徒信會教大海南（上）
所詰徒信會教大桜本日（下）　所詰徒信會教分法城（中）

六下り目

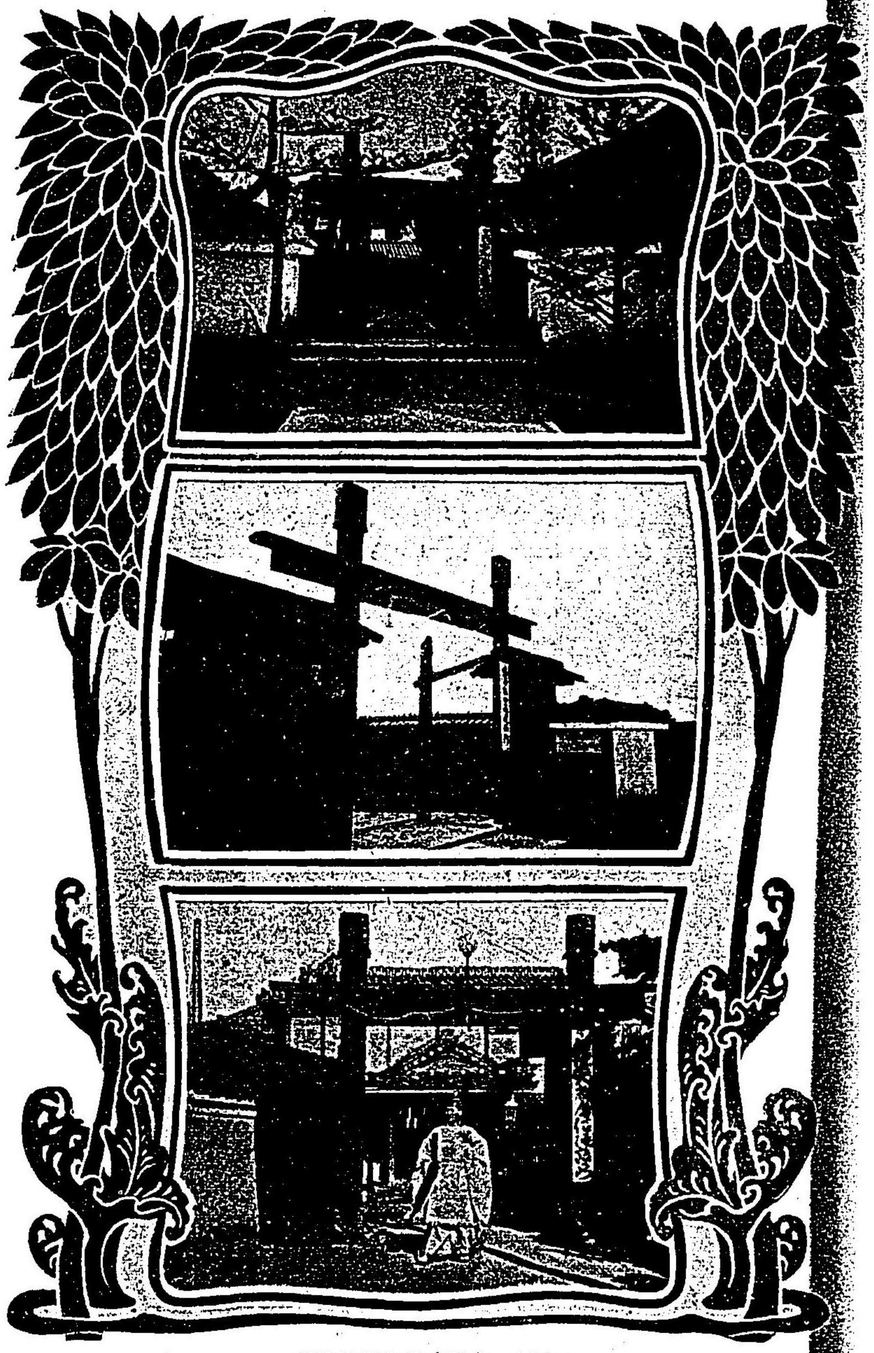
一ツひとのこゝろといふものはうたがひぶかいものなるぞ
二ツふしぎなたすけかするからにいかなることもみさだめる
三ツみなせかいのむねのうちかゞみのごとくにうつるなり
四ツようこそつとめについてきたこれがたすけのもとだてや
五ツいつもかぐらやてなどりやすであでは、めづらしたすけする
六ツむしやうやたらにねがひでるうけとるすぢもせんすぢや
七ツなんぼしんぐ〳〵したとてもこゝろえちがひはならんぞえ
八ツやつぱりしんぐ〳〵せにやならんこゝろえちがひはでなほしや
九ツこゝまでしんぐ〳〵してからはひとつのかうをもみにやならぬ
十ドこのたびみえましたあふぎのうかゞひこれふしぎ

七下り日

一ツひとことはなしはひのきしんにほひばかりなかけておく
二ツふかいこゝろがあるなればたれもとめるでないほどに
三ツみなせかいのこゝろにはでんぢのいらぬものはない
四ツよきぢがあらばいちれつにたれもほしいであらうがな
五ツいづれのかたもおなじことわしもあのぢなもとめたい
六ツむりにどうせといはんでなそこはめい〳〵のむねしだい
七ツなんでもでんぢがほしいからあたひはなにほどいるとても
八ツやしきはかみのでんぢやでまいたるたねはみなはえる
九ツこゝはこのよのでんぢならわしもしつかりたねまこ
十ドこのたびいちれつにようこそたねなまきにきたたねなまいたるそのかたはこえをおかずにつくりとり



（上）櫻非教會信徒詰所
（中）天理教奈良縣下教會組合事務所　（下）御津分教會信徒詰所



所詰徒信會教分縣大　（上）

所詰徒信會教大津瀧　（下）　　所詰徒信會教原ヶ島　（中）

八下り目

一ツひろいせかいやくになかにいしもたちきもないかいな
二ツふしぎなふしんをするなれどたれにたのみはかけんでな
三ツみなだん〳〵とせかいからよりきたことならでけてくる
四ツよくのこゝろなうちわすれとくとこゝろなさだめかけ
五ツいつまでみあはせぬたるともうちからするのやないほどに
六ツむしやうやたらにせきこむなむれのうちよりしあんせよ
七ツなにかこゝろがすんだならはやくふしんにとりかゝれ
八ツやまのなかへといりこんでいしもたちきもみておいた
九ツこのきをうかあのいしとおもへどかみのむれしだい
十ドこのたびいちれつにすみきりましたがむれのうち

（上）高安大教會信徒詰所

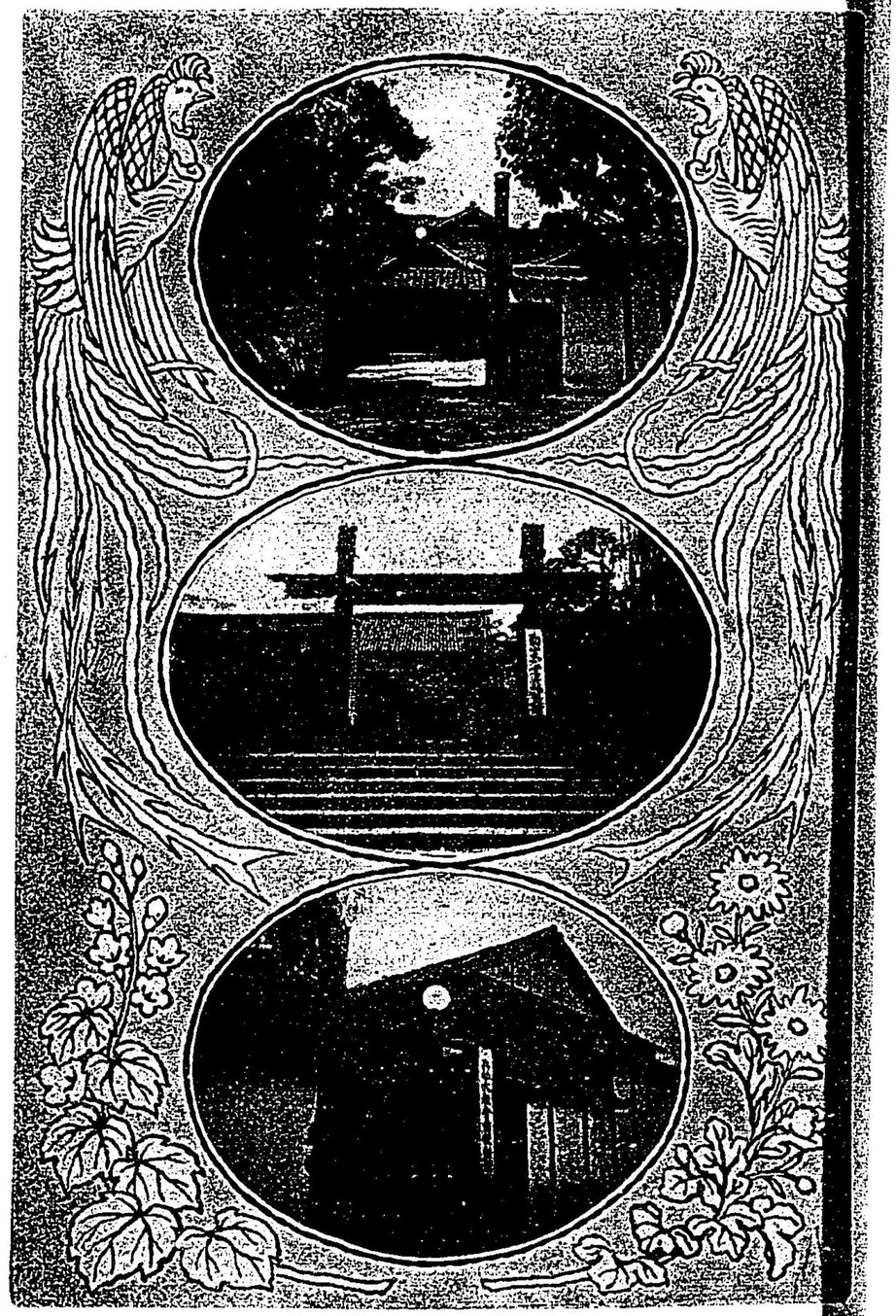
（中）河原町大教會信徒詰所　　（下）中河教會信徒詰所

九下り目

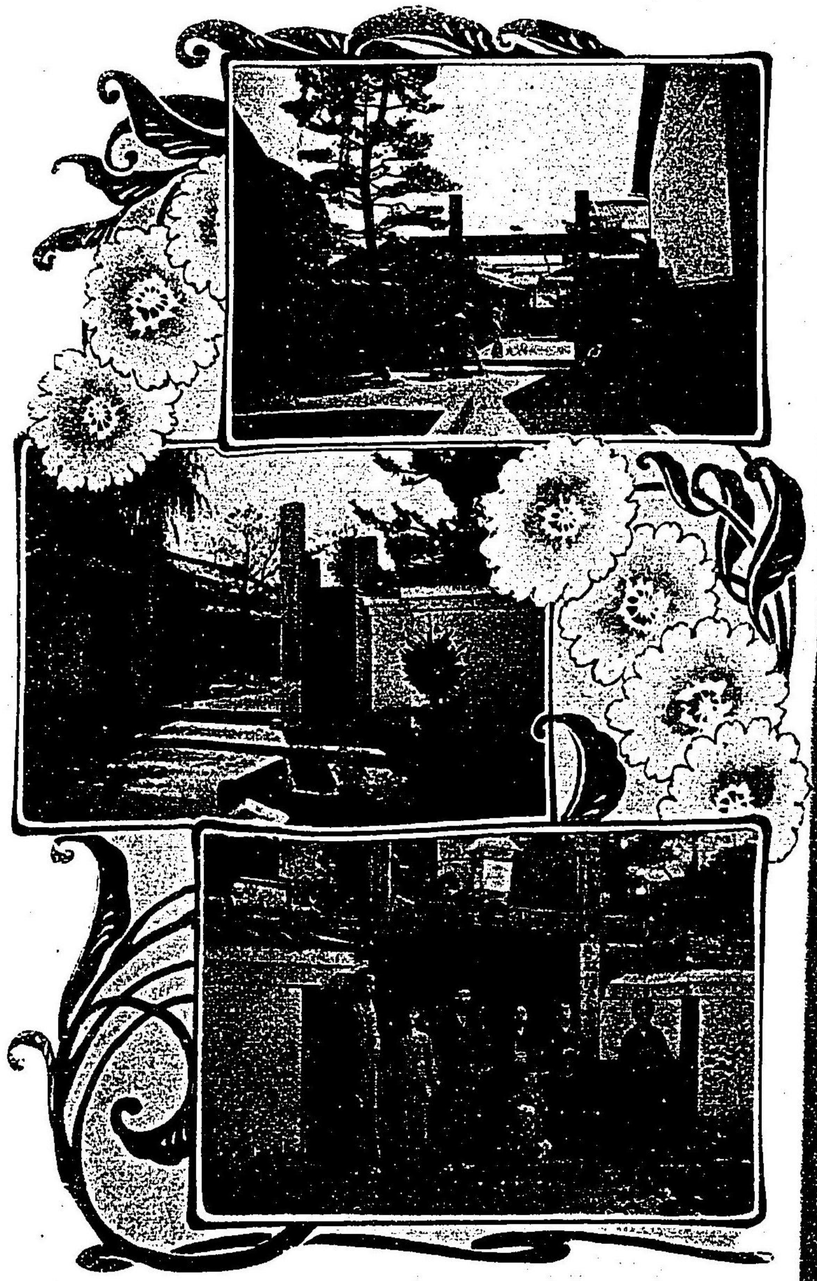
一ツひろいせかいをうちまはりいつせんにせんでたすけゆく
二ツふじゆうなきやうにしてやらうかみのこゝろにもたれつけ
三ツみればせかいのこゝろにはよくがまじりてあるほどに
四ツよくがあるならやめてくれかみのうけとりでけんから
五ツいつれのかたもおなじことしあんさだめてついてこい
六ツむりにでようといふでないこゝろさだめのつくまでは
七ツなか〳〵このたびいちれつにしっかりしあんなせにやならん
八ツやまのなかでもおちこちとてんりわうのつとめする
九ツこゝでつとめをしてゐれどむねのわかりたものはない
とてもかみのなよびだせばはやくこもとへたづれでよ

十下り目

一ツひとのこゝろといふものはちよとにわからんものなるぞ
二ツふしぎなたすけあらはれてぬれどあらはれてゐるのがいまはじめ
三ツみづのなかなるこのどろうはやくいだしてもらひたい
四ツよくにきりないどろみづやこゝろすみきればごくらくや
五ツいつ〳〵までもこのことははなしのたれになるほどに
六ツむごいことばなだしたるもはやくたすけないそぐから
七ツなんぎするのもこゝろからわがみうらみであるほどに
八ツやまひはつらいものなれどもとをしりたるものはない
九ツこのたびまではいちれつにやまひのもとはしれなんだ
十ドこのたびあらはれたやまひのもとはこゝろから



大教会名山所詰徒信者（上）
大教会山邵所詰徒信者（中）　大教会神兵所詰徒信者（下）



所詰徒信會教大東（上）

所詰徒信會教分安平（中）　　所詰徒信會教場船（下）

十一下り目

一ツひのもとしよやしきのかみのやかたのぢばさだめ

二ツふうふそろうてひのきしんこれがだいいちものだれや

三ツみればせかいがだんく〳〵ともつこになうてひのきしん

四ツよくなわすれてひのきしんこれがだいいちこえとなる

五ツいつ〳〵までもつちもちやまだあるならばわしもゆこ

六ツむりにとめるやないほどにこゝろあるならたれなりと

七ツなにかめづらしつちもちやこれがきしんとなるならば

八ツやしきのつちなほりとりてところなかへるばかりやで

九ツこのたびまではいちれつにむねがわからんざんれんな

十ドことしはこえおかずじふぶんものをつくりとりやれたの

もしやありがたや

一ツいちにだいくのうかゞひになにかのこともまかせおく
二ツふしぎなふしんをするならばうかゞひたてゝいひつけよ
三ツみなせかいからだん〳〵ときたるだいくにほひかけ
四ツよきようりやうがあるならばはやくこもとへよせておけ
五ツいつれとうりやうがよにんいるはやくうかゞひたてゝみよ
六ツむりにこいとはいはんでないづれだん〳〵つきくるで
七ツなにかめづらしこのふしんしかけたことならきりはない
八ツやまのなかへとゆくならばおらきとうりやうつれてゆけ
九ツこれはこざいくとうりやうやたてまへとうりやうこれがんな
十ドこのたびいちれつにだいくのにんもそろひきた

天理教祖 中山美伎子

碧瑠璃園

第壹章

(一)

「美伎子は居ぬのかよ」

美伎子は居ぬのかよと、柔く慈悲の籠りたる聲にて呼ぶ春とは云へど、まだ寒き如月中旬の日は暮れんとす、外には木枯の音高く聞こえて、軒に吊したる豆の枯葉のざは〳〵と打ち合ふ音、淋しさに輪を掛ける如く鳴り響く

妻の衣子は角行燈に火を點して、良人半七の前に出でぬ、半七は讀みさしたる寫本の卷を納めながら、自然木の桐に彫りたる刻好き火鉢に手を翳して、妻の衣子の座に着くを見遣り

「美伎は何うして居るの、又佛樣玩弄をして居ると見ゆるのう」

「いつも變らぬ看經でござります、看經にかゝるのが癖でござります」

「困つたものぢやの」

「美伎子は居ぬかよ」と衣子は又聲を張りて「お父樣お召しなさるぞよ」

幾度か呼ばれたるが耳に入りしか、奥の佛間深く「はい」と答うる清しき聲、やがて襖を徐かに開きて、立ち出づるは女の美伎子なり、年はまだ十三の上を出でじ、色白く痩形にして、目の中星の如く鮮かなるが、手織木綿の衣服に、絲入紅縞の半纏を着て、黒漆の如き髪を島田髷に取り上げたる姿の優れしは、一朶の櫻、朝日の光りに匂ふが如く、一線の夕陽清き小川の波の上に蓑くが如く鮮かなりき

「おゝ」と衣子は座を譲る如くして「まア此處へお來で、今日はお前に話さねばならぬ事があるでな」

半七は今さらながら、我娘の氣高き姿に打たれゝ如く沈と視入りて、すばすと烟草燻らする、美伎子は儼かに座に着きて

「改つてお話とはどのやうな事でござりまする」

「他ではないが、お前も今年は十三ぢや、いつまでも親の側に佛樣いぢりはかりはして居られぬ、それでお父樣とも御相談申し上げ、お前を三島へ嫁に遣らうと思ふ、三島庄屋敷の善兵衛さん知つて居やるわの」

「私、お嫁に行くのは否でござります」

「はて、その樣な我儘、——女と生れて嫁に行くを否といふ法があるか、それに庄屋敷の善兵衛さん、それは〳〵好い殿御、お氣質も優しうてお在でさうな」

「私は一生涯獨身で暮らします」

「おほゝゝゝ」と衣子は思はずも口に手を當て「又其樣なことをお云ひぢやわの、若い時は一生を獨身など、思ふことが無いでもないが、殿方は妻を取り、女は良人を持つに定つたものぢや、十三と云へばもう大人、何時までもお父樣に御苦勞を掛けては濟まぬ、幸ひ橋渡しのお方もある、諾と云ふてたもれ

いの」

「いえ、私は……」と美伎子は飽くまで決心の色を見せて「一生を御佛に捧げる心でございます、尼になつて生涯を送る心でございます」

「え、尼になつて……」と衣子は目を圓うして「あなたこんな事云ひますがの」

「はゝゝゝ」と半七は絞り出したやうに笑つて「小供の癖にそんな大人びた事を云ふも、要りはお前が和讃や心經を教へるからぢや、これからは佛樣いぢりをさせぬやうにして、偶には物見遊山にも伴れて行くが宜からうぞ、十三や十四で尼になるの出家するのと、思ふても見ぬことぢや」

「お父樣のお詞ではございますが、私は物を見たうございませぬ、遊山などに行きたうも思ひませぬ、一生のお願ひ尼にして下さりませ」と美伎子は動く樣も無く云ふ

「もう〳〵そんな事二度と再び云ふてたまふな」と衣子は耳を掩ふやうに、

「聞くさへもゾッとする、撫でつさすりつ育て上げた黒髪、無雜作に切られて何うなるものか」

「お母樣はその樣にお云ひ遊ばしますが、何時やらお寺樣の御說敎承つた時も、一生は風の前の雲、夢の間に散じ易く、三界は水の上の泡、光りの前に消え失せん、と仰せなされたではございませぬか、後れ先だつ世の習ひ、息のある中に少しでも佛の敎へが受けて置きたうございます」

（三）

「おゝお前はそれを覺えて居るか」と半七は我娘ながらも、記憶の良きに驚いて「この子には何も聞かされぬ、是から說敎へも伴れて行かれぬぞ」

「眞にまア記憶のよい子でございまするな」と衣子も心に舌を卷きつゝ「これでは御和讃も心經も直に暗で覺える筈ぢや」

「それはそれ、是は是」と半七は又詞を改めて「人間には人間の勤めがある、佛樣に事へるのを惡いとは云はぬが、女と生れて第一の勤めは、お上のお役に立つ良い子を生んで、それを立派に育てるにあるのぢや、心だに試の道を

踏んで行けば、髪はおろさずとも、墨染の法衣は着ずとも、御佛の心に依よのは知れてある、お前が若いにも似ず、佛の道に分け入つて、一生を教への爲めに捧げやうと云ふ、その心は感心ぢやが、まだ一を知つて二を知らぬ、佛樣の御心には、少しでも人道を正しう踏んで、人間の役を正直に勤めるのを、殊の外に御賞美なさる、髪を剃るのが佛樣の御弟子ではない、墨染の法衣に包まれても、心が横道へ外れては、何の御加護も無い理由ぢや、お前もまだ年が若い、心得違ひをしては爲らぬ」と嚙んで哺めるやうに云ふ

美伎子は兩手を膝に置いて、身動きもせず聞き居たり

「今お父樣の被仰つた通りぢや、親に苦勞を掛けぬを孝行の第一とする、孝は百行の基、いかに佛樣の御弟子になつても、不孝の子と云はれては何んにもならぬ、こゝの道理をよう合點して、私やお父樣の云ふことを聞かねばならぬぞ、お前善兵衞さん知つて居やらうが……」

「はい」と素直に「よく存じて居ります」

「善兵衞樣も同じ御宗旨で、御信心も爲さるやうぢや、すれば嫁入をしやうとも、お前の願ひの協はぬことは毛頭ない、爾うして夫婦が和合して、一心に佛樣へお事へ申せば、佛樣も御滿足あらせられる、どうぢや、それでもお嫁入を否と云ふぢやな」

「……」

「親の許さぬ尼となつて、一生涯を木の端見たやうに送るより、人間は人間の道を踏んで、立派に人の妻となり、立派に人の母となつて、立派に御佛に事へるが、どれほどに良いかも知れぬ、百姓こそなされてあるが、お父樣は藤堂樣の無足人、苗字帶刀も許されてお在ぢや、人にうしろ指さゝれるやうな事あつては、御先祖へ對しても濟まぬ、大事の處ぢや、よう思案して御返答をせねばなりませぬ」

「……」

「それとも私やお父樣の云ふことに背いて、尼になると云ふぢやわの」と衣子は少しも假さずすり寄つて「返答の仕樣に由つては、私にも思案があるでのう」

美伎子の父前川半七は大和國山邊郡三味田の人なりき、當時の制、百姓にして苗字帶刀を許さるゝは、格別の家柄ならで協はぬことなり、本姓は藤原氏、名を正信と云ふ、美伎子は實にこの人の長女なりき、寛政十年四月十八日半七と衣子との間に擧げたる玉の如き乙女なりき

美伎子には兄ありき、杏助と呼びぬ、弟ありき伴三郎と云ひぬ、更に二人の妹ありき、一人を桑子、一人を菊子と云ひぬ、この多くの同胞の中、美伎子は最も優れて記憶よかりき、最も優れて怜悧なりき、又最も優れて手藝裁縫に長じたりき

(三)

「さ、返答はどうぢや、それ聞かうでな」

母の衣子は自分の膝と、美伎子の膝と突き合ふまでにすり寄りぬ、半七は畑草を吹かせながら、我子のいかに答うるかを待ち居たりき

されど美伎子は答へなかりき、齒に插したる花釵の風もなきにふる〳〵と

慄ふを見き、心に何事をか思案するならんと

「あア」と衣子は投げる如く云つて「これほどに云ふても、私の詞を聞いてくれぬ、親を捨てゝも我意を通す心と見ゆるわの」

「さて〳〵」と半七は惘れた顏をして「斯う剛情な生れでもなかつたが、恐ろしい惡魔どもが胸に宿つたと見ゆるぞよ、強て嫁入をせぬとあればせぬでよい、その代り、そなたの望む尼法師にもさせぬ、十三年の間、蝶よ花よと愛で育てた可愛い娘を、木の端見るやうな尼にして何んになる、合點の行く事でよく心に考へよ、女は良い夫を持ち、良い子を生んで、その子を立派に育てるが身の勤めぢや、佛樣に仕へるのは又その道の人がある、親を持ち家を持ち、人情を持つたものは、尼法師などにならぬものぢや」と不興の體に云ひ切つて、やがて奥の間に入りたりき

「それお父樣御立腹ぢや、お父樣に御立腹を買ふてまで、お前は嫁入をせぬといふか、善兵衛殿が氣に入らぬか、お金持で、家柄がようて、器量のある善兵衛殿が氣に入らぬか、それならばそれと云や、私にもちッと思案がある」

「お母様まことに御心配をお掛け申して済みませぬ、けれど一生に一度の大事、暫時思案させて下さりませぬか」

「おゝ、それは云はいでもぢや、いかに善兵衛殿に義理があつても、お前の心に染まぬことあれば是非もない、この縁談はすぐにも断る、然しそれは善兵衛殿への縁談を断るだけで、お前を一生独身で置かうとは云はぬのぢや、世間は廣い、年頃の殿達も澤山ある、他で似合ひの婿がねを探すわいの」

「善兵衛殿が不足と申すではござりませぬ」と美伎子は判然と「何れとも三四日の御猶豫、その中には確とした御返答を致しまする」

「おゝ、それなれば……それなれば云ふ處がない、ぢやが美伎子、尼法師にはどうあつてもなされませぬぞ、十三の春の花をひざ〳〵と墨染の法衣に包むことは、お父様決してお許しござりませぬぞ」

「はい」と美伎子は素直に答へて「それでは私から御返事を致すまで、私に考へさせて下さりませ、お父様のお詞に背くやうなことは致しませぬ」

「それならば好い、それならばお前の望み通りにしや」

母は據く美伎子に熟考の時間を與へたりき、美伎子は母の前を去ると共に、再び佛間深くへ入る、その後よりぬき足して忍び寄りしは、その時十一の春を迎へし妹の桑子なりき

「姉さん、お芽出度う……」

「えゝ」と美伎子は振り返つて「桑さんでないか、唐突にびツくりするわな」

「姉さんお芽出度う、お芽出度う、お芽出度う」

「おほゝゝゝ何がその様にお芽出度い、桑さんは嬉しいことがあると見ゆる」

「嬉しい〳〵、こんな嬉しい事はござりませぬ」

「はて、何が嬉しからうな、あア分つた、お隣の叔母様奈良へ御參詣と聞いたが、それでは名物鹿の玩弄物貰ふたの」

「違ふ〳〵、そんな事ではござりませぬ」

「それなら何んぢやあろ、お母様にお乳貰ふたの」

「爾うではない、姉さんお嫁入りなさるさうな」

「えゝ」と美伎子は顔を紅くして「これ何を云ふ、誰がそんな事云ふて居た

の」

「皆が云ふて居る、姉さんお芽出度うございます」

(四)

美伎子はその日より佛間の中に閉ぢ籠つて、この一生の大難關を、いかにして切り抜くべきか、佛に入るか、俗に歸するか、二つの中の一つ、何れに決定すべきかを、一生懸命に考へたりき

信仰の心厚き彼女は、まづ御佛の心に頼るべく御圖と云ふを引き見たりき、然もその御圖には「嫁入するを可とする」旨を占はれぬ、彼女の心は此處に始めて揺ぎかけぬ、眞に御佛の教へさせ給ふ如く、人間と生れては人間と生れたる勤めを盡さでは協ふまじ、世には一たん僧籍に入りながら、煩惱の解脱しかねて、惡緣に觸るゝもの少からず、さる輩は妾のみ佛にして心は俗人の俗なるよりもまだ穢し、假令人の妻となり、人の母となり、身を大俗の地に置くとも、奉佛の心だに忘れず、朝な夕な心を清めて、專念に勤行せば、

その身はやがて佛なり、殊には父母の御心に戻りて、不孝の兒と呼ばるゝより、御仰せを畏み參らせて、善兵衛殿に身を任すが、人の道には孝行の花、慈愛の花、一家和合和樂の花、錦の如く咲きてあるを、一たんの心得違ひに、不孝の罪を積まんとしつるよ、われの心は決す、南無阿彌陀佛怨させたまへ、今より人の妻となりて、塵の浮世の塵に染まる身を、願はくば助けたまへ、願はくば救はせたまへ

美伎子が五日の中に、兎つ追ひつ思案して決したるはこの心なりき、六日目の朝、和讃を上げ、心經を讀誦して後、父と母とが對ひ合せて、何事をか語り居れる前に出でぬ、その顏の色は常に勝りて美しかりき

「お父樣、お母樣、私は覺悟してございます」

「おゝ」と衣子は心配さうに此方向きて「どのやうに覺悟しやつたな」

「善兵衛殿へお嫁に參りまする」

「爾うか、よい覺悟しやつたの、それでよい〳〵、それでお父樣お歡び、御代々もお歡び、お前も一人前の女子にならるゝ」

「けれど私、お願ひがございます」

「何か知らぬが聞ける事は必ず聞く、願ひの筋云ふて見やいの」と衣子は莞爾と笑ひながら「裾模様の御紋付欲しいぢやな」

「いえ、左様なものではございませぬ」

「それでは鼈甲の釵、笄でも買へと云ふの」

「いえ、さうでもございませぬ」

「はて、頭の飾り、衣装の好みでもなう、外に願ひとは喃」

「お嫁入をしてからも、毎日朝夕御和讃を上げまする、お經をお手向け申しまする、それを善兵衛様お許しでございませうな」

「おほゝゝゝ」と衣子は堪へぬやうに笑つて「何かと思へば、お前の願ひはそれか、好いとも〳〵善兵衛殿とて同じお宗旨、御和讃上げるを御承知なさらぬ筈はない、それは云はいでもの事ぢやわよ」

「けれどようお掛合ひなされて下さりませ、善兵衛様お許しなければ、その二事お許しのあるお方へ嫁入り致しまする」

「恰悧う見えても流石は小供ぢや、お嫁入をするに御和讃上げるお約束する者はあるまいぞよ」

「いえ」と美伎子は強く頭を掉つて「その事始めから御納得の詞を聞かねば、私お嫁入りは致しませぬ」

「よし〳〵」と半七は引き取つて「善兵衛殿不承知もあるまいが、念の爲めぢや仲人に云はせて遣る、然しそれを承知とお云やつたら、お前快う嫁入するな」

「私、お父様を欺く事は致しませぬ」

美伎子は斯くして中山善兵衛の妻となるべき約束整ひぬ、彼女が蕾の花に厚化粧して芽出度く中山家へ輿入せしは、文化七年九月十五日の事なりき

中山家は庄屋敷の豪家なりき、同時に庄屋敷の年寄役なりき、良人善兵衛との間は宛ら盥の上の鴛鴦を見る如く睦ましく、此處に恙く年を越えて、翌年三月三味田の實家に歸りぬ、世に云ふ里歸りの儀式なり

年は十四なりき、緑の髪の美しさを兩輪に結びて、黒の振り袖裾模様、そ

れに紅と白との下着を襲ねたる姿、花ならば彌生の櫻、月ならば三五夜の光り、村人は皆な戸外に出でゝ、その優れたる態度を見たるほどなりき

第貳章

（一）

庭の櫻は昨日の雨に綻びて、天に揚雲雀、瀬戸の籔に鶯、軟く輕き風天地の間に滿ちて、小川に大根洗ふ白手拭も、産神の社に子守歌謠ふ木綿の袖も、悉く霞を帶ばぬはあらざりき、善兵衛は出居の間の緣側近う、午時の膳に一盃傾けたる醉心地陶然と面白く、眞鍮の獅噛火鉢に身を凭せて、口の中に小謠を謠うてありき

その中庭を隔てたる乾淨房に、機抒る音今日も聞こえぬ、美伎子は長閑き春の日も、一日の草臥だも休めず、朝起きるより家事耕作機織裁縫の事に從ふなりき

「今日も仕事か」と善兵衛は呟くやうに「除り健かでもない身が、仕事過ぎはせまいかな」と側に繩絢ひ居たる老婦に云ふ、この老婦は名をお市と呼びて、善兵衛が幼少の時より、中山家に仕へ居れる婢女なりき

「眞に一寸の間も御休ませなう、御寮人樣のお仕事には誰も感心せぬものぢ
ざりませぬ」
「爾うおらう、過ぎてはならぬ、昨日は畑に出て居たやうぢや」
「二三日前から鍬を取らせて、野良仕事なされました」
「ちよと呼んでたも、幸ひ茶が煎えてある、氣も詰らうに……息を休ませ
て遣らうほどに」
「好い處へお氣が付きました」とお市は聲を張り上げて、「御寮人さま〳〵」
「おゝ」と美伎子はすぐ答へて「何んの用ぞいの」
「旦那樣召しまする、ちよと來らせられませ」
美伎子は良人の用と聞きて、急ぎ機抒る手を止め、急ぎ乾淨房より出で來
りぬ、年は早や二十、花の姿の襁せたるに、手織木綿の縞れ垢づきたるを着
て、是のみは昨日のまゝなる黒髪を、無雜作に櫛卷きして、袖に積る塵を拂
ひながら
「婆ア、さて精が出るの」と笑顏なりき

「美伎よ、そなたまアその樣に精出して身體に障ることないかよ、仕事も大
切ぢやが、身體も大切ぢや、偶には骨休みしやらぬか、それでなうては只さ
へ弱い身に、病氣など生つては爲るまいぞよ」
美伎子は善兵衞の心切を心の中に感謝しながら、徐かに緣に腰掛けて
「御懸念はござりませぬ、身體が弱い故お仕事を致します」
「はて不思議なことを云ふ、身體が弱いゆゑ仕事をするとは、とんと合點行
かぬことぢや」
「人の身は天から授つた物と聞きまする、天から授かる物に、弱い強いの差
別ある筈はござりませぬ、私他に優れて弱いのは、要りが親達の御寵愛に甘
された爲めでござります」
「爾うかも知れぬ、ぢやが身體相應に仕事して置かぬと、却て病氣を惹き起
す、譬へは馬の負ふ炭や俵を、猫や犬に負はせたら、すぐ平太張つて了はう
ぞや」
「それは其筈、猫や犬は物を負ひ歩くが天分ではござりませぬ、天から授ら

れた御用が、ちやんと外にござります」

「ちと休んでは何うぢや、去年五重相傳を受けやつてから、少し仕事が過ぎるやうぢや」

「人は働く爲めに生れたものでござりまするでな、神樣は人間をお作りなさると共に、人間の職業をお定めなされたでござりまするでな、天のお定めなされた職業をせぬ者は、神の御罰で身體が弱ります、私も父母の御寵愛に甘へて、身を安樂に持ち崩してござります、その御罰は覿面、この通り病身でござりまするがな」

美伎子は二十にして早く天分の何たるを知りぬ、力のある限り出精して、天意と神意とに報はんと覺悟しぬ、されど善兵衞は尙美伎子の心の在る處を知らざりき

(二)

善兵衞は不審に堪へぬ如く目を瞬りぬ

「此方不思議なことを云ふのう、私の家には幸ひにも御先祖のお殘しなされた田地もあり山林もあるでのう、稼がずとも何うか斯うか食ふて行かれる、爾うして骨を折るよりも、偶には物見遊山の一つもして、面白う浮世を送る方が、どれほど身體の爲めかも知れぬぞよ」と手づから番茶の煎花を侑めて

「まづ茶でも飮みやれさ」

「お茶受けに、お掻餅でも燒きますするかな」

お市は側より口を添へぬ

「いや〳〵」と美伎子は頭を掉つて「勿體ない、結構な御膳を戴いて、その上にお茶受けなどが要るものかいの」

御寮人樣のお心には何んとも早や感心の外ござりませぬがや、朝は星のある頃からお起きなされて、去年の暮は荒地をお拓きぢや、それが終むと、旦那樣の春着のお準備、それが終むと麥畑の耕作、もうお手が空いたかと思ふと、今度は機を織らせられる、他よりはお弱い身體を二人分も三人分もお働き、村の衆も誰一人賞めぬ者ござりませぬ」

「私は賞められたうて仕事するのではござりませぬ、斯うして一生懸命に仕事をすると、腹の物が良く消化れます、消化れた物が皆な血になります、すれば自然と健康な身體になる、御先祖の御恩を返すも、親達に孝行するも、家の名を揚げるも、旦那樣を大切にするも、身體一つが原ぢや、身體が弱くては何んにも爲きぬ、それで私は一生懸命に働くのぢやよ」

「何んと申して好いか、御寮人樣はまこと佛樣でござります」

「お前も寄る年ぢや、何時までも奉公して居るばかりが藝ではない、一日も早う一本立ちの人間になつて、御先祖のお守りをせねばなりませぬ」

「何時も御寮人樣にそのお話を承ばるばかり、まことお恥かしいことでござります」

「お前が家でも持つとなつたら、私も助けをして進ぜる、何んでも人間は誠の道を守るが第一ぢや、誠の一字さへ守つて行けば、心の中が安穩に暮らされる、身に錦を飾るよりも、心に變らぬ色を付けよぢや、一日に一尺織る機を一寸づゝ多く織ると、三十日には三尺、一年には三丈六尺、それが十年も貯つて見や、小さい家ぐらゐは立派に持てる、一日に一寸の機、それが何んの苦にならうぞ、さうして身を責めて儉約をして、是と云ふ時は客ずお金をさし出す、これが眞の人間ぢや、私はその心で毎日出精、人よりは二人分づゝ仕事をする、その效が假し目前に見えずとも、何時かきつと報ふて來る、その報ひの來た時が、私の望みの協ふ時ぢや、忘れても自分さへよければ、他はどうでもよいと云ふやうな、卑しい心持つまいぞや、天道樣から御覽じたら、誰彼の差別もなく、みな同じお子達ぢや、人の爲めには水火の中にも入り、自分の榮耀には、口の端を爪つて置く、さうすれば今の間に家が持たれる、精出して仕事しや」

お市は遂に感極つて泣き出しぬ、善兵衞も我妻ながら誰に敎へられしともなく、道を說く、その詞の悉く理に當るに驚きながら

「又講釋を始めたの、佛樣も大事ぢやが、病氣してたもるなよ」

「三四年の間には、健かな身體になつて、立派な小供を產んでお見せ申しまず、二人前の仕事をすれば、殘る一人前のお惠みが、身體の肉に着くでござ

りませぬか」

「はて、慾の深い、それでは佛樣も喫驚なさらうぞ」と善兵衞は大きく笑ふ

美伎子のこの詞はやがて事實となつて、文政四年七月二十四日二十四歳にて玉の如き男の兒を擧げぬ、名を善右衞門後に秀司と改めしは此なりき、後七年を經て同じき八年四月八日、長女政子を安産、文政十年九月九日二女安子を擧げき、然も極めて健かなり

第參章

（一）

「坊樣、御病氣さうにござります、ちとお宜しいのでござりまするか」

一村の束ねをする大庄屋はその村の主權者なり、白き壁には朝日の光り輝き、槻の老木には何時も變らぬ風の音長閑に通ふ、瀨戸の水車に春の水は回り、表の垣根には名も知れぬ草花、宛らに錦を織る、されど子の重き病に打ち伏せるに由りて、白き壁に曇りかゝり、花の錦に黑き影見えぬ

この村の大庄屋足達源右衞門の一子照之丞と云ふが、生れ落つるより虛弱多病にて、日ごとに衰へ行くなりき

「皆さん心切に尋ねて下さるのう、そのお志嬉しう思ひまするぞ」

源右衞門は出居の間に烟草燻らせて、日に幾人となく見舞ひに來れる地下の百姓に挨拶するなりき

その內庭には此等見舞ひの人を犒ふべき酒の場あり、握飯は幾個かの堺重

に盛られて、人々の來り食ふに任せたり、多くの見舞ひ人は、子息の病氣を訪ぬると云ふよりも、寧ろこの酒、握飯に心牽かれて、蟻の甘きに付くが如く集ひ來れるなり

「坊樣は何の樣にお惡いのでござりまするな」

「不幸に乳が足らぬでの」

「おゝ、お乳が足りませぬ、それはお不憫さうでござりまするな、お金もお米もお藏の中に唸るほどあつて、お乳の足らぬのは致し方ないものでござりまするな」

「是ばかりは金の力にも及ばぬでの」と源右衞門は力なく云ひながら「……」

……見舞ひに來て下されたのぢや、何もないが酒一つ飮んで下され」

「お取込の中を御雜作になつて濟みませぬ」と一人の百姓は頭を掻きつゝ、其處に居合せたる五六人を見返りぬ

「然しお志を無にするも切角ぢや、一盃戴いて行かうかの」

「それも爾うぢや、さらば御雜作に預るか」

「まづ此方から行らつしやれ」

「いや、そなたから始めさつしやれ」

心が前へ走るほどづゝ逡巡して、どやく〳〵と酒の場へ亂れ入る。奥の間には母親のおとくが照之丞をかき抱きて、痩せたる乳房を銜ませる、照之丞は蒼き顏、尖りたる鼻、目の中は乾きて泣く聲咽喉に煎り付く如し

「ちとどうでござりまするな」

次の間から木綿縞の前垂を外しながら入り來るは美伎子なりき、おとくは見て

「お美伎さんか、よう尋ねて下されます、お蔭で今日は少し好いと思ひますが、何を云ふにも肝腎の乳が足りませぬでな」

「それはお困りでござります、乳の足らぬほど不憫さうなものはござりませぬ」

「照之丞が泣く度に、身の肉を削られるやうに思ひます」

「爾うでござりませうとも」と美伎子は同情の目を照之丞の上に注いで「甚

うお痩せなされましたな」

「四五日以來、めつきりと痩が見えて參つたわの」

「痛はしやの〳〵、出もせぬ乳房を此やうにお探りなされてござりまするが な」

この憐れにいたいけなる樣を見ては、他事とも思はれぬまで涙さし含みて、美伎子は暫時詞なかりき

「おゝ、お美伎さん、又見舞ふて下さつたか」と源右衞門は店の方より入り來りて「今日は風が寒い、酒一つどうでござるな」

「私お酒を戴きには參りませぬ」

「爾うではあらうが村の衆も大勢來てござらッしやる、酒が行けずば握飯食べさつしやれいの」

「有難うござります、けれど私御飯戴きには參りませぬ」

「何時も物堅いこと云はッしやるの」と源右衞門は美伎子の心に感じながら「此方の目に照之丞の病氣全快するやうに見えるかの」

「大丈夫でござります、神樣は正直をお守りでござります」

「私も此までに五人の子を擧げたが、一人も殘らず取られて、まことに心細う思ふて居る、それで照之丞ばかりは何うかして此方のものにしたいと思ふが、この樣子では何れとも云ひ難ねる、此方の懇意さきに、好いお醫者でざらぬかな」

「然しお庄屋樣」と美伎子はきつと振り向いて「お藥よりは誠心でござりまするな」

「藥より誠心とは、不思議な事をお云ひぢやの」

「お醫者樣もお藥も、大切ではござりまするが、人間の身に大切なは誠の一字でござります、誠さへ屆けばどんな病氣もきつと全快するでござります」

「ほゝ、すると看病次第で、快くなるとお云ひぢやの」

「斯樣な事を申しては濟みませぬが、私は照之丞樣をお預り申して、この病氣を快くしたいと存じます」

「はて」と源右衞門は膝を前めて「お美伎さん、何んと云はッしやる喃」

（二）

「人の誠は天の誠を全う致します、誠の一字は嚴さへも徹します」と美伎子は力のある聲にて云ひしが、更に又詞を續けて「毎日御差配になつて居るこの村も、原は茫々とした草原でございました、それが此やうに開けたのは、要り人間の誠が天道を全うしたのでございます、米や麥は實るに極つて居ります、これが天の道でございます、然し耕作もせず、肥も與へず、自然のまゝに捨て置いては、一石の處を一升も穫ることは能きぬのでございます、それを耕作に骨折つて、一石の處は一石五斗、一石五斗の處は二石と、少しでも多く收穫するのは、やはり人間の誠でございます、人がこの世に生れたのは天の道、それを大切に養ひ育てゝ、五十の定命を七十八十まで活き延びるのが誠と申すものでございます、照之丞樣がお生れなされたは天の道、御病氣にお罹りなされたは、麥や米に蟲がついたも同じでございます、これは人間の誠を以て除けてお上げ申さねばなりませぬ」

「これはお美伎さんの云はれる通りぢや、然し耕作に精を出しても、肥がなうては木が育たぬ、いかに病氣を快くしやうと思ふても、照之丞には乳が無い、困るのはこれでござるわの」と源右衛門は泌々云ふ

「御心配なされますな、乳は私が澤山にござります」

「誠に安子さんは幸福ぢや、お前さんのやうな健康な母を持つて、澤山の乳を呑まつしやる」

「お庄屋樣、斯う申しては自慢するやうで濟みませぬが、私も以前から健康ではござりませぬ、弱い身體を一生懸命に鍛ひ上げて、これまでにしたのでござります」

「ほゝ、身體を鍛ふには何うすれば好うござるな」

「道を勵むでござります、天の道を助けて、人の誠を盡すのでござります、人は働く爲めに生れたものでござります、それを何んの仕事もせいでぶらぶらと遊んでばかり居るは、つまり天の道を踏まぬのでござります、玉は磨けば光りが出ます、人は働けば健康になります、私も人間と生れた甲斐には、

一人でも人が助けたうございます、照之丞様を預けては下さりませぬか、これ御覧なされませ、この様に乳房が張つて居りますがな」

美伎子は肥えて色白く、頭のみ黒き乳を出して見せたりき、源右衛門はいかにしても我子助けたさの念のみ燃え、いかにしても我子の病氣除きたき心のみ頻りなる折柄なれば、思はずも目を光らせて

「こなた照之丞を預つて下さるか」

「私一生懸命に御介抱、きつとお命を取り止めてお目に掛けます」

「然しお前さんにも、小供衆があるではないか」

「姉の政はもう乳放れを致して居ります、妹の安子には右の乳一つで十分、左の乳を照之丞様にお上げ申して、私の心の誠——この誠のあらん限りを、照之丞様のお胸へ吹き込み、御全快の歓びをお見せ申します」

「お美伎さん、お前さん直個かいの」

「お庄屋様のお詞ではございまするが、私この年まで一度も偽言云ふた事ございませぬ」と美伎子は容を改めて云ふ

「さうしてお前さんの手で介抱して下さりや、此上の歓びもないが……善兵衛殿不承知はあるまいのう」

「良人も道を知つて居ります、人の命を助けるのに、不承知を云ふほど分らぬ人ではございませぬ」

「それでは照之丞を……」と源右衛門は除り嬉しさに、まだ美伎子の詞を信じかねて、「引き受けて下さるかいの」

「一たん云ふたことを間違える私ではございませぬ、第一は安子一人に餘る乳を、さし上げる便宜がございます、第二には私の心の誠——人間の誠で人の命を取り止めることが能きるか能きぬか、一生懸命に遣つて見る心でございます」

「それほどまでに云ふて下さるも、日頃信ずる氏神の御利益に相違ない、これ」と妻のおとくを見返つて「そなたお美伎さんの詞聞いたぢやな」

「此處で有難涙に暮れて居ります」

「爾うおらう〳〵、それでは照之丞を預けるかの」

「お美伎さんさへお厭ひなくば、預つてお貰ひ申さうと思ひます、斯うして置いては日ごと夜ごとに、照之丞の肉の落ちるを、見て居る外ございませぬでな」

「誠に爾うぢや、それではお美伎さん、引き受けて下さるか」

「きつとお引き受け申します、安子の命と取りかへても、照之丞様のお命は私の手で取り止めてお目に掛けます」

「それではお頼み申します」とおとくは懐に抱き居たるを、膝の上へ抱きかへぬ

照之丞は絲繻の衣服に包まれて、痩せたる口にひい〳〵と引入る如く泣く、美伎子はすぐに抱き取りて

「おゝ好いお子さまや〳〵、今日からは叔母の乳をお上げ申します、此方の安子、此方のは照様のでござります」

云ひながら乳房を含まする、乳に飢えたる照之丞は忽ちに泣き止みで、宛ら磁石の鐵に吸はるゝ如く口を寄せぬ、美伎子は嬉しげに

「これ御覧じませ、よく〳〵お腹が空いて居るかして、この様に歎んでお嚥りなされます」

「眞にの」と源右衛門はすり寄つて「美味さうに呑むわよ〳〵」

「もし」とおとくは呼びかけて「お美伎さんにお禮をなさらねば爲りませぬ」

「いかにも〳〵、餘りの嬉しさに其事を忘れて居た」

「私お禮は受けませぬ」と美伎子は斷乎と云ひ切つて「お禮欲しさに照之丞様をお預りは申しませぬ」

「それでも此儘ではなるまい、眞の私の志ぢや」

「お志は受けまする、なれどお禮は受けませぬ」と美伎子は動くさまもなく

「それでは照之丞様をお預り申して歸ります」

云ふが否な起ち上る、源右衛門は慌いで

「これその様に云ふものではない、まづ待たつしやれ、これは眞の……」

と手繦綰の新らしきを取らんとす

云ふ中に美伎子の姿は見えずなりき、美伎子は照之丞を抱きたるまゝ、表

の方へ出で行けるなり

第四章

（二）

「暫く見ぬ間に見違へるほどもお肥えなされた、坊さまを好いお方にお預けでござりましたな」

源右衛門方に出入する作男、及び作男に伴れ添ふ女房どもは、日ごとに美伎子の家を訪ひて照之丞がいかに養育され居れるかを見て行くなり、見て行きて主人の源右衛門に報告し、源右衛門の喜悦に溢るゝ面を見るをもて、日毎の仕事の如く爲るなり、實に源右衛門は幾十反の圃の麥の菜の青々と繁り榮ゆるよりも、幾町歩の田に稻の花の粒々香ばしく咲き滿つるよりも、照之丞の健全に生長し行くを樂むなりき

然も照之丞は美伎子の乳を哺むやうなりたる後、めき〳〵と肥え太りて、蟲氣だも見ぬ全き身體となりぬ、身體の健全に爲り行くと共に、智慧付きも亦早く、三月足らずの間に、愛らしく笑を見するほどゝなりつゝ、肉身の愛よ

り他人の誠、著く肉となるなり、美伎子の照之丞に對する眞心は、やがてその實子に對するよりも厚かりき

源右衞門は此樣を見て、美伎子を神の如くに敬ひぬ、領主地頭の前へ出でたる外、曾て頭を下げたる事なき身が、美伎子の前には頭を下げて

「お美伎さん、有難うございます、よく面倒を見て下さります、お前の扶けが無ければ、照之丞は死んで居りました、照之丞に別れては私も家内も生きる甲斐が無いで、何處ぞの淵川へ身を投げるかも知りませぬ、すればお前は母子三人の命の親でございます、このお禮は物で爲ることも能きぬ、この御恩は金で送ることも能きぬ、長い目で見て下され、私も嬉しさは知て居る、お前の恩を忘れること爲ませぬで喃」

「いえ〳〵」と美伎子は高ぶつたる顏もせず「私はお禮欲しさに照之丞どのの世話は爲ませぬ、私は神樣のお心に由つて、善人の命を扶けるのでございます、決して心配して下さりますな、照之丞殿を玉にしてあなたのお手へお返し申します」

實に美伎子の云へる如く、美伎子は謝禮欲しさに、この爲るまじき他人の世話を爲たるにはあらざりき、源右衞門は夜ごと日ごと美伎子を神と伏拜みて我子の無事に成長せんことを祈りき、同時に美伎子の身の何日までも幸福ならんことを念じき

「照之丞はお前に任せます、親の手にも育たぬ身が、お前の誠に育つのぢや、いつまでもお前の側に置いて下されい、私はそれが願ひでござるよ」

「右の乳は照之丞殿に進ぜてございます、左の乳で安子が育てば、右の乳で照之丞どの育ちます」と美伎子は例も優和しう「雙生兒を持たと思へば何ともござりませぬ」

あはれ此歡びは束の間なりき、布留野の御社に櫻の花雪と散りて、庄屋敷の南を流るゝ布留野川に、落花の影香ばしく漂ふ頃、照之丞は急に難り泣くやうなりぬ、風邪にても冒きたるならんと、美伎子おさ〳〵手當を盡したるが、その夜より大熱、醫師の藥も、寺々への加持祈禱も、つゆ驗現はれずして、三日の後疱瘡と確定しぬ、當時の風俗、人間一生の大事として懼れたる

は此の難病なり、一生に一度は必ず超えざるべからざる大難關として、人の恐れたるは此の病氣なり

「こりや疱瘡ぢや、よく手當をせねばならぬ」

美伎子は醫師の口よりこの宣告を聞きたる時、思はずも吐胸をつきぬ、疱瘡は生死の境なり、もし源右衛門最愛の子を冷たき骸にして返すことあらば、初め此方へ引き受けたる效も無し、願くば以前の清き身體にして返したけれど、人間の力に何とも爲し難き重病なるを如何せん

美伎子の苦勞心配は餘所の見る目も氣の毒なる程なりき、されど普通の疱瘡は尙全快の見込みなきにあらず、照之丞の容體は愈よ險しくなり行きて、更に八日の後、黑疱瘡に變りたるぞ是非も無き、柳の枝に降り掛る雪は次第に積り行きぬ、枝折るゝか、雪落つるか、柳の力を試すべき時は今なり

(二)

普通の疱瘡は難治の中にも治癒の見込みあり、紅き頭巾、紅き衣裝、紅き

帶のいろ〳〵は、時に病魔を逐ふことあれど、黑疱瘡と變りては十の物九まで不治の症と決めねば爲らじ、美しき玉として返すべく誓ひたる照之丞を、冷く石の如き骸として源右衛門の手に渡すは、いかにしても忍び難き事、又これのみは人の力、藥の力に及び難きを何とかせん

「まづ難しうござりまするな、お藥をお進げ申した處で、容易に效驗はあるまいと思ふに由て、一服も進じませぬ、然し大事にさつしやれや、壽命があれば全快する例が無いにも限らぬでの」

態〻丹波市より招きたる名譽の醫師は、この頼み少き口上を殘して去りぬ、夏の初めの日は暮れて、外に蛙の鳴く音喧がしう、若葉の末にしと〳〵と露の滴る響きして、善兵衛が家の奥座敷に心配顏せる人の影疎なり

掻き立てゝも〳〵、淡暗く爲り行く燈火の光りに照られ、美伎子の懷に葬と抱かれて、照之丞は力なく眠る、昨日まで白羽二重の如くなりし頰の上一面に燒け焦げたる如き疹ありて、凹みたる眼皮石の如く重げなり、いかにし

ても頼み難き此容體を前に見て、源右衛門は悲しげに太息つく、彼は自ら大患に罹りたるよりも深き苦痛なり

「坊よ、照之丞よ、さぞ苦しからうのう、熱で焼けて手も足も黒うなつて居る、これでは大人も堪へられまいに、水の滴見るやうな小供の身に、これほどの苦痛堪へられさうな筈が無い、私は見るごとに肉が減て行く、お美伎さん、どうしたら可からうのう」

實に血を嘔く如き聲なりき、美伎子は白く雪の如き肌に、半死半生の照之丞を引き付けて、じつと顔を打ち守る、源右衛門の後には善兵衛ありき、この左右には妻、親戚、出入の者八九人、深き苦勞の中に垂頭れぬ

「私は何故このやうに不幸であらうのう、五人までも子があつて、一人も生長せぬ、照之丞だけはお美伎さんの心切で、どうか斯うか一人前の男になつて呉れるかと樂んだ甲斐も無う、この病に罹り居つた、よく〳〵小供に縁の薄い生れと見ゆる、然し子があつてこそ家業にも精を出す、財産を讓る子が無うて、庄屋も無足人もあつたものでござるかいの、私は一反の田地持たぬ水呑百姓に零落ても可い、どうぞして子が欲しい、照之丞が助けたい、千兩二千兩三千兩の金に換へても、照之丞が助けたい、お美伎さん、「私の胸を察して下され」

美伎子は尙垂頭れて詞なかりき、此處に併居る人々は云ふまで無し、情無き燈火まで、源右衛門の切無き心を推量せるが如く、朦朧と暈を被て頼みなき病兒の姿を照らしき

夜は闌なり、月の涙は半となりて、藥葺屋根の庇に落ちぬ、萬籟寂として音無く、時々刻々に薄り行く照之丞の息の音のみ、淋しき人々の胸に響く

此時美伎子は卒然として頭を擡げぬ、幾日幾夜を看病に費して、一睡だもせぬ眼の緣にも、絶えて疲勞の樣は見えず、清しき瞳孔は明星の天に燁く如く光り、きつとして犯すべからざる威權は自ら美しき眉痕の間に溢れて、宛ら神像の坐すが如く神々しかりき

「源右衛門樣、お醫者樣は頼みになりませぬ」

力ある聲は締り好き唇を漏れ出でぬ

「さうぢや、これほどの大病になると、醫者は少しも頼みにならぬ、匙を投げて逃げ出し居る」

源右衞門は落膽したる聲にて云ふ

「藥も頼みにはなりませぬ」

「てんで盛て呉れぬで無いか」

「平生には心切に見舞ふて下されたお方もござります、然しこれほどの大病になつては、人さまも頼みになりませぬ」

「實に人間ほど詰らぬものは無い、まさかの時に酒飲むのと飯食ふのと、他に何んの役にも立たぬものぢや」

「然し」と美伎子は詞を改め「神樣がお在でござります、此上は神樣のお袖にお縋り申す他ござりませぬ」

(三)

「さ、その神樣ぢや」と源右衞門は一膝進み「私も神樣より外頼むお方は無いと思ふで、第一が布留のお社、遠い處で奈良の春日樣、熊野の權現、お伊勢樣まで代參をさし向けたが、それでも御利益は下されぬ、照之丞は見殺しぢや、どうしても見殺しぢや」

「爾う仰せなさるものではござりませぬ、御心配なされますな、照之丞殿のお命、私がお助け申します」

半ば谿底へ陷りながら兩手に太き藤蔓を握りて、身を死地より脫せんとする機智ある人の叫びを聞く如く、美伎子はほと吐く息の下より云ひぬ、されど源右衞門は我耳を信ぜざりき、醫師、藥、神佛の力を以てしても、回復の望み立ち難き大病人が、手弱き美伎子の手に由りて、蘇生すべき謂れ無しと思へるなり

「お美伎さん、何を云はしやれたの」

「御安心なされと申したのでござります、私の手で美事に坊樣のお命を取り止めてお目に掛けます」

源右衞門よりもまづ驚きたるは善兵衞なり

「これ好い加減な事云ふまいぞよ、諸國神々へ御代參をお掛けなされても、驗の無い照之丞どの御病氣が、お前の手で治りさうな筈が無い、命懸にお引き受け申した事の調はぬほど、先方樣でお心持の惡い事は無い、瓜の蔓に茄子を生らせる難しい約束は何の道にも爲ぬものぢや」

「いえ、私は致します、照之丞どのお命はきつと取り止めてお目に掛けます」

と美伎子の聲はいよ〳〵昂る

「お美伎さん、お前眞劍で云はつしやるか」と源右衞門は再び問ふ

「私は生れてから僞言を云ふたことござりませぬ」

「眞成かいの、眞個に助けて下さるかいの」

「長い目で御覽なされませ、私の胸にはちやんと手答へがござります」

美伎子は貧乏搖ぎもせざりき

「お前、その樣なことを引き受けて可いかのう」と善兵衞は心ならず念を押して「照之丞どの黑疱瘡に罹つて居るぞよ」

「神樣のお目からは、黑疱瘡も風邪も皆な同じ事でござります」

「やつぱり神樣に願はつしやるか」

「人間の力で能きぬ事は、神樣のお袖に縋るよりほかござりませぬ」

彼女は實に斯の如く信ずるなりき、如き心に祈らば、神の受納無き筈はあらざるべしと信ずるなりき、人間一生涯の至誠を捧げて、清く水の如くにこの身の預り養育せる照之丞の一命を取り止むる爲め、もし金錢の力にて病疾の根を斷ち得るならば、家の財産悉くを投げ出すこと惜しからじと覺悟せるなり、もし身替を犧牲にして、恐しき黑疱瘡を全治し得るものならば、家の世繼の善右衞門(後に秀司)こそ爲るまじけれ、我身の生命を眞前に捧げん、我身の命のみにて足らずば、娘安子の命を捧げん、もし又一代の食運をもて替ることを得ば、われは終生を木食に過すも厭ふ所あるまじと思ひたりき

「神樣に願ふとて……」と善兵衞は尙心許無げに「日本中の神樣には皆な願が掛けてあるでないか」

「何事も私にお任せ下さりませ、神樣のお袖に縋りまするか、又は奈良郡山大阪のお醫者樣を經廻つて、お藥を頂戴しまするか、篤と考へた上に致しま

す」と深く覺悟する所ある如く云ひ切り「お際さん、ちよとお頼みござりま
す」
お際と呼ばれたるは、源右衞門の家へ出入して、小作に從事する小百姓の
女房なり、三十あまりにや爲れる、照之丞の病氣を見舞ふべく、先刻よりこ
こへ來り居たるなり
「はい〳〵」と膝を進めて「什麼か御用ござりまするか」とお際は極めて氣
輕なり
「まこと御無理なお願ひでござりまするが、お前當分安子を預つては下さり
ませぬか」
「お易い御用、何日でもお預り申します」と口には云ひしが、不審の雲は黑
く掛りて「お前さま、眞實のお子を私に預けて、後を何のやうに爲さるお心
でござります」
「照之丞を介抱するに邪魔でござりますとはら〳〵涙を溢しながら「坊樣のことを
「あなた、それほどまでに……」と

思召して下さるのでござりまするか」
「思ひ立たことは仕遂げねばなりませぬ、安子が片々の乳房に縋り付いて居
るやうでは、照之丞の介抱を專らに致すこと協ひませぬ」
お際のみにはあらず、美伎子のこの清く美はしき詞を聞きたる時、一座皆
な感涙の襟を霑すを禁め得ざりき
「宜しうござります、お前樣がそれほどに思召して下さる御眞實の萬分一を
酬けるは、私此上もない歡びでござります」とお際は一儀にも及ばず「御安
心なされませ、安子樣は私きつとお引き受け申します」
「おゝ」と美伎子も滿足して「有難うござります」
「安子さん何方にお在でござります、どうぞお伴れ下さりませ、私は照之丞どのに
「納戸に寢かせてござります、一寸も手が引かれませぬ」
この間も美伎子は犇と照之丞を抱きたるまゝなりき、壁一重を距てたる納
戸には、骨身の血を分けたる安子の飢えに泣く聲すれど、美伎子の耳には入

らざりき、黒疱瘡の熱氣燬ける如く胸を打てど、美伎子は少しの感じもなかりき

照之丞の身體には、美伎子の誠絶えず通ひぬ、美伎子の誠通ふことなからしめば、照之丞は夙く已に激しき熱氣に焦げ居たるならん

(四)

夜は更けぬ、豐田山の森は黒く籠りて、血に餓えたる梟の鳴く聲丑三時の寂しさを破り來る、春は全く去りたれど、花の香はまだ消えやらで、四月中旬の月天は仍おぼろに霞めるなりき

美伎子は洗足に露を踏みて、この淋しき眞夜中を、土地の氏神春日神社の前に來る、おぼろ月は圓く暈召して、鐘子山の上に懸り、生溫き夜の風は、幾十日梳りたること無き髪の亂れを吹き搖かす、衣服の襟は垢付きたれど、その上に溢るゝ信心の涙に星は宿りて、きら〳〵珠玉心に輝き、帶の絲目は綻びたれど、誠を結びたる容は頽れず、冒し難き威權自然に現はれたり

美伎子は一心の誠を捧げて、預り子の命を助けんと發起せるより、全く寢食を忘れ果てぬ、全く家事を忘れ果てぬ、良人善兵衛は原より、日頃親くせる人々にも理を告げず、夜ごと人の寢靜まるを待ちて、そと居間を忍び出で、普通人には夢にだもなるなしき大願を心に掛けて、雨の夜、風の夜、電光膽を射り、雷おどろしく鳴りはためく恐しき夜、一夜の撓みも無く春日明神に祈誓を籠めて、洗足參りをするなりき

奈良二月堂、稗田の大師、武藏野の弘法大師には三年三月の願を掛け、氏神春日社には夜ごと洗足參りして、一心不亂に照之丞の全快を祈るなり

然もその祈禱は普通の祈禱ならざりき、踵は石に傷けられ、爪頭は木の根に破られて、彼女の往復せる道芝は、悉く時ならぬ紅葉を見せぬ、誠の蔭は美はしくその紅葉の色に籠れるのみならず、聲も詞も皆な嘔血の響きならぬはあらざりき

「氏神樣へお願ひ申しまする、私は利慾の爲にこの祈願を籠めるのではござりませぬ、私は庄屋樣の御機嫌取にこの願ひを致すでもござりませぬ、私の

心は神明佛陀よく知らせられてある事と信じます、照之丞は私の乳汁で育つたものでございます、腹を痛めた子と同様、私の血を分けたものでございます、乳は血でございます、血を分けた子の可愛うない筈はございませぬ、私は照之丞可愛さに、この御無理なお願ひを致すのでございます」

御社の前に春草繁りて、樹の間漏る月白く、寂たる境を照らす、美伎子はその春草の露の上に坐りて、一心に祈誓するなり

「庄屋殿はこれまでに五人の子を、同じ黒疱瘡で失うて居られます、世に親の子を思ふ心ほど切ないものはございませぬ、五人の子を奪られた後に、ひよつこり授けられた一人子は、實に寵愛の凝塊でございます、實に御夫婦の命でございます、このお一人兒の命まで奪られることとございましては、庄屋殿のお心眞に暗でございます、庄屋殿の暗は村一統の暗でございます、照之丞をお助け下さりませ、源右衛門殿夫婦のお命をお助け下さりませ」

大地に額をすり附くる、この愍に呱々と赤兒の泣く聲す

「おゝ身替り居やるか、犠牲居やるか」

初めて心付きて、愍の中さし覗けば、月に照る安子の顏雪よりも白く、母の顏を見上げては心無くにこ〳〵と打ち笑むなり

「安子よ、そなたは眞に血を分けた子ぢやものをよ、可愛う無くて何んとせうぞよ、さりながらどうせ一度は死ぬる身ぢや、蕾の中に散るも、咲き亂れて後に散るも、花の命に變りは無い、母が賴むでな、折り入て賴むで晴、照之丞の身替りになつてたもるぢやぞや、よいか、よいか」と涙に冷たき頰をすり付けて、「お際どのに預けてから、くり〳〵とよう肥えやつた、この珠のやうな命を義理の爲めに碎くと思へば、私の胸も張り裂ける、然し他の身替になつて、美しい命を捨てる者は、未來で極樂の主になる、母が賴みぢや、母が詫する、怨してたもれよ」

冷たく露を含みたる夜の風は、羽二重より柔かな安子の顏をそよ〳〵撫でぬ、安子は只笑顏なり、甲斐なき運命がこの身の上に振り掛り居れりとも知らず笑顏なり、この笑顏は鋭く美伎子の胸に當る

されど我子の愛に牽かされて、高く清き心の覺悟の鈍るべき美伎子ならず、

彼女は突然と起ち上りぬ

「この子を借りて來やうとした時、お際どのは嫌な顏をせられた、十日二十日乳を哺ませたのでも、愛情が浮ぶと見える、安子にも澄まぬが、お際どのにも澄まぬ、怨して下され〳〵」

心の中に休拜みつゝ、徐に安子を懷より出したり、月はおぼろに照り渡る、安子はこの時も尙笑を見せぬ

「氏神樣へ御願ひ申し上げまする、何卒照之丞の命をお助け下さりませ、もし照之丞の定命盡きて、神の御手にお救ひ下さること爲りませねば、私の子を身替りにお取り下さりませ、善右衞門は惣領、これは家の相續を致さねばなりませぬ、善右衞門を除いて安子の命をお取り下さりませ、こゝへ召し伴れた此兒の命をお取り下さりませ」

彼女の信仰は今や殆んどこの高潮に達したり、彼女の眼許には一點の紅自然さし來る、天は猶をこめたれど、彼女の雙眼は淸く曇りなく輝きたり

「氏神樣へお願ひ申しまする、照之丞の身替りには、さし詰めこれの安子を

お引き取り下さりませ」

谷間の水の石に當りて鳴るが如き淸しき聲、この聲の切れ目〳〵には、幾度も稽き、又幾度も安子を見る

「安子の命で不足でござりますれば、此後に產みまする小供の命を、お取り下されませ、廣大無邊の通力に由つて、此願ひお聽き屆け下さりませ、安子を身替りにさし上げまする、この命をお取り下さりませ」

彼女の至情、やがて天へや通じたる、一陣の風さとおろして、大師の御堂　動ぐが如く、樹末より落つる露の玉、はら〳〵衿にそゝぎ來る

第五章

（一）

「お芽出度うございます〳〵」

門口、臺所、出居の間の一ばいに寄り集りし村の者は、主源右衛門夫婦に對ひて、一子照之丞全快の歡びを述ぶるなり

今日か明日かと臨終のみ待たれたる照之丞の黒疱瘡は全快して、三十日に出でし月よりも美しき以前の健なる身體となりつゝ、源右衛門夫婦の喜悦、善兵衛夫婦の滿足、一ケ村人々の驚駭、この日芽出度く照之丞を家に引き取りて、全快祝の酒宴を開かんとするなり

赤飯、胙、餅、燒物、酒、昨日から準備せし喜びの馳走は、山の如く座敷に積れて、村の者一統を客に招きぬ、正客は命の親の美伎子、善兵衛、この他は年順に由りてずらりと併ぶ、源右衛門は小紋の羽織、妻は裾模樣の小袖に、九死の間より蘇生せる照之丞をかき抱きて、酒の座へ出で來る、その四

方より浴せかけて

「旦那お芽出度うございます、お家さまお芽出度うございます」と口々に云ふなりき

「これと云ふも全くお美伎さんのお蔭ぢや、お美伎さんの丹精なくば、照之丞は黒疱瘡に一命を奪られて居る、私は大醫名醫の名薬よりも、人間の丹精に效驗のあるを初めて知つた、照之丞は薬で全快したのぢや無い、全くお美伎さんの丹誠で快くなつたのぢや」

「眞個でございます」とお際の亭主政右衛門は膝を進めぬ「然し、何でございます、お美伎さんの如なお方が、お隣にお住居なされて、坊さまの御介抱為されたのも、旦那様御運の強いのでございます、お美伎さんの丹誠が御當家の土壘に為つたのでございます」

「何れにしても此の様に芽出度いことは無い」と源右衛門は歓び酒に目の縁を紅くして「善兵衛さん、熱いのは何うぢやの」

この談話の中に盃の數は重りて、善兵衛は眞紅になりぬ、他の來客手傳人も悉く面に霞を引かぬは無かりき

「もう澤山——もう結構——照之丞様全快のお歓びといふに、今夜は存外頂戴、もう堪りませぬ」

「爾う仰せられる程でもない、今夜はお前方御夫婦が正客、熱いのをもう一献飲んで下され」と源右衛門は銚子を取る

「いや〳〵」善兵衛は座蒲團から滑り出て「此上を戴いては歩くことも能きませぬ、それに今夜は免れぬ用がございまして、これから丹波市まで參らねばなりませぬ、平に御用捨下さりませ」

「什麼かは知らぬが、今夜に限ることでもあるまい、切角の祝ひ酒、もう一献だけ飲んで下され」と源右衛門は強て勧めて「此の席に此方が居て下されぬと、御神體のない拝殿でお日待する様でござるわの」

「その代り家内のお美伎が二人前戴きます、私は居ませいでも、家内がお邪魔してあれば、それでお座敷は榮えます」と云ふ中も不覚となりて「お美伎ちよと頼みます」

「お前様、何處へお越しなさるのでござります」と美伎子の眼は清しく光る
「據なく頼まれたことあるで、丹波市まで行かうと思ふ、一時の間に歸る、私に代つて皆様へお相を頼む」
「お早うお歸りなされませ、途中にお氣をお付けなされませ」
「亥刻までも掛るまい」と善兵衛は眞面目になつて「左様ならお庄屋様、これで御免を蒙るでござります」
「ぞうあつても歸らつしやるか、さて不本意な」と源右衛門は不快なり
「皆様も御免下さりませ、何れ明日お目に掛るでござります」
善兵衛は遂に去りぬ、其擧動いかにも輕々しく、將たいかにも慌て氣味なりき、人々は不審の雲晴れ難ねて、互に目引き袖引きすされど美伎子は什麼の關はる所も無く、悠然と坐りてありき、彼女の眼には人々の住き所のみ見えて、惡き點は映らざりき、彼女は宛にして神なりき、少くも神の心に通へる神々しき態度なりき

「什麼ぢやつら、善兵衛の素振、ちと異しいやうに見えたのう」
皆時して座中の一人は口を切りぬ、皆が云はんとして云ひ難ねたる事なれば、此聲の傳はると共に、一座は忽ち動搖めき渡りぬ、政右衛門は美伎子の顔を見返りながら
「お前方、おかの存じか」と笑ひ顔に問ひ掛けぬ
「おかのとはお美伎さん方の炊婢ぢやないか」と源右衛門は隙さず云ふ
「庄屋様のお目にも止つて居るのでござりますか」
「野中の梅は目に付き易い、おかのは炊婢に似ぬ美し人ぢや」
「それに年が若うござります、鬼でさへ十八の粧ひには、新茶の煮花の香り
すると申します、おかのは十八——まだ二十には手が屆かぬでござりませう哺」
「年齡は幾許か知らぬが、花ならば彌生の色ぢや、今が盛りの」と源右衛門も又美伎子の顔を覗く樣にしつゝ「お美伎さん、氣が揉めはせぬかのう」
「おかのが何うかしましたか哺」と美伎子は什麼の氣も付かず「何處か惡く

ば薬服ませて参ります」
「はゝゝ」と政右衛門は笑つて、お美伎さんも性質が好いのう」
「爾うでござりますか喃」
「おかのゝやうな美し人を家に置いて、もし取られたら何うさつしやる」
「善兵衛は内の主人でござります」
「その主人を……」と政右衛門は云ひ掛けて「……油断さつしやるな、鐵と磁石は一つに置かぬものぢやで喃」
「私方にも磁石は一個ござります、お入用なら何時でもお使ひなされませ」
「はゝゝ」と政右衛門は失笑すやうに「お美伎さんは神様ぢや、それで無うては家が納まらぬ、然し神様にも御罰がある、目に餘ることがあつたら、庄屋様頼んで灸すゑて貰はつしやい、村の者一統、皆が此方の味方ぢやわの」
「善兵衛は灸好きでござります、庄屋様お頼み申さいでも、自分で勝手にすゑられます」
「いよ〳〵神様、これは話せぬ」と政右衛門は頭を抑へて「善兵衛どのは幸福ぢや」
「何故幸福でござります」
「お前の様な家内を持ち、おかのゝ様な炊婢を使ふて、何一つ足らぬ物もなく世を送る、これほどの幸福は無い、のう政右衛門」
「まことにお詞、私も善兵衛どのに酷似りたいものでござります」
席は最愛の子の全快祝ひ、客は親類知音村の者、酒の香は滿ち、笑ひ聲は燈火を搖かして、その間を盃は鳥の如くに飛ぶ、宴の散じたるは戌の下刻、やゝ亥刻に近かりき
美伎子は人々の眞心に送られて、提灯片手に我家へ歸る
中山の屋敷中は廣さ八畝ほでもありき、表門、裏門、本宅、隱居所、それに土藏四戸前添ひて、田舍ながら白壁清く、鏝子山の絶頂に輝ける夏の月は、白玉盤を懸けたる如く、皓々として淋しき夜半を照らしたり

美伎子の足音高く聞こゆる時、隠居所の座敷に、燈火の影ぱッと映りしが、続いて人の咳く聲聞こえ、美伎子が足を止めて見廻る間も無く、燈火は又はたと消えぬ、美伎子は不審晴れざりき、手にせる提燈をさし付けて

「誰ぢや〳〵、其處に居るは誰ぢやの」

裡面には答へなく忍びやかに座敷を出る物音したるが、やがて雨戸をさつと開けて、提燈の火を避ける如く、面を反けて立ち出づるは良人善兵衛なり、止むを得難き用事ありて、丹波市まで行かねばなるまじく、お祝ひの席を恐れあれど、これにてお暇申し上ぐる旨披露、先刻のほど源右衛門方を辭したる良人善兵衛なりき、故意と面を背けたるなゝ

「今歸りか、甚う早いの」

何氣無くは云ひたれど、心の咎めは恐しく、その聲は曇りたり、

第六章

(一)

一もと高き庭の松の繁みを篩して、月は正面に出居の間を照らす、蚊遣の烟も絶え、圓行燈の光りも寂びて、遠く近くに鳴く蛙の聲いつも淋しく、三島の里に夜は更け行く

善兵衛と美伎子とは淋しき縁に端居して、その他に物も無き清き風を飽くまで受けぬ、善右衛門も安子も早や伏床に入りてありき、下男下女は美伎子の隣家より歸りしを見、夜の挨拶を終りて後、各自居間へ引き取りたれど、只おかのゝみは姿無かりき、美伎子は氣付きて

「かのが見えませぬ、何處か惡いのではござりませぬか」

直にその人の安否を氣遣ひて、心配さうに問ひ掛くるが美伎子の平生なり

「いや〳〵」と善兵衛は頭を掉て、「今しがた其處に居たが喃、他所へ行く筈もない、月の庭に涼みして居るでないかな」

「聖の疲れもあらうに、早う寝めばよいを、何日まで起きて居るでござりませう」と同情深く聲を擧げて「おかのゝ〳〵、おかのは居ぬか」

おかのゝ返事は無く、隠居所の戸の開く音聞こえ、やがて臺所に足音して、間の襖の蔭に立ちたるが、おかのらしきに又呼びかけて

「おかので無いか」

「はい」と幽かに答へながら、月影明き出居の間へ顔は見せず「お家さま、お歸りなされませ」

「先刻から呼ぶに、お前何處に居やつたの」

「溜戸に納涼して居りました、まことに涼しい好い風でござります」

「納涼も更けては身に毒、明日の朝が早からうに、寢んでは何うぢやの」

「はい〳〵」と沈着かぬ聲細く「お家さまもお寢みなされては何うでござります」

「私も寢みます、今夜は照之丞どのお祝ひで、甚う御酒を戴いたわの」

「お芽出度いことでござります、お隣の坊さま、彼の様に御全快なされたも皆なあなた様お蔭と、村中で誰褒めぬものござりませぬ」と言巧みに云ひながら、炊婢には似ぬ美しい顔を襖の端へ現はして「お家さま、お休みなされませ、旦那様御機嫌克うお休みなされませ」

語尾慄ふ如く云ひ終りて、そと善兵衛を視遣りたる眼の色、露に潤ひたる花の如く、將た霧に包まれたる月の如くおぼろなりき、心の暗の自然に現はれたるなり

おかのは十九、村人の口に噂さるゝが如く、卑には稀なる姿なりき、炊婢にはあるまじき縹緻なりき、平生は結び髪に手拭冠りて、身裝も作らず臺所を働けど、今日は美伎子の許可を得て、照之丞全快の心祝ひに、京風の島田髷にぞ取り上げたる、粧はねど色は白く、作らねど眉は調ひて、都育ちと云はんとも恥しからぬ風俗、二綟三綟亂れかゝる鬢の毛を、そよ〳〵風に撫でられながら、挨拶終りて起ち上る美しさを、善兵衛は見ぬが如くにして窃み見たりき

美伎子は極めて怜悧かりき、先刻よりの素振に由りて、早くも二人の祕事

を覺りぬ、花の香に酔ふ蝶の思ひを、彼女は自然照る心の鏡に映したり、されど彼女は色にだも見せざりき、おかのがその身の部屋へ引き退るを見送りて

「丹波市の御用はお終みなされたのでござりまするか」

善兵衛には痛き問ひなりき

「どうか斯うか終んだ、お前の歸る一寸前に歸つた處、俗事ほど否なものは無いてのう」

(二)

心掛こそ人に優れたれど、美伎子も尚婦人なりき、嫉妬もあらん、怨恨もあらん、されど彼女は深く謹み、深く抑へて、毫も色に現はさゝりき、その身は嫉妬の火に焼け死ぬとも、良人の心に愉しむ處あらば、それにて妻たる身の務めは足れり、此身は怨恨の畑に巻かるゝとも、おかのだに幸福ならば、良人の身も幸福なるべく、良人の身幸福ならば、中山の家も幸福ならんと、

清き心に覺悟するなり、長き月日の間には、目に餘ることもあれど、沈と堪へてその目を閉ぢき、心に餘ることあれど、沈と堪へてその心を壓へたりき、實におかのゝ事ありて後、彼女の心は曇りたりき、多少の曇りはありたれど、尚胸の底に月の宿りはありき、月は清く美しき覺悟なり、身は一生涯埋れ木となりて果てんも、良人だに樂しき世を送りたまはゞ、恨む處毫もあらじと觀念する清き覺悟なり、彼女は片手に善右衛門政女安子三人の小供を愛撫し、片手に良人とおかのとの戀中を守りたりき

彼女は神に等しき心をもて、良人の亂行を覆ひたり、これを普通の人情より云へば、媒介人に訴へ、親戚緣者に告げ、二人の間を割かんとするが當然なるを、彼女は惡き噂の外に漏れんことを恐れて、遂に一度も口外せざりき、されど惡事は千里を走りて、此事近郷近在の評判となり、野にも圃にも三人寄れば、必ず善兵衛の沙汰なりき

時は秋、美伎子が人知れぬ苦勞の中に月日經ちて、娘安子は四歳なりき、母に似て怜悧、母に似て容貌美しきが、誰教ゆるとも無く針仕事を好みて、

日ごと美伎子の裁縫する側を放れず、布片、絲は彼兒の玩弄物なりき、尺、針箱は彼兒が遊戯の友なりき

殊に元氣好き性質、一度も難り啼くこと無く、下女下男を相手にして、朝から暮まで、機嫌の中に遊び戯れたる身が、二三日前より熱氣ありて、心地も例ならず打伏しぬ、善兵衛は風邪胃きたるならんとて氣にも止めず、美伎子は家事の片手間に介抱して、「早う快くなるぢや、早う快くなつて市松人形の衣服仕立て着せるぢやぞ」

安子は夜着の衿より愛らしき顔を出して、優和しく母の詞を聞くなりき、天は晴れ、日は麗かに百舌の聲高く瀬戸の樹に聞こえて、野菊山菊秋の氣に香りを放つ、蝶も草村を出でゝ舞ふべし

「今日は什麼とも云はれぬ好い日和ぢやで、奈良から長谷の紅葉見て行うと思ふが喃、家の都合は何うぢやあろの」

下男下女が朝の仕事に出で行きたる後、善兵衛は思ひ出したる如く云ひぬ、何事も良人の心に戻る事無き美伎子は、片手に安子の額を揉みながら打ち笑

みて

「奈良も長谷も、秋は今が見頃でござりませう、二三日の御保養、好い思ひ付きなされました、お伴侶は誰方樣でござります」

「その伴侶ぢや喃、庄屋樣誘ふれど、四五日は手が退けぬとの仰せ、丹波市の吉本は酒好きで此方が困る、さりとて一人旅もならず、家の用に事さへ缺かねば、おかのを借りて行きたいと思ふが、お前の手は何うであらうの」

善兵衛は美伎子が何何事も知らじと思ひ居れるなり、家には病人あり、收穫時の忙がしさは猫の手も借りたしと願へる時、婢女のおかのを伴ひ行かんと云ふ、美伎子はハッと思ひたれど、例の顔には出さゝりき

「それは好い伴侶、宿屋泊りの御介抱、女で無うてはならぬ事もござります、家の事お構ひなされず、何日までもお伴れなされませ」

「何日までもと云ふて、便々と長旅もされまいが、長うて四五日、おかのを借りて行きますぞ」

「些も御遠慮に及びませぬ、おかのに爲、誰に爲、皆なあなたのお召使ひで

ござります、緩々と御保養なされませ」

「どうぞ頼む、留守を頼む」と善兵衛はそゝろなりき、云ひ捨てゝ起ち上る

(三)

「云ふ中に早やお立ち遊ばすのでござりまするかな」と美伎子は思はず聲掛けぬ

「今夜は奈良泊り、明日は多武の峯から長谷へ廻らうと思ふて居る、安子も優和しう留守するぢや、好い土産取らすでな」

「父樣、鹿を買ふて下さりませ」

「奈良の鹿に、奈良人形のお雛樣、安子の好きな物買うて來る、無理云ふて母樣困らせること爲るまいぞ」

「さうしておかのは何處に居りまする」と美伎子は心付いた樣に云ふ

「おかのか喃、今野仕事に行かうとするを、呼び止めて置いたが喃、その邊に居るでは無いかの」と善兵衛は沈着かぬ聲なりき

「あなたおかのをお伴れなさるのでござりませぬか」

「家の用に事缺かねば伴れて行きたいと思ふぢやが、どうあらう」

「それは構ひませぬ、おかのをお伴れなさることは構ひませぬ、然し殿方と違ふて、女の仕度は難しうござります、私が手傳うて遣りませう」と爲の囀おいそれとは爲らぬものでござりますよりも美しい聲、谷川の流れよりも清しい心「おかのよ〳〵」

婢女部屋に鏡臺置きて、化粧に餘念無かりしおかのは、美伎子の高く呼ぶ聲するに膽を冷して、傷持つ足の急には起ちも得せず、舌を吐き、身を硬うして、鏡に映る顏の色の次第に變り行くを視て居たりき

「おかのよ〳〵、おかのは居ぬかよ」

美伎子の聲は續いて起る、もしや祕密の露顯せるにてはあるまじきか、と胸を抱きて、そと鏡臺を片付ける、その耳下へ

「おかの〳〵」と次には善兵衛の聲聞こえて「ちよと來いよ、お美伎が髮結うて遣るといの」

これに吻と息つきて

「はい〳〵」と曇る聲「只今參ります」

慌てゝ部屋を出でんとする出合頭、善兵衞は內庭傳ひ迎ひに來る

「これ什麼をして居る、先刻から聲の嗄れるほど呼ぶで無いか」

おかのは善兵衞と顏見合せて、異しげに笑を含みたれど、一言も詞を交すにはあらず、美伎子の前に手をつゐて

「お家さま、お召しでござりまするか」

「おゝ」と微塵も惡い顏を見せず、「お前御苦勞ぢやの、今日は旦那のお供をして、奈良へ行つて吳れるさうぢやの」

「はい」とおかのは氣に咎めるかもぢ〳〵して

「お家樣思召しも、如何と思ふでござりまするが喃、旦那樣是非參るやうとのお詞でござりまするで……」

「御苦勞ぢやはの〳〵、女の伴侶でもある事か、旦那樣のお伴侶では、氣保養にもなるまいが、久し振の旅、旦那殿も時折は御遊山をなさるが可いで、

お前迷惑でも御介抱を賴みます」

實に溫乎玉の如き詞なり、おかのは返答の無くさし垂頭く、心の悖氣に髮の毛のびり〳〵搖きて、たゞ恐縮の外なかりき

「それにしても甚う髮が亂れてゐる、そのまゝでは爲るまい、私が取り上げて進ぜるの」

白刀もて頭に擬せられるよりも、この眞心は苦しかりき

「いえ〳〵」と逡巡して「勿體無うござります、お家樣にその樣なことして戴いては、私に罰が當ります」

「なんのいの、お前にするでは無く、旦那殿にして進ぜるのぢや」と手づから絲の端へ鋭臺持ち出し「他人らしい、什麼の遠慮が要らうぞの」

されどおのかは尙躊躇しぬ、鐵槌もて頭を碎かるゝとも、一言の苦情云はれまじきお家樣の手に、旦那へ見すべき髮飾り美はしく取り上げらるゝなれば、いかな惡魔もその淸き鋏の前に坐るべき勇氣なかりき

「もうどうぞ……もう其樣な……」

座にも堪へず逃げんとするを、美伎子は手を取らんばかりにして、鏡臺の前に坐らせぬ、鏡に映たるは、愛嬌好く美はしき面、流石に角も見えざりき

(四)

美伎子が眞實の手に由りて結はれたるおかのゝ島田髷は光澤好かりき

「お前の釵はこれ限ぢやの」

おかのゝ髪に插したるは鹿の角もて作りたる疎末なる奈良釵なりき

「その他に持ちませぬ」

「これでは爲らぬ、髪ばかりを美しう取り上げても、この釵では人中へ出られぬでの、私が好いのを貸して進ぜるぞ」

「いえ、お家さま……」

「遠慮は要らぬで喃、そなた身を飾るは旦那樣のお身を飾るも同じぢやわの」

と美伎子は極めて快く「私の頭には二度と用のない物こゝに銀の花釵あるわいの」

「左樣な物お借り申して、勿體無うございます」

「まアさ、これを前髪に插して見やいの、私が惡い事は云はぬ」と銀に花橘を透し彫せる釵を前に插して「さて似合ふことわいの、年齡は年齡だけ、相應したが好いものぢやの」

「有難うございます、お家さま、有難うございます」

「櫛笄も持ちやるまい、それとも有るか」

「左樣な物ある筈はございませぬ、私共には及びも付かぬ贅澤な物でございます」

「無くばそれも貸して進ぜる、私が里歸りに使ふたのが、埃塵だらけになつてあるわの」と銳臺の抽斗より取り出す

「もう〳〵お免し下さるませ、私共のお頭へは勿體無うございます」

「これを見やれ、櫛笄に掛つた埃塵は、一寸拭くとすぐ除れるが、人の心に掛つた埃塵は、思ふ樣に取れぬものでの」と意ありげに云ひながら、鼈甲の笄、蒔繪の櫛、おかのゝ手にだも觸れたる事あるまじきを奇麗に飾りて「こ

れでまづ頭だけは調きた、これからが衣裝ぢやわの」
「お蔭で美しうなりました、こんな嬉しいことございませぬ」
「それで衣服は何着て行きやる」
「去年の暮のお粗物に戴いた絲縞を着て參ります」
「紅縞大形の彼かいの」
「私には一番の嫩衣でござります」
「旦那殿のお供に、絲縞は着て行かれぬ、此方はそれで好いにしてから、旦那殿のお顏に關るで、私の小紋繩縮の小袖、彼を着せて進ぜるの」
「滅相も無い、左樣な事して戴いては、私冥理が盡きまする」
「何んの、そなたに爲て進ぜるでは無いで、それほど禮云ふに及ばぬことぢや、さア〳〵納戸へ來さつしやれ、序に私が被せて進ぜるわの」
美伎子は再びおかの〻手を取る如くして、善兵衞の首は幾度も傾けられぬ
「はて喃、今日に限つて、お美伎が彼のやうに心切する、什麼か理のある事かな」

思はず不審の眉を顰むる時
「私も行きたいわの〳〵」と安子は唐突に泣き出しぬ
「えゝ、喫驚した、そなた何處へ行きたいのぢや」
「私も奈良へ行きたいわの、父樣伴れて下されいの」
安子はむく〳〵起き上りて、忽ち夜着より出んとす
「そなたも奈良へ行きたいか、風邪冒いてさへ無くば、好い折柄ぢや、伴れて行て遣らうものを、惡い時に風邪冒いたの」
「私も行く〳〵」と安子は涙を抑へながら「母樣、私も奈良へ行きます」
「おう〳〵、安子は私が伴れて行かうわの」と美伎子は納戸を立ち出づる
「母樣、奈良へ行きたいわの」
「諾しぢや〳〵、大人しうして居たらきつと私が伴れて行く、然し今日は爲りませぬ、風邪冒いた者が奈良へ行くと、鹿が角を向けるといふ、恐いこと恐いこと、奈良へ行く代りに、私の乳汁を進ぜうの」と立ちはだかりて目を

擦る安子を引き寄せ、膝の上へ抱き上げる、此時

「お家さま、有難うございます〳〵」

幾度も繰返し禮云ひつゝ、納戸より出でるおかのゝ姿、婢女とは見えず美はしかりき、博多の帶、小紋縮緬の小袖、緋鹿の子の帶揚、金絲の刺繍ある襦袢の襟、薄化粧して美伎子の前に手をつく樣、實に目覺むる如くぞ見えし

「おゝ、それで好い〳〵、それで旦那殿お供が爲きる」と身を斜めに緣の外を詠めて「まだ早うございます、奈良泊りには恰ど好い刻限、そろ〳〵お出掛けなされては何うございます」

「爾うぢやの」と善兵衞は考えながら「出掛けても好からうかの」

「好い段ではございませぬ、おかのぐづ〳〵と什麼して居やる、早うお供しやらぬかの」

「それではお家樣、一兩日お暇戴きます」とおかのは羞しげに起ち上る

「安子の養生、火の下用心、この二つを賴みます」と善兵衞も續いて起つ

「御機嫌克うお歸りなされませ、途中に氣を付けてお行でなされませ」

秋霞麗かに、野菊桔梗錦の如く咲く野邊を、善兵衞おかのは伴れ立ちて行き過ぐる、表門近く立ちて後姿を見送りし美伎子の眼には、流石に曇りを帶びて見えき

(五)

假初の風邪ならんと思ひたる安子の病氣は、日を經るまゝに重くなりぬ、乳は探れども口に咀ふ力も無くて、昏々と熱氣に鎖さるゝ樣、目も當てられず憐れなり

善兵衞はまだ歸らず、美伎子は日ごとの看護に疲れて、清しき目も凹みて見えたり、源右衞門夫婦を初め、村の人々交る〳〵訪ひ來りて、安子の容體を尋ね、美伎子の心を慰むるも、彼女の境遇に同情する、所深ければならん、中にも源右衞門は我子照之丞を九死の間より救はれたる報恩の爲め、お際は曾て安子を預り育てたる愛情の爲め、側を離れず看護しき

美伎子は眞心をもて介抱しぬ、善兵衞が遊山の旅に上りし後、帶だも釋か

ず懸命に介抱しぬ、されど安子の重病には一服の薬も與へざりき、一度も醫師を迎へざりき、彼女は深く我子の運命を知れるなりき

「御免よ」

土産の薬苞提げて表門より入り來りしは美伎子の實父前川半七なり、半白の頭、活々と清き顔、そのまゝ奥の座敷に通りて

「安が病氣で居るといの、ちと快いか、昨日見舞に來ようと思ふたが、據ない支へあつて延引した、どうぢや」と孫の顔覗き込んで「甚う痩せたぞ、目も潤んで居るやうぢや」

「遠方をようお來なされませ」と美伎子は膝の上に安子を抱いて「又時雨れさうでござりまする哺」

「時雨は晴れるが死んだものは歸らぬ、これ手當が大事ぢや」と半七は四邊を見廻し「薬が無いやうな、醫師に診せたか」

次の間には眞鍮の獅噛父鉢を前にして、源右衛門お際淋しさうに詰め居たりき

「醫者には診せませぬ」

「はて、お前にも似合はぬ、これほどの大病醫者に見せいで何うする」

「お醫者樣の手でも協ひませぬ、此兒の運命は疾から極つて居るのでござります」

「それにしてから一服の薬飲ませいで、親の役が終ひまい、私の目からは風邪が根に入つた如にも見える、妙振出でも遣ては何うぢや」

「お薬の力でも、神の仰せは何うすることも能きませぬ、お父樣まだ御存じはござりませぬも、此兒の命は三年前に、神樣へさし上げてござります」

「はて哺」と半七は不審晴れず「どうした譯で哺」

「庄屋の坊が黒疱瘡にお罹りなされて、九死一生とござりまじた時、此兒を身代りにさし上げて、命乞ひをしたのでござります、とても助かる筈のない照之丞樣の御全快なされたは、此兒の命をお召し下された證據、今日まで健康で居りましたは、神樣のお慈悲と思ふ外ござりませぬ」

「それにしてからが此の可憐いを見殺しにすることは爲らぬ、そなたからは

爲るまいが、私から遣る分には關うまい、待たつしやい〳〵、こゝに名藥加賀の紫雪を持て居る、一口遣らうぞ」

半七は孫の身可愛く、懷中の鼻紙嚢を開けて藥袋を出さんとす

「結構なお藥でござりまする喃、この病氣に藥の效能はあるまいと存じまするが、親の慈悲、盡すだけの事は盡して遣りたいと存じます」

「さうとも〳〵、この藥の效驗で、三日の命を取り止めても、私やお前の心が屆く」と小き錫の容器より、微ばかりを爪頭に掬つて「安や、よい藥與れやうぞ」

安子は口を開かんともせず人心地なかりき、半七は珠の如き齒を分けるやうに藥を注ぎ

「これで好くなれば可いがのう」

「不悶さうではござりまするが、何物の力にも水の流れを逆にすることは爲りませぬ、照之丞どの健康でお在でる限りは、安子は生きて居るも同じでござります、私の爲めには血を分けた娘、可愛うない事はござりませぬ、一日でも半日でも、長命させたいのは親の欲でござりまするが、此子はとても助かりませぬ、由て斯うして……」と安子の顏を溫かき肌につけ、力限り抱きしめつゝ「切て臨終を樂にして遣りまする」

花よりも美はしき心は是、月よりも清き心は是、次の間には男泣きに泣く源右衞門、堪へ難ねて咽び入るお際、その淚の間を分けて、軒漏る風は冷たく吹く

（六）

「源右衞門どの」

半七は暫時して敗居越に呼び掛けぬ

「半七どの、まだ御挨拶も致しませぬ、その後は御不沙汰、今年も好い秋でござります」

源右衞門は淚を拂ひながら此方を向きぬ

「今お聞きなさる、仕儀、お美伎の一國には例ながら困りますわの」

「什麼と御挨拶の致しやうも無い、お美伎さんのお詞を聞いて私も涙に暮れて居るわの

「二人の中、一人助からぬ命とすれば、安子は女、兄の善右衛門もござりますお宅の一粒種をお助け申す外ござりませぬわ喃」

「私はお美伎さんを神と立てゝ、毎日拝まぬことござらぬよ、此方の前で袋めるでは無いが、お美伎さんがお在で下さるは、此の地下の自慢、村の者一統の歓びぢや」

「爾う云ふて下さると、私も肩身を廣う覚えます」と半七は氣遣はし氣に、安子の容體を見返りながら「善兵衛どのが見えぬ、何うせられたの」

「四五日前であつたか喃、奈良から長谷、多生の峯へ掛けて、遊山にお出でなされたと聞いたが……」と源右衛門は臺所までを透し見て「おかのもまだ歸らぬやうぢや」

「はゝ、善兵衛殿は遊山、お美伎は大病人の介抱」と半七は眉を顰めて云ひつゝ「ちと算盤に合ひ難ねるが、それはそれ、今云はれたおかのとは誰やら

の事でござつた喃」

「あなたも御存じわらせる筈、當家のお召使ひ、美しい婢女でござるわの」

「その婢女が……」

「善兵衛殿のお供で、やはり遊山に參つて居るわの」

「はて喃」と半七は考えながら「家には子供が九死一生の大病、外では主人が美しい婢女伴れて遊山、こりや何うしても桁が合はぬ」

「いえ」と美伎子は辯解するやうに「安子の病氣は良人が遊山に出られた後の事でござります」

「それにしては長い、早や四五日も爲るでは無いか」

「遊山に時刻ござりませぬで、其處へ夏から秋への出精、少しぐらゐ御遊山を爲されいでは、お身體が續かぬでござりませうで……」

「夏秋の忙しいは百姓の身に有り内、善兵衛殿一人に限らぬ、それに私はその付き物が氣に入らぬ」

「父樣爾うではござりませぬ、一人旅は物憂い物でござりまするで、私氣付き

て、おかのにお供させたのでございます」

「いや〳〵」と半七は頭を掉て「爾うではあるまい、祕すな、私にも耳が二個ある

「祕しは致しませぬ、實際を申し上げ居るでございます」

「普通の供ではあるまい、世間の口も根のない事は云はぬ、實は私は孫の病氣を見舞ふ序に、善兵衞殿の樣子を見よう爲めに來た、そなた知るまいが善兵衞殿惡い噂、三味田まで聞こえて居る」

半七は苦り切つて云ひき、彼は善兵衞がおかのを伴れて遊山の旅に赴きたりと聞くより、美伎子可憐く、安子可愛き心に驅られて、自然善兵衞憎く思へるなり

「人の口に戸は立てられませぬ、世間の人が何を云はうと、善兵衞どの〻一伍一什知つて居るは私でございます、その私が證人、善兵衞どのに後暗いことと無いと申すを、あなた御信用下されて好さ〻うなものでございませぬか」

「ぢやが喃、私も善兵衞殿惡い噂を聞けば、嬉しうは思はぬでの」

「甚うお疑ひでございます、善兵衞殿お身に左樣な惡い噂立つも、要りは私、家の綉りを善くせぬからでございます」

「善兵衞殿御憎まれとあらせますする、そのお心で私をお叱り下さりませ、善兵衞殿惡いではございませぬ、皆な私が惡いのでございまする」

源右衞門は美伎子の心を推量りて、兩の袖を濡らしたりき

（七）

我娘ながら神より貴かるべき美伎子の詞に、半七は嬉し涙を禁め得ざりき、斯うまでにして良夫の非行を掩はんとする美しき心に批を打つは、親の慈愛なるまじく、人の情にてもなるまじ、善兵衞おかの二人の事は、三島、庄屋敗、丹波市、近鄕近在の者誰知らぬ者あるまじけれど、唯一人美伎子の知らじといふを、知らぬにて通すは花を護る花守の情なり、普通の女ならば嫉妬の焰に胸も燒くべきを、沈と堪ゆる心の中に、女の情を抑へ行く、辛さ苦しさを察し遣らずば、彼女の憐む處はあらざらん、親の慈愛も反古とならん

半七は斯く思ひ諦めぬ

「真個にの、善兵衛殿の事を知るは、廣い世界にお前ほど委しいは無い理ぢやの、それを捨て置き、世間の噂に耳を傾けうとしたは私の不調法であつたわよ」

「お疑ひが晴れてござりまするか、安子嬉しいかすや〳〵と寐て居ります」

「善兵衛殿はお物堅いおつれであつた、源右衛門様お前もお疑ひはあるまいの」

源右衛門は半七の心を察して、幾度も手の甲に目を抑へつゝ

「何の疑ふて好いものでござるのか、善兵衛殿全盛を心ない者嫉み妬んで、有らぬ噂を立てるのでござるわよ」

「爾うござらう〳〵、それを聞いて私も安堵、お美伎も好い婿を持つて幸福ぢや、然し安子大病、九死一生の容體とあるを、夢にでも知つたら、早う歸つて呉れると可いがの」

半七は滲々云ふ、内の噂は瀬戸口に影さして、折柄歸り來りしは善兵衛な

り、おかのは後より亂れ髪、小紋の小袖も旅馴れて、襟に、袂に、胡蝶の夢の痕斑なり

「よ、善兵衛どの歸られた」と源右衛門は早くも見付け「半七どの、お美伎どの、善兵衛殿が歸られたぞの」

云ふ詞の終らぬ内、善兵衛は土産物の奈良の鹿、初瀬の八橋、子を思ふ親心の種々を手に持つて、徐にこゝへ入り來りしが

「これは父様、よくお越しなされました、庄屋様もお際どのも、皆がお揃ひ、何事のお寄合でござります」と云ふ中に、美伎子の樣、安子の痩せ衰れたるを早くも見て「安子なだ本復せぬと見ゆるの」

「この樣に痩せ衰れてござりまする、この樣に衰へてござります」

「さて知らぬ事とて長の旅、安子私ぢや」と美伎子の懐にゐるを覗き込んで

「甚う痩せた、こりや爲らぬ」

「どうも難かしう見ゆるわの」と半七は濕み聲なり

「これ程とは思はず、安閑と旅をしたが、皆の衆に面目無い、お隣者は誰ぢ

や、二月堂、武藏野の大師、日頃信ずる初瀬觀世音へ代參でも立てたかの」

「お醫者樣はなりませぬ、願掛けも爲りませぬ、此兒の命は、人間の手に何うすることも能きませぬ」

美伎子は兩袖に安子を沈と抱えて云ふ、然も瞬きもせず視入りたる目の色に、慈悲の涙、悲痛の涙、我子運命の甲斐無さを悼む涙、霰と凝てはら〳〵と落ち來る

「そりや何故ぢや、素人で協はぬ事はお醫者の手、お醫者で協はぬことは神佛のお力借りて、人間の苦痛助からうとする、これが世間の習ひで無いか、それにそなたは……」

「何も仰せなされまするな、安子の運命は神樣にお預け申してござります」

「ほゝ、神樣に、それではやはり願掛けをして居るぢやの」

「お家樣」とおかのは次の間に手を支いて「只今歸つてござります、嬢樣の御病氣、ちとお宜しいでござりますするか」

「おかのか、長の間旦那どの介抱、さぞ草臥れたであらうのう」と美伎子は

惡い顏もせず笑を含みて「安子の介抱は私がするでの、四五日は骨休みぢや、緩々養生して下されの」

(八)

安子の病氣は次第に危險の狀態に陷いり行けりき、されど美伎子は何の神にも全快を祈らざりき、何處の醫師にも診察を乞はざりき、彼女は只一人病室に閉ぢ籠りて、心の限り介抱したりき

源右衞門を初め、安子が重病となれる原因を知る者は、皆な美伎子の境遇に同情して、日ごと夜ごと此の憐れなる病兒を音づれぬはあらざりき、然も村人の誠意誠心も、神の意に由れる重病人を如何ともすること能はざりき、今は只臨終を待つのみなりき、痩せて骨の如くなりし安子は、美伎子の懷に搔き抱かれて、すや〳〵と眠れるなり、一穗の燈火はこの頼みなき母子を照らして、淡き影消ゆるが如く壁の上に映る時、善兵衞も來りぬ、善右衞門も來りぬ、一家一族皆な病室の中に來りて、水を打ちたる如く靜に安子の周圍

を続り居たりき

「盗人ぢや〳〵、皆が來い〳〵」

消魂しき叫び聲は、藏の前に聞こえたり、善兵衞はきつとなりて

「盗人が入つた氣ぢや、逃すな」

今や最愛の子の命奪はれんとする大時の時も忘れて、慥地に些細の盗賊を

捕り押へんとす、善兵衞は棍棒携へて裏庭へ駈け出す

時は子刻を過ぎて、二十日あまりの月凄く東の天に掛る、暮れ行く秋の風

物淋しく吹く間に、三五人の作男は一人の曲者を取り巻きて、がや〳〵と騒

り居れるなり、善兵衞は裏口より顔を出して

「どうぢや捉へたか」

「今打擲いて居る處でござります、まことに太い奴、お嬢樣御病氣の御介抱

に、皆樣御油斷わるを見すまし、お藏の壁に穴を穿けて、米を盗み出したの

でござります」

「米盗人か」と善兵衞は詞急しく「外に紛失物はないか」

「早う氣が付いて、何よりも幸福でござります」と云ふ中に一人の作男は提

燈を點し來る

「顔を見てやれ〳〵、どうせ勝手を知つた者に相違ない」

他人の油斷を見すまして、物奪せんとする惡漢にも良心ありき、盗賊は兩

袖に顔を掩ひて、大地の上に平伏しき

「顔を隱し居る、これでも恥を知つて居るぞ」

「顔を見て遣れさ」

「引き起せ〳〵、引き起してよう顔を見て遣れさ」

口々に叫びながら二三人が力任せに曲者を引き起す、一人は提燈をさし付

ける

「や」と驚いて「此方德藏ではないか」

提燈の光りに顔を見るが否や、善兵衞は思はず呼ぶ

「面目次第もござりませぬ、旦那樣皆樣どうぞお免し下さりませ」

德藏は此村の水呑百姓なり、善兵衞作男、皆な顔を知りたる間なり

「こりや驚いた、德藏が盗賊に入らうとは、まことに思ひ掛けぬこと、旦那

様、何うします」と得意顔に問ふは、提燈持ちたる男なりき

「さうぢやの、徳藏も分つて見ると、まんざら縄も掛けられぬかの」

「いや〳〵」と他の一人は頭を掉て「それは爲りませぬ、知たものでも知らぬ者でも、悪事は悪事、盗賊に二つはござりませぬ、代官所へお引き渡しなされませ」

「それも爾うぢやの」と善兵衛は徳藏をつく〳〵見て「勝手知た家へ入るは一層罪が深いわの」

「大きに左様でござります、それではこのまゝ縄を掛けるか」

「旦那様、お慈悲でござります、これに凝りて善心に立ち返り、再び曲つたことは致しませぬ、旦那様皆様この通りでござります」

びたりと掌を合せて一同を伏拜みぬ

(九)

されど心無き下男どもに、微塵情はあらざりき

「爲らぬわ〳〵、此期に臨んで拜む手、その手で米を盗もうとしたでないか、以後の見せしめ、村中の人々に恥面を曝らさせ呉れる」

一人は麻縄を取り出し來りぬ、二三人は折重つて、あはれ翻命に合せ居れる手を、後へ曲げんとしたる時

「何事でござりまするな、甚う騒々しいでござりませぬか喃」

納戸の縁の雨戸繰り開けて、安子を懐に抱きたるまゝ顔を出せしは美伎子なり

「お家様お助け下さりませ、お願ひでござります〳〵」

徳藏の目の中よりは熱湯の涙はら〳〵下る、作男は口々に

「盗人でござります、油斷を見すまし、お藏の米を盗み出さうとした天罰、これから代官所へ引いて行くのでござります」

と報告す

「この様に情無いことせぬものぢや」と美伎子は眉を顰めながら「高い塀は鼠も超えぬ、此方に油斷があればこそ盗人も入るのぢや、要心を堅固にすれ

ば入らうとて入ること爲らぬ、すれば落度は此方にある、此方の落度を棚へ上げて、その人に繩掛けるは筋道が違つて居るで、ま、宥怒して上げさつしやれ」

「爾うはなりませぬ、お家樣さうは爲りませぬ」と男共は反對なりき「斯樣な惡心を宥して置きますと、以後の懲戒に爲りませぬ」

「私はその人を惡いと思はぬ、油斷の中に物を奪られるは、神樣が前世の借財をお取り立てなさるのぢや、思ふ仔細もある、宥して上げさつしやれ」

「これ〳〵」と善兵衞は口を插んで「お前は又慈悲善根をする心か知らぬが、それは爲らぬ、醜い草を刈り取るは、國物を守る第一の手術でないかよ」

「宥してお進げなされませ、人の心は皆な善い物でござります、月も雲に掛れば暗うなります、その雲を拂ふのが上に立つ者の務め、お前樣の御身分から云ふと、德藏どのは下のものでござります、下の者を苦めるは、善心ある者のせぬ事、それに德藏どのも後々を謹むと云ふて居られます、私の願ひ、宥してお遣りなされませ」

美伎子は力ある聲にて云ふ、善兵衞も頷きて

「お前がそれほどに云ふこと、私も好んで繩付は出したくない、それでは宥すか、のう皆の者」

「旦那樣お家樣、そのお心なら致し方ござりませぬ」とさも失望したる如く婆へ出らる、おのれお家樣に禮云はう」

「運の好い奴の、暗黒へ引かれる處、お家樣の光りが身にさして、又元の姿

「いや、禮に及ばぬ」と美伎子は其處に立ちたるまゝ「私は德藏どのに云ふことがある、お前達は彼方へ行くぢや」

「へえ」と男共は不性無性なり「旦那さま、何うします」

「お美伎話すことあるといふ、罪を怨せば同じ村の百姓ぢや、惡くはならぬ」

美伎子を妻とせる善兵衞は、やはり夫の善根ありき、やはり夫の考えあり き、不平らしく佇み居れる男共を催促して、やがて臺所へ引き取りぬ、納戸の燈火は幽かに鈍き光りを放ちて、大水の退きたる如き庭の中を照らすなり

「お家様有り難うございます、お蔭様で助かります、この大恩は死ぬるまで忘れませぬ」

徳藏の額は庭の苔に埋もりぬ

「徳藏どの、此方何故このやうな卑しい心を出さつしやつた、私が聞き付けて來たからこそ好けれ、それでなくば役人衆の手に渡つて、憂き恥を見る處であつた、此方も十九や二十の身では無し、四十の阪にも手が屆いて居るでないかよ」

「面目次第もございませぬ、お家様私の心に魔がさしたのでございます」

「全體此方何故盜み心出さしやつた、これには理由もあらうぞのう」

(十)

徳藏は益す恥ぢ入る、彼の額際にはぢり〳〵と膏汗の浸潤むを見き、

「さ、理由を云はつしやれの、同じ村に住んで、同じ氏神の御威徳を蒙る身が、什麽とて卑しい心を出して、私の家へ盜みには入らせた、大膽にも土藏の壁を切り毀つて、盜みする法がござるかの」

「面目次第もございませぬ、どうぞお免し下さりませ」

「免すも免さぬもない、今もいふ、そなたも私も同じ氏子でござるわの」と美伎子は莞爾と笑さへ浮べて「理由あらうがの、恐しい大罪を犯してまで他人の米を奪らうとした、惡心の起因は什麽でござるの」

「盜人に理由はございませぬ、理由のあるのは盜人と云はれませぬ」

「さうではない、貧乏するも理由ぢや、年貢に詰るも理由ぢや、明日が日食ふ米なうて、小供に空腹い目をさする、これも皆理由ぢやわの」

「什麽ともお恥かしいことでございます」と徳藏は唾を嚥みつゝ「お詞に甘へて一伍一什を申上げるでござりまするが、お家様の前ござりまするが、私御存じの貧乏で御座りましてな」

「此方貧乏に負けさつしやる喃」

「以前は村角力の一つも取つて、他人には勝たれませぬ、其處へ女房が三年越しの大病でございまするでな」

「お家もと病氣の事、蔭ながら聞いて居ります、それではまだ全快なされぬぢや喃」

「全快どころか、段々悪うなるのでございます」と徳藏は頭を掻いて「泣面に蜂とは此事、其上又倅と娘が風邪を胃ねたのでございます」

「はて喃、それはお困りなさるわの」と美伎子は堪へ切れぬ如に滂沱を酸んで「醫師殿は什麼となされたな、お薬でもお上げなされたかな」

「中々醫者どころではございませぬ、薬一服も協ひませぬ、實は明日戴く御飯もございませいで、家内の者皆飢渇に泣いてゐるのでございます」

「氣の毒やの、氣の毒やの」

「それや是やで、澄まぬ事と存じながら、お宅の土藏を毀つたので御ざります」

「それでは貧の盜みぢや喃」

「是にも道理の付く者でございましたら、貧の盜みと云ふでございませうわの」

「世の中に貧乏ほど辛いものは無いと云ふ、殊に三人まで病人をお控え爲さるでは、さぞ御難儀でござらうが、それなら何故勞働をなされぬ、諺にも稼ぐに追ひ付く貧乏無しぢや、自分で働いたお金でなうては、身の幸福になる事はござらぬぞ、怠惰兒には貧が集り、勞働者には幸福が付いて來る、これは私が云はずとも、千萬年前からちやんと極つた錠でござるに、此方其位の事分らぬかの」

「辯解ござりませぬ、私の心得違ひでござります」

「詫を云ふても罪は消えぬ、惡事をした報いは、それに劣らぬ程の善根をして初めて罪の消えるものぢや、女の口から斯樣の事申し上げるは、ちと行き過ぎでもござるが、百年後の事を謀る者は百年の富がある、十年後の事を謀る者には、十年の富があるものでござるわの、百年の後を謀る者は、松や杉を植ゑて、年々一寸か二寸づゝ生長する幹を樂むが、その心得のない者は、夏蒔いて秋收入のある稻さへも植ゑぬものぢや、只目の前の小さい利慾に迷ふて、蒔かぬ種を取らうと心懸け、植ゑぬ物を苅

らうとするゆゑ、何時も浮む瀬がないやうになる、蒔かぬ種も他人の蒔いた種を取りさへすれば得られ、植ゑぬ稲も他人の植ゑたのを苅りさへすれば取られる、然しこれは一度限り、二度取ることはならぬけれど、植ゑて取る稲は、年中經つても盡きる時ござらぬ、蒔いて取る稲は、天地のある限り、耕作主に幸福を分けて呉れます、此方もまだ老いさらばひた年ではない、ちと働いて取らつしやれ、土藏の壁を切る手間で、畑や田を作らつしやれ」

「有難うござります、畜生にも劣つた私の耳へ、此様な教へを説いてお聞かせ下さるは弘い世界にお家様の外ござりませぬ、これに懲りぬ事はない、私必然眞人間になつて見せます」

「此方眞個に改心さつしやるか」

美伎子は詞に力を入れて、抑へ付けるやうに問ひぬ

（十一）

「鶯の聲は誰の耳にも美しう聞えます、誠のある教へに耳を傾けぬ者はござ

りませぬ」

徳藏は暗を出でたる燈火なりき、雲を出でたる星なりき、今までおど〳〵したる態度とは異つて、姿にも詞にも自然の沈着見えたりき

「これよ」と善兵衛は次の間から呼んで「好い加減にして置かつしやいよ、村の者を縄付けにするも可くないが、盗人に情を掛けるは要らぬことぢや、幾許尾を振つても、犬はやつぱり畜生ぢやよ」

「其様に云ふたものではござりませぬ、蝶になれば以前の毛蟲ではござりませぬ、改心すれば以前の悪人ではござりませぬ」

「ぢやが喃、飼犬に手を噛まれる事もあるでの、慈悲も善根も好い加減にして置かつしやれよ」

「兎に角、私に米一苞下さりませ」

美伎子の求めは意外なりき、善兵衛は目を圓くして

「米が欲しければ幾許でも進ぜるが、此方什麼にさつしやるのぢや」

「必然下さりまする喃、そのお米私の自由にしてもお叱りはござるませぬな」

「そなたに進ぜたもの、燒いて食はうと煮て食はうと、好いたやうにさつしやいの」

「有難うございます、それで私は德藏どのを佛にして、眼を入れる事が出來るのでございます」と美伎子は片膝立てゝ「德藏どの、ちよと待たつしやれ」

德藏は緣下に平伏しぬ、美伎子は下人の手も借らず、自ら土藏の中へ入りしが、二三斗も入るべき米袋に米を入れて、重さうに運び出しぬ、善兵衞は吃驚し、下人召使は共に顏を見合せぬ

「こゝにお米が二斗ある、これを此方に進ぜます」

「え、私に……」と德藏は意外に打たれて、少時言句も出でざりき

「少くとも私の志ぢや、古川の水は滾々として夜も晝も流れるで、水晶のやうに美しいが、猿澤の池の水は長の年月溜つて居るで、腐れて惡い臭が立つ、これからは氣を付けるぢや」

「はい〳〵」と肺腑の底から出るやうに答へて、

「什麼とも申し上げやうございませぬ、お家さまこれでございます」

德藏の掌はぴたりと合ひぬ

「私は神ぢやござらぬで、拜まれるが、嬉しうない、これは私が旦那殿からお貰ひ申した、清い美しい正しいお米ぢや、一家内の飢を凌がつしやい」

「有難うございます」

「今から米を蒔くこともなるまい、又食ふに困つた時は私を尋ねて來さつしやれよ、旦那殿お許しを受けた上で、米でも金でも惠んで進ぜる」

「お蔭さまで家内一統が助かります、お蔭さまで私の心が正直になります、それでは……」と幾度も米袋の前に辭儀して「これを戴いて歸ります」

「持つてお歸りなされぢやが、惠まれて食ふ米の味と、働いて食ふ米の味と、所方が美味いか、嚙み比べて見さつしやれよ」

「お家樣有難うございます」と德藏は改めて三方四方を伏し拜んで、痩せた肩に米袋を擔ぎ上げ「召使ひの衆も有り難うございます」

第七章

（二）

今日（天保元年十月二十日）安子が一周忌の法會營まんとて、中山家にはとりどりの用意又とり〳〵の混雜なりき、まことに安子は照之丞の命に代りて、敢なき最期を遂げたるなれば、彼女の死後に置ける源右衛門一家の態度は極めて慇懃に、又極めて懇篤なりき、されば此日は源右衛門夫婦の者朝早くより來りて、佛間の方付、客間の粧飾、臺處の手傳ひなど及ぶ限り力を盡して、心安き村人、親類、知人、檀那寺の僧侶など、定めの刻限に入り來るを待ちてありき

然もおかのは尙ほ家にありて、善兵衛との戀中は昨日に擬ることもなく濃かに繼續されき、美伎子の忍耐強き心は、彼等が目に餘る行爲をも見ぬ風して二年あまりを過ぎ來りぬ

此時美伎子の懷には三女常女抱かれてありき、去年死亡たる安子が、再び

腹に宿りたるかと、家の者は皆懐しく思ひたるが、二月前出産して、名を常女と號けたりき、善兵衛の後には姿のみ美しく、心の墨の如く黒きおかの在りて、絶えず宜からぬ智惠を付けたれど、美伎子が安く産の紐を解きたるを見ては悦びの眉の開くを禁じ得ざりき

臺所、座敷、奥の間、納戸、東道の用意忙しき間に、善兵衛は隠居所の縁側に腰かけて、その庭前の菊花壇に、白く紅きさま〴〵の菊の花旬へるを詠めながら、一もと高き老松の下に立ちて、深き物思ひに沈む如く見えしおかのを見詰めたり

「改めて云ふまではないが、今日は安子の一周忌、源右衛門殿を始め、村の衆も大勢お越しぢや、その中で二人の素振り見られては面目ない、随分心得餘所々々しう扱ふての」

「私は否でございます、私に什麽の咎あつて、左樣なことをするのでございます」

「別に咎は無いが、三昧田の父樣、二人の間を疑付いてゐらせの樣子ぢや、後々面倒になつてはならぬで、覺られぬやう氣を付けるが肝要ぢやよ」

「旦那樣にはお家樣もございます、若旦那樣もお政樣も去月御出産遊ばしたお常樣もお健康、將來お樂しみでございませうも、私ばかりは樂みのない者でございます、旦那樣に見放されたら、木から落ちた猿同然誰を頼りにすることもならぬ身でございます」

「其樣に云はぬものぢや、私も男、お前を泣かすことはせぬ、私の目の黒い間、お前に不自由な思ひは爲せぬ」

「いえ〳〵」とおかのは白丈長掛けたる島田髷を横に棹つて「私不自由しても關ひませぬ、旦那樣と同じ家に住んで見たうございます」

「又其樣な無理を云ふ、何時も私の云ふて聞かすことが分らぬか」

折柄臺所口に人の景色して

「善兵衛殿、善兵衛殿」と呼び立るは源右衛門なり

「源右衛門らしい、消魂しい呼び聲ぢや」

「旦那樣、旦那樣」とおかのは追ひ縋るやうに聲掛け「一寸お待ち下さりま

せ、まだ相御談がございます」

「善兵衛どの、善兵衛どの」と源右衛門は詞急しく「お寺様がお越しぢや、早う來て下されいの」

(二)

安子一周忌の十月十日は秋の收穫まだ十分に終り難ねて、表も臺所も混雜の最中なりき、然も門口には、木枯の音物淋しく軒を撲ちて、夕暮れの日影は鈍く、鐘子山の頂には時雨して、寒さ宛ら身を切る如し、美伎子は漸うに振舞ひ果てゝ、檀那寺住僧を初め、多くの客の悉く去りたる後、常女を懷に抱きながら、跡方付けに餘念なき時

「さて美伎子どの、今日は甚い御雜作になつたわの」と今年四歳になる照之丞の手を引いて、臺所より昇り來るは源右衛門なり

「お庄屋様、そのお禮、此方から申さねばなりませぬ、今日は又色々お取持ち下されて、何から何まで御心切の蔭添はぬこともございませぬ、恰ど只今お住寺様もお歸り、お佛壇にお火を仕換えた處でございます」

「さうか〳〵、何事も無事に終み、此樣な悦ばしい事も無い、其處で今日の佛へはこの照之丞、是非參詣せねばならぬで、態〻同道、佛間へ行ても大事無いかの」

「大事ございませぬ、照之丞樣御健康で、線香の一本もお上げ下されば、佛もさぞ悦ぶでございませう、どうぞ御參詣下さりませ」

「それでは怨さつしやれ、私は照之丞の頭を撫でること、安子殿の姿がちらちらと目に浮びます、照之丞が健康で在るも、つまり安子どの蔭ぢやでの」

源右衛門は幾度か心の歡びを述べながら照之丞の手を引いて、持佛の間に入りたりき、後に美伎子は膳椀の艶拭なりき、常女に乳を哺ませつゝ多くの下女に指圖して、諸道具の跡始末に餘念なく、多くの下男に指圖して收穫の彼是に忙殺されき

「お家樣」と今日も亦手傳ひに參り居れるお際は聲かけ「おかのどの、見えませぬな、何處ぞ使ひにでもお行きなされたのでございまするかな」

おかのゝ仕方面憎く、現在美伎子を有る無しに扱ひて、少しにても隙あるごと、隱居所の椽側に善兵衞と笑ひ話爲し居れるが心憎く、おかのゝ姿見えぬ時は誰も彼も大仰に問ひ掛けるが例なりき

「さうかの、おかの今其處に居たやうぢやが喃」と美伎子は何氣もなく「どうしたであらうかの」

「隱居所に居るではござりませぬか」と一人の下女は目を鋭く「隱居所に旦那樣のお聲がしたやうでござります」

「さうぢや〳〵、隱居所の戸棚へ入れて置いた炬燵の古いのを出すやうに、先刻頼んだを忘れたわの、斯う急に寒うなると、誰も炬燵が欲しいわの」と云ひ外す

美伎子の詞を眞とは思はねど、斯くまでにして良人の秘事を祕さんとする心痛はしく、二の句を繼ぐ勇氣もなくて、只無念の涙に咽ぶなりき

日は次第に傾きて、外には北風寒さうに吹き渡る、その猛々と鳴る風の中に身を置きて、今にも絶え入る如き聲

「お慈悲お情でござります、この通り乳呑兒を抱いて、難儀苦勞を致すものでござります、お餘りを遣つて下さりませ」

うろ〳〵と裡面を覗きて、勿槽の礎げたるをさし出すは、年頃三十二三と見ゆる女乞丐なり、素肌に生れて間もなかるべき乳呑兒を背負ひたるが、乳汁足らねば顔色も蒼ざめ、ひい〳〵と悲鳴を擧げる痛はしさは、その聲やがて地の底までも響きて、餓鬼も迎ひに來るかと怪しまれぬ、美伎子は此方より透し見て

「私も乳呑兒を抱いて居る、彼の乞丐も同じやうに乳呑兒を抱いて居る」と獨語のやうにいふ

「お家樣、相手にお爲りなされますな、斯樣な輩は此方から聲かけるを待つて居ります」とお際はいふ

「裸體で居つても人間に違ひない、今日は安子の命日、願ふても善根の積みたい處、此方へ呼び入れて下されの」

「えゝ、什麼をお云ひなされます、あんなものを呼び入れ、どうなさるお心

でござります喃」と女中共は口々に「何も出ぬ通らつしやれ〳〵」

「結構なお家様、お助けなされて下さりませ、今夜一杯の御飯戴かねば、母子二人が飢死に致します」

「彼のやうに云ふを見捨てはならぬ」と美伎子は座處よりさし覗き「お前此方へお入りなされ、何は無くとも茶漬一杯進ぜます」

(三)

「お難有うござります、お蔭様で一命を拾ひます」

女乞丐は嬉しげに裡内へ入らんとして、よろ〳〵と倒れかけしが、危ふく も中仕切の柱に縋りて、漸々に身を支へたる樣の甲斐なき、胸のあたりに稜稜しく骨立ちて、皮膚の色は死せしが如く、自由に歩むことも爲り難ねて、

「はッ〳〵」と吻く息、力なく絶え入る如し、美伎子は涙さへさし含みて

「此寒いに着るものもなく、お前何處からお來でなされた」

「奈良から柳本へ歸るものでござります、これでも生れながらの非人ではござりませぬ」が、引き續く不幸で、こんな姿になつたのでござります、どうぞお助け下さりませ、この御恩は忘れませぬ」

「まづ此方へ來てお掛けなされませ、立つて居ては御難儀でござりませうな」

「有難うござります、長の間物貰ひをして居りますが、お家様ほど親切に被仰つて下さるお方ござりませぬ、然しお詞に甘へては罰があたります、お惠みさへ戴けば、すぐ歸ります」

「御遠慮は入りませぬ、私の志、まづ此處へ來てお掛けなされませ」

美伎子は庄屋の源右衛門に對するも、見る蔭だにはなき女乞丐に對するも、言語動作同一なりき、彼女は人間の貴きを見て、貴賤貧富の差別を見る事なかり

「いえ、御罰が中ります」

「罰が中れば私に中るでの」と美伎子は手を取らんばかり「早う來てお掛けなされ」

「お家様々〳〵」とお際を初め下女共口々に引き止むるを

「大事ないわの、私が承知ぢや」と一言に叱り付けて「お前お掛けなされぬかいの」

女乞丐は有難涙に暮れながら、轉ぶが如く臺處の庭に入りて、石の如く冷き身體を上り框にかけたりき

「こんな嬉しいことござりませぬ、十一年振にお臺處の椽へ腰をかけたのでござります」

「お前も生れながら乞丐してお在なさるぢや無いわのう」

「お恥かしうござりまするが、これでも以前は三町ほども田地持つた百姓の娘でござります」

「はての、それが什麼としてこんな身にお爲りなされたの」

「身の罪が報うたのでござります、若い時から兩親に苦勞掛けて、不品行の限りを盡した身の罰が報ふたのでござります」

「生れは何處ぢや」

「此奥の福住でござります」

「親御はないの」

「三年前に死に絶えて、今は一人の身寄もござりませぬ」

「御亭主もないと見ゆる」

「これの父は世にも稀な薄情者でござります、私が懷妊してある間、何處へか姿を隱したのでござります」

「一人では困るでおらうの」

「一人なれば何うにでも致します、乳呑兒を抱へては、世話をして呉れるものもござりませぬ」

「溫い粥を進ぜる、これで身體を溫めさつしやれ」

「有難うござります、什麼ともお有難うござります」

美伎子の爲んやうを見てゐりき

女乞丐は飢えたる羊が麥の穗を見付けたる如に、慈悲の粥を啜るなりき、

三椀五椀七椀と替へに替へる啜るなり、給仕の役は美伎子なり、お際は見

難ねて

「お家様私が給仕して遣ります」

「いえ〳〵」と美伎子は頭を掉つて「私が呼び入れたのぢや、お前方の手を借りてはならぬ、給仕も何も私がする」

「勿體ないでござりませぬか、非人や乞丐の云ふ事を眞にお受けなされてはなりませぬ」

「僞の中にも眞はあるでの、私はこの眞ばかりを見て居ります」とお際の詞に耳を借さず「お前もう一つ喫らぬか」

「昨日からお米一粒も戴きませぬ、けれどお腹には限りござりまするで、戴きたいは山々でござりまするも、もうこれで戴けませぬ」

「これでは鉢に入れて進ぜう、一ばい詰めたお腹が、何時までも滿ちてはないでの」

「その樣に戴いては恐れ入ります」

「お待ちなされ〳〵」と美伎子は立ちて戸棚より鉢の新しきを取り出し、そ

の中へ熱い粥を盛りて與へぬ

(四)

女乞丐は滿腹して立ち上る、腹は滿ちても身は素肌なりき、乳も胸も露出なりき、憐れ女、而もさまで老いたるにてもなき女、肌を見するは堪へまじき恥辱なるべきを、彼の女は忍びて憂き恥を晒すなりき、心の中如何なるべき、美伎子の慈悲心は雲の如く湧き起こる

「ま、お待ちなされませ、お前寒いことでござりませぬか」

「寒いことござりませぬ、只今結構なよいお食事を頂戴したでござります」

「お腹ばかり大きくなりても身體に着るものなくてはならぬ、お待なされ、私がよいのを上げまするで」

「否え、否え」と女乞丐は流石に遠慮して

「さうして戴いてはなりませぬ、此上お惠みを頂いては天道樣御罰が恐ろしうござります」

「お待ちなされ、物を盗むは悪しけれど、人の恵を受けるが悪いことござりませぬで、只今出してお上申します、暫時お待ちなされませ」

美伎子は斯く言ひ捨てゝ納戸に入りぬ、お際を始め、下女下男皆揃きの眼を睜て、不審げに美伎子の爲ん様を見てありき、女乞丐は素肌に乳呑兒を脊負たるまゝ中仕切の敷居の外に立ち居たり、美伎子は襪て其の身の着古したる一枚の木綿布子、其れに黒繻子のまだ新らしき帶を持ち出で來りぬ

「さ、これをお上げ申します、お氣に入るまいも寒を凌ぐことは出來ます、これを着て下され、物は粗末でも私の志を着て下され」

「有難うござります、何んとお禮の申し上げ樣もない、斯樣な結構なもの頂戴、此の御恩を忘れては私身の破滅でござります、此は戴いたも同樣、どうぞ其方へお納めを願ひまする」

「それでは私の志が反古になります、世の中のもの何に一つ人のものは無く皆神樣からお預り申した品物ばかりでござります、私が着るもお前さんがお着なさるも同じ事、是で寒さを凌ぐことが出來れば、神樣のお悅び、御辭退なされては却てお前に御罰が當りますぞ、早うお受けなされませ、私が上げるでは無く神樣がお恵みなさるのでござります」

美伎子の心は花よりも美しかりき、美伎子の言葉は神が人間の身に宿らせて、その大慈悲心を行はせらるゝかと思ふまでに貴とかりき、女乞丐は瀧の如く落つる涙の中に押戴きて

「何とも申しませぬ、お家樣お志を身につけます、お家樣お志の……」と云ひかけて目を拭ふ

女乞丐は美伎子の美くしき心にうたれて目映きまでに有難く思ふなりき、宛ら土龍の日輪の前に出でたる如く顏を上ぐるにも堪へぬまでに目映く思ふなりき、凝乎垂頭きて

「さらばお暇いたしまする、此の御恩は何時か一度お返し申す日があらうと心得ます」

憐れ氣に言ひ終りて足早に去らんとしぬ、美伎子は再び呼び止めて

「一寸お待ちなされませ、まだ忘れたことがござります」

「は」と女乞丐は振り返りて「何か御用ございまするか」

「お前ばかりに溫いものお上げ申し、熱いお粥さし上げて、肝腎の小供衆を忘れて去けました、そのお子嘸飢じからう、ひい〳〵と顏へるやうにお泣きなさるが、何處やらに力なく聞こえます」

「まだ乳呑兒でござります、お粥のお湯も戴くことなりませぬ」

「お粥をお上げ申すとは云ひませぬ、これに……私の手へお貸しなされませ」

「まアこのやうな穢ないものを……」

「身體の垢は洗へば落ちまする、母ばかりに慈悲をしてお子さんに慈悲をせぬでは誠の慈悲でござりませぬ、どれ〳〵」と襟掻分てふつくりと肥たる乳房を見せぬ、雪を欺むく肌の白きに心の潔きも知られたり

女乞丐は餘りの忝けなさにぶる〳〵と顏ひ出して

「それぱかりはお容赦下されませ、濟みませぬ、左樣なことして戴いては濟みませぬ」

「其樣に無慈悲なことをなさるものではない、お前の飢いのもお子さんの飢いのも同じこと、恰ど乳が餘つてゐる、これをお子さんに飲ませます」

「滅想もない、それでは此の子に冥利がつきます」

「何にも言はず、私の言ふことをお聞きなされ、お前やお子さんの惡いやうにはしませぬで」

美伎子は乞丐の子を我が手に抱きて、氷の如く冷えきりたる小さな身體をひしと懷きぬ

「よい子ぢや、よい子ぢや、よいものを上げやうのう」

言ひながら乳を含ませぬ、乳飲兒は泣き止みて美伎子の肌にひつたりと抱きつき、乳首も切れる如く吸ふ、乳を與へたる後、死したる安子の着物一枚を赤兒に與へぬ、女乞丐は嬉し涙止め兼ね、中仕切の柱に身を靠せつゝ、正體もなく泣き入りぬ

美伎子のこの限りある慈悲善根を目前に見て、美伎子の所爲に不平なりしお際其他も美伎子の志の清く美しきに感じ動かされぬ、居合せしもの

誰一人、涙を流さぬはあらざりき

誰か知らん美伎子が墓所の上り框にての際限なき慈悲を行ひ居るとき、隠居所の一間には恐しき罪悪行はれねたることを、女乞丐が有り難涙にくれながら北風寒く肌を透して吹く野の道をすご〳〵と歸り行くとき、おかのは隠居所より出で來りぬ、その美しかるべき顔の色が宛ら悪鬼の如くぞ見えし、心の秘密が自ら面に露はれ出でたるなりき

(五)

善兵衛とおかのとの間は宛ら瀧川の流れ流れて、末に大河となるが如く次第次第に大きく然も深くなり行きて、今は人の目にも付く程となりたれど、美伎子は悪しき顔一つ見せざりき、されどおかのゝ心よりは美伎子が目の上の瘤なりき、月の前の雲なりき、如何にもして美伎子を無きものにして己の戀を專まゝにせんとの慾望は正しからぬ彼の胸の中に往來しぬ、されどおかのも去るもの、心の秘密は色にだも現はさず、奉公大事に勤め居れる中、その年も夢と過ぎて、明る年の彌生半ばとなりぬ、野にも山にも美しき花の色色咲きかけたれど、美伎子は心地勝れず寢室の内に引き籠もりて、獨深き思ひに沈みぬ、何處が悪しきと云ふにもあらず、人に言葉をかけらるゝが鬱陶しく又人に言葉をかけるが大儀らしく、自ら浮世に遠ざかる如くなりて、明くるより暮るゝまで夢幻の境にありき

これ聽て美伎子の心に大變化來るべき兆にはあるまじきか、大雨將に至らんとするとき、風高殿に滿つると同じにてはあるまじきか、美伎子が茲と心注く事もなく、半ば病氣の如く暮せるは、彼女の身に美しき花を附くべき前兆なるかも知れじ、美しき花の附く前には、其枝に葉の悉く落去るものなり「御前樣」と優しき聲に呼びて、間の襖を引き開くるはおかのなり、何時に變らぬ艶よき髪を、此邊には珍らしき高島田に結ひ上げ、それにびら〳〵と風情よき花簪さして、身に赤絲の入りたりたる手織縞の着物着たる樣、然るべき家の娘と見るも恥しからず、午時の膳部に菜は味噌汁を椀に盛りて持ち來る

「御飯を召し上つてはどうでござりまする」

「おう、」と美伎子は一際愛嬌よく「もうお午時かの」

「毎日一室にばかり閉ぢ籠つて入らせられるで、嘸御苦痛でござりませうな、今日は坊様お好みでお芋汁を作つてござります、お口には合ますまいも、一つお上りなされませ、御意に召せば、お替りは幾何でもござります」

「さうかの、善右衛門が其の様な贅澤いふたかの、今日はよいがこれからは聞いて下さるなよ、口の奢耀に身を滅すことあつては、百姓の恥でござるから喃」

「おはゝゝお家様の何を仰せ遊ばすやら、御當家御身代でこれ程の事何の贅澤になりませうぞ、それはさて、一つ召し上り御覧じませ、ちとお辛いか知れませぬ」

「私は如斯して怠けてゐて、お前の作つた御馳走ばかり戴くは冥罰も恐しいが、折角の志ぢや、一杯だけ相伴しやう」

「一個とは仰せられいで、幾椀もお上りなされませ、只今お煎花の香りよいのを差し上ます」

おかのは膳部を其處へ置きて逃るが如く立ち去りぬ

美伎子は好ましからず思ひながら、もし此の味噌汁に手を付けぬこととあつては、おかのが氣を惡くすることもあらん、要らぬ心配さすることもあらん、おかのと善兵衛殿との間を妬む餘り彼の女の料理せし味噌汁をさへ手にせざりきなど、人の口の端にかゝるも詮なし、手づから膳部運びくれたる彼女の志も捨て難し

美伎子が味噌汁を副食物にして一椀の飯を食べ終りし時、おかのは再び出で來りぬ、天目茶碗に番茶の煎花の香りよきを運べるなり

「お煎花はどうでござります、お汁のお鹽梅はどのやうにござりました喃」

「お蔭で美味いもの食べたわの、鹽梅はお前と見える」

「誠不加減、お恥かしうござります」

「折角ぢやで、お煎花を戴きます」

美伎子は茶碗を戴きて靜かに煎花を飲むなりき、その様をおかのは瞬きも

せず視てありしが、

「お家樣、も一碗お上りなされては何うござります」

「も、澤山ぢやわの、此れは彼方へ下てくだされ」

「さうでもござりませうが、も一碗お上りなされては何うござります、鹽梅がお氣に召さぬのでござりまするか」

「鹽梅は日本一ぢや、美味いから、と腹一杯は食べぬ者ぢや、此れは彼方へ下げてくだされ」

おかのも今は止む事を得ず、恐ろしげに、且心あり氣に、美伎子の顏を凝と視詰め、息の急むを悟られじとする如く伏目になりて膳を下げぬ、この樣仔細あり氣なりき

（六）

「お母さま、お母さま」と呼びながら、美伎子の居間の襖を開けて、宛然恐ろしきものを見たるが如く、顏の色を變へたるは善右衞門なりき、

「お母さま何うなされたのでござります」

善右衞門の驚きたるもその筈、美伎子は我身の居間より、厠へ通う椽端に俛伏て正體もなく倒れ居れるなり

「お母さま、お母さま」と善右衞門は縋り付きて「何うなされました、その御樣子は何事でござります、何處かお惡いのではござりませぬか、お母さま、お母さま」と聲を限りに呼びたれど、美伎子は返答もなく蟲の息なりき、土の如く靑褪めたる顏に、物凄きまで甲斐なき影浮びて、手も足も氷の如く冷たかりき、善右衞門の驚愕譬へんにものぞなき

「大變でござります、お母さまが大變でござります、たゝゝゝ大變でござります」

此の聲聞きて逸散に駈け來りしは善兵衞なり

「何うした、何うした、お美伎が氣絕してゐるでないか」

善兵衞も顏の色を失ひて、美伎子の倒れ伏たるを引き起しぬ、何かの毒にでも當りしか、常には雪の如く白き頰に紫色の跡見えて、切りたる齒の間よ

り黄色の涎だら〳〵と流れ出づ、何様容易ならぬ容體、何様捨て置き難き珍事、

「こりや、大變、この儘にしては置かれぬ、源右衛門殿呼べ、醫者殿呼べ、三昧田の半七殿へ使ひを出せ」

取り敢へず厚き蒲團の上に寢かす、一家の混雜鼎の湧が如し、その内に源右衛門も來る、丹波市より醫師も駈けつくる、されど醫師の駈けつけたる時美伎子は早や人心地つきてありき、祈らずとも神の御加護ありて、自然に生氣づきたるなり、おかのは此の間そは〳〵と落ちつきなく

「お家樣何うござります、何うしてこんな酷いこと出來たのでござります」

と心配さうに美伎子の居間を差し覗きては、又急ぎ足に彼方に去る、其の擧動如何にも不思議なりき、されど彼の女は善兵衛の寵愛深きものなれば、誰一人咎むるものはなくて、只目引き袖引き、此の怪しげなる樣を蔭口するのみ〳〵

「美伎子どのや、ちと何うぢや、先刻までは何にともないやうに見えてあつたが、急に惡くなつたと見ゆるの、癪か、差込か」と心切に問ひかけながら源右衛門は枕元に進みよる

「御心配をかけては濟みませぬ、癪か何か知れませぬが急に差込でござりまして唸」と美伎子は心の苦痛を見せまじく、何氣なき體にして、「然し、只今は何事もござりませぬ」

「まだ顏の色が惡いやうぢや、醫師殿に診て貰はつしやれ」

「もうお藥にも及ぶまいと思ひますするが、折角玄宅樣もお越し下されたのでござります、ちよと診てお貰ひ申しませうか唸」

「爾うさつしやれ〳〵」と源右衛門は玄宅を見返りて「どうか御診察下さりませ」

玄宅は今駈け付たる醫者の名なりき、すり寄りて美伎子の容體を篤と見て

「こりや病氣ではない、什麽か食物が中つたやうぢや」

「什麽も食べたものござりませぬが……」と美伎子はそれと心付きながらおかのゝ爲めに飽くまで祕して「時候中りではござりませぬか」

「いや〳〵」と玄宅は頭を掉り「悪い物は皆な出て居る、源右衛門様お氣の毒ぢやが、吐瀉物を見て下さらぬか」

源右衛門は心得て座を起たんとす、美伎子は慌てゝ

「それには及びませぬ、穢いものを恐縮でございます」

「少しも關はぬ、お前さま病氣の源を調べるのぢや」と源右衛門は幾度も頭を傾げて「どうも異しいことがある」

(七)

美伎子はいかにもして源右衛門を引き止めんとしたれど、其甲斐無かりき、暫時の後元の座へ復り來りて

「玄宅様お診察、感心の外ございませぬ、只今檢めございまするが、何か食ふた物が其儘下痢つたのを見てございます」

「やつぱり何か喫られたのぢや」と、玄宅は得意氣に「善兵衛殿御存じないか」

「一向に心得ませぬ」

「はての」と源右衛門は考へ「さらばおかのが知て居るか知れぬ、おかのおかの」

「それには及びませぬを、誰も知つた者ございませぬを……」

美伎子は尚おかのゝ爲めに、恐き罪過を祕さんとするなりき、折柄おかのは顏の色を直青にして出で來る

常には美しく清き目なれど、今日のみは曇りを帶びぬ、次の間に手を支いて

「何か御用でございまするか」

「おかのや」と源右衛門は詞優しう「そなたお美伎さんに什麼をお進げ申したの」

「はい」とばかり後には續く詞なかりき

「きつと尋ねる、そなたお美伎さんに什麼をお進げ申したの」

おかのゝ素振、おかのゝ面色、更におかのゝ詞の調子、物馴れたる者の目には、一目して深き仔細ありと知られぬ、源右衛門は膝を進めて問ふ

されどおかのは答へなかりき

「秘すことは無い」と善兵衛はそれと氣付きも無く「有樣を云ふが可いわの」

「あの私……」とおかのは聲を慄はせて「お家さまお晝御飯をさし上げてござりました」

「菜は什麼ぢや、何を付けた喃」

「お芋のお汁でござります」

「はての味噌汁を食べられたかの」と源右衛門は隙さず「その味噌汁誰が作つた」

「私手製でござります」

「ほゝお前の手製を、お美伎どのに進げたといふか」

「お家樣にはお初穗をさし上げてござります」

おかのゝ聲は愈よ慄ふ

「それをお美伎さん食べられたか」

「眞の一杯でござります」

「すると夫が中つたのぢや、玄宅さんお診定通りぢや」

「その味噌汁まだ殘りござらうの」と玄宅は得意顏なり

「私が見て置いた彼に相違ない、臺所の戸棚に置いてあつた、取つて參らう」

源右衛門は起ちかゝる、おかの一期の大事なり

美伎子はおかの氣の毒さうに、深く頭を垂れてありき

「お隣の旦那樣、もうござりませぬ」とおかのは慌てゝ「少許も殘りござりませぬ」

「今在つた物、急に無くなる筈はない」と源右衛門は玄宅手に由つて、この恐しき祕密を探らんと思ふやうに「私が見て來る」

「いえ、お越しなされてもござりませぬ」

「さらば、何うした」

「坊さまお喫りでござります」

「え、善右衛門どの食はれたな」

「いえ」と慌てゝ「坊樣ではござりませぬ、男衆にお上げ申したのでござり

ます」

「坊さまに上げいて、下男衆に遣つたと云ふか、善兵衛どのにも上げぬ物、下男衆に遣つたと云ふか」

源右衛門の聲の鋭く激しくなるに付けて、おかのゝ身體は次第に縮みぬ、額際よりたら〳〵と膏汗浸み出でぬ

「いえ、男衆に上げたのでござりませぬ」と詞もしどろもどろになりて「彼のお汁は……彼のお汁は……」

「誰に遣つた、それを云はつしやい、味噌汁吸ふたものに故障無くば、そなた身に掛る疑がひも晴れるが、この返答に偽りあると、そなた一身如何樣な疑ひかゝるも知れぬ」

「どうぞ御免下さりませ、お慈悲でござります、お情でござります」

「恕す、恕さぬは後の事、殘りの汁をどうしたのぢや」

「乞丐に遣つたのでござります」

「はての、お美伎どのに一碗進ぜたばかり、後を乞丐に遣つたぢや喃」と源

右衛門はおかのゝ顔を沈と見て「こりや怪しからぬ」

「これ〳〵」と善兵衛はおかのゝ身を危むやうに「狼狽へることないではないか、そなたの作つた味噌汁に、毒が入つてあつたと極つたではなし、什麼も其樣に狼狽ることないではないか」

「さうではござりまするが、お家さまお喫りなされたのでござりまするで……」

「それが中つたと極らぬ、少しでも殘りはないか」

「疑ひの掛つたを、坊樣には上げられませぬで皆乞丐に取らせたでござります」とおかのは善兵衛に甘へる如く、「後に殘つてはござりませぬ、旦那樣源右衛門樣にお詫言なされて下さりませ」

「詫言には及ばぬ、私はそれが調べて見たいで、乞丐であらうが、何であらうが、何處までも追ひかける」と源右衛門は少しも緩めず「何處の乞丐に遣つたのぢや」

「其處までは存じませぬ、乞丐の家は存じませぬ」

「お前が知らずは、下男衆が知つて居やう、その乞丐逐ひ掛けたら、まだ持つてゐるかも知れぬ」

源右衛門は又起ち上る、おかのはその前に塞つて

「誰も知つたものでござりませぬ、人の見ぬ間にそつと遣はしたのでござりまする」

「異しいの」と源右衛門はおかのを睨み付けて「お前色々な事を云ふのう、私に偽言を云ふぢやのう」

「左様なことでござりませぬ、旦那様旦那様」と善兵衛の袖に縋り付き「庄屋様にお詫言なされて下さりませ」

「そなた味噌汁に毒を入れたな」

「え、滅相もない……」

「それで無くばその味噌汁をこれへ出さつせ」

「皆な乞丐に遣つたのでござります」

「乞丐に遣つたものを、何故下男衆に遣つたといふた」

「……」

おかのは遂に口を噤みて、善兵衛の袖の蔭に身を縮めぬ

「お前何ぢやの、お美伎どのに毒を盛て、殺さうとしたぢやのう」

「……」

「さ、眞直に白狀さつしやれ、今から村中の乞丐を駈り出し、そのことの詮議する、後悔ある"まい」

「……」

「お前は其樣に云ふて居るも、乞丐に遣つたのは偽りで、其處等へ捨てたのであらうがの」と源右衛門はきつと云ふ

善兵衛はまぢ〳〵としておかのゝ樣子の異れるを不審しぬ

「おかの、返事をせぬか、此上祕し立をすると、そなた一身の爲めにならぬぞ」

おかのは遂に泣き出しぬ、什麼として此場の難義を云ひ解くべき詞さへなくて只潜々と泣き出だしぬ、源右衛門は又擽り寄る

「お前まだ嘘を云ふの、お前大それた罪を犯して、私や善兵衛殿の目を瞞まさうとするの、今迄は大目に見たがもう赦されぬ、何うしても赦されぬ、他召使の見せしめ、これから代官所に連れて行く」

善兵衛は先刻よりの有様を見ておかの憐しく思はざるにあらねど、現在主人の妻を毒害せんとしたる恐ろしき心を知りては、それを庇護ふ詞もなく又それを労はる心もなくて、徒に胸を騒がすのみ

「さ、立て、さ、立て」

源右衛門は悪を憎むこと深かりき、最愛の我が子を助けられたる神の如き美伎子に對して、恐ろしき手段を用ひんとしたるを憎む心、更におかのが善兵衛の寵に誇りて常々人も無げに振舞へるを蛇蝎の如く憎む心、火の如く烈しく燃えぬ

「おかの何をしてある、立てと云へば立たぬか」

今にも手を下して引き立てんとす、おかのは盤の上に平伏て正體もなく泣き入りき

「立て〳〵、え、立ちませ」

源右衛門の手はおかのゝ首筋にかゝらんとす

「庄屋様ちよとお待ち下さりませ」

此時思ひがけず重き枕を掻げて、源右衛門が敦圀き荒く罵るを呼び止めたるは美伎子なり

「美伎子どの止めしやつしやるか」

「どうぞお赦し下さりませ」と美伎子は蒲團の上に起直りて、苦しげに肩に息しつゝ、その苦しさを人には見せまじく垂頭きて「おかのに罪はござりませぬ」

「これ〳〵何を云はつしやる、現在味噌汁に毒を仕込んで、お前の命を奪らうとした極重悪人、罪が無うて何んとする、此のやうなものを捨て置いては他々の見せしめにもならぬぞ、せてくれる、尤もこれはおかのの憎うてするのでない、悪事をすれば悪の報がある、不忠不義を働けばそれだけの天罰身に報ふ恐ろしさを、廣い世間に見

せらるのぢや、人の振見て我振直すものが、唯の一人でもありさへすれば、おかのは假令磔刑に遇はされても犬死とはならぬのぢや、止めしやつしやるな」

「いえ〳〵」と美伎子は頭を振り「それはお庄屋樣の思召違ひでございます、只今の味噌汁に毒が在つたわけではございませぬ、私の胸に穢い心があつたのでございます、只今の味噌汁はおかのがくれたのではなく、神樣のお手で私の心の穢たを洗ひ清めて下されたのでございます、先刻の吐瀉しで私は心の塵を殘なく洗うたほど嬉しいものはございませぬ、神樣のお手に代つて心の塵を拂ひ清めてくれた、おかのに禮を云はねばも罪科はございませぬ、そのまゝにして下さりませ」

「それでは此方かほどの罪人を此儘赦す心ぢやな」

「心の美い女でございます、罪人ではございます、心の穢が病氣の原になつたのでございます」

美伎子は兩手を膝の上に置きて、病に疲れたる身を儼然と構へぬ

「私はそなたの心に泣きます、自分を攻めて人を攻めぬ美しい心に泣きます、然しおかのを此儘にして置いては、家のためにもならず、又善兵衞殿のためにもなるまい」と源右衞門は深く美伎子に同情して「私も會所へ引き出さうとは云はぬ、今日限り永の暇をやらつしやい、私が萬事を取り捌く」

「いえ、暇は出しませぬ、神樣同然のおかのを家に置くは當家の譽でございます、私の幸ひでございます、御存じの通り、私近頃は病氣勝ちでございまするで、善兵衞どのお世話も仕兼ね、活き甲斐もなく暮します、その足らぬ處を補ひ、家の事、旦那殿の事、小供の事まで世話してくれるはおかのでございます、私暇を出すこと致しませぬ」

おかのは美伎子の眞心身に泌み骨に影ぜられて、有難さに聲も出でず疊の上に平伏したるまゝ、咽び泣きに泣き入りたり

人は知らじと心に謀みて、人知れず料理したる味噌汁は目ざす美伎子を殺さずして、却つて我身我心を殺したる恐しさを思ふにつけて、魂も身に添は

ず戰々〳〵と慄ひ出しぬ

今日までは旦那樣御寵愛を一身に集めて、お家樣は有れども無きが如く、雇はれ人にはあるまじき我儘を盡したる身が、もし牢獄に投ぜられて、明日はお調べ、明後日は木の又に梟けらるゝ運命とならば如何ならん、おかのは夫を思ふごとに、脊中より冷水を浴びる如く感ずるなり

「然も身はその運命に至るべき罪を犯しぬ、こゝに美伎子の助けなくば、源右衞門に引き立てられて、悲しき途の第一歩に着くべき身なり

おかのゝ心は暗黑なりき、生きながら焦熱地獄に落ちんとしき、痛み苦み、嘆き悲みて、身も世もあらず後悔の涙に咽ぶ時、耳元に美伎子の有難き溫き詞を聞きぬ、暗黑の中に日の光りはさして、重き罪は釋されぬ、おかのは身の惡行に死して、他の心切に蘇生りぬ

「有難うござります〳〵、この御恩は死ぬるまで忘れませぬ」

おかのはぴたりと手を合せぬ、

「お美伎がそなたの罪を怨すといふ、その恩返しには善心に立ち還つて、好い事をせねばならぬ、私も以來は……」と善兵衞は後に續く詞なくさし垂頭きしが「堪忍してくれ、惡いことをして居たわの」

花として日の惠みを受けぬは無く、人として美しき義理に感ぜぬ者なし、

一座の人皆な泣きぬ

第八章

（二）

「痛い〳〵痛くてなりませぬ、また足痛でござります」

今朝より野良へ耕作に出で居たる秀司は重たげに鍬を杖つきて、初屋敷の家へ歸へり來りぬ、秀司は善右衛門の改名せしなり、色白く眉秀いでゝ清く優き若者となりたりき

「秀司でないか、何うしたな」と云ひながら奥の間より膝行出でしは主人の善兵衛なり、秀司が家を出づる時まで何事もなくてありし目、急に悪しく痛みを覺ゆるとて、黒紹の切を細長く目の上にかけ居たりき

「私でござりますまた足痛でござります」

「それは困るの、私も今朝から目が悪うてな」

「お父樣もお悪いでござりまするか」

秀司は苦痛に絶えざる如く上り框に腰掛けぬ

「私ばかりではない、お美伎も腰が痛むと云ふて、先刻から寝て居るわよ」
「え、お母様まで、こりや只事でもございませぬ」
「家内の者一同此様に悪いのは、神様のお怒に觸れたのであるまいかな」
「私は毎度の事でございます、去年（天保八年）今頃俄に足の痛みを覺えてから、折々此苦痛見まするで、さのみとは思ひませぬが、お父様、お母様御一所に悪うおなりなされたは、合點行かぬことでございます、お父様お目どのやうにお悪いのでございます、お母様お腰の痛みどのやうでございます」
「雙方急に悪うなつた、常とは違うて甚う痛む」
「長瀧村の市兵衛殿をお呼びなされませ、私の足痛は彼のお方のお加持で直りまする」
「如才無う呼びに遣つた、程なくお越し、先づ此れへ來て休もでな」
市兵衛は聞こえたる修驗者なりき、此邊に一人ありて二人なき大徳修驗者として、近隣近郷の尊敬大方ならざりき
「お母様何うでございます」

秀司は痛む足を膝行せながら奥の間を伺ひぬ、お美伎は腰の痛みに堪へ難ねて、今日開けたる炬燵の上に打伏しありき
「そなたも足が痛むさうぢや」
「何時ものことでございます、大したことはございませぬ」
「私もほんの些細なこと、今日は亥子の祝義、治兵衛様お越でな、私等の急病に惱むを見させ、これではならぬと仰せられて、市兵衛様呼びにお越しなされた、市兵衛様のお加持には死んだ者も蘇生る、此れ程の痛み直ぐ癒るで心配することはない、今にお出でぢや」
「それでは用意して置きませうな、蓙の新しいのも買うて置かねばなりませぬな」
「用意は整うてあるわの、併しお神酒がまだぢや、誰かを丹波市に走らせてたもるまいか」
これ誠に天保九年十月二十三日のことなりき

（二）

當時美伎子は四十一歳、善兵衛は五十歳、長女お政は十四歳、四女お春は八歳、五女小寒子は二歳、秀司は十八歳にして中山一家は春の如く平和なりき、二女安子、三女お常は前に照之丞の命に代るべく、犠牲に取られたれば在らず、家は富たるにてあらねど村の年寄なり、地位は高きにあらねど姓氏帯刀を許されたり、四戸前の倉には米麥滿ち、本家隠居所に駘蕩たる春風吹きて、前に暇となりしおかのまで時々御機嫌伺ひに來るほども長閑なりき

然も此の日家内に三人の病者を出したるは、偶ま月にかゝる雲なりき、やがて晴れ行く黒雲なりき、市兵衛は亥の刻過ぐる頃來りぬ、案内者治兵衛それに供の者二人まで従ひたれど、例として同道する加持代のおそよ影もなかりき、市兵衛は名だたる修験者なれど、加持代なくして加持をなすべきやうなからん

加持代は御幣を持ちて神の座に立つ者なり、修験者が祈禱の目標となりて神の心を宿すべきものなり、故に其の人は清淨無垢ならざるべからず、清淨無垢にして且つ無邪氣ならざるべからず

「おそよ樣見えませぬな、加持代樣お越しなされませぬな」と秀司は苦痛を堪へながら云ふ

「ほんにの、加持代樣何うなされたであらうの」

美伎子も亦心配の樣なりき

「おそよ樣今日に限つてお障りあるさうでござります」と治兵衛は引き取り

「惡い時には惡いことの續く者でござります」

「はての、それは困つたの」

加持代なくして祈禱するは的なきに矢を放すが如く何の甲斐もあるまじきなり、善兵衛は途方に暮れたる如く云ふ

「併し市兵衛樣お出でになれば、また致し方もあらうと存じて、兎も角も御同道申上げたでござります」と治兵衛は云ひ譯するやうに「一時に三人までの御病氣、常事でもござりませぬ、市兵衛樣何かよい御分別ござりませぬか」

「誠に苦しい時の神頼み、市兵衛様、お助けを願ふでござります」と美伎子は凭れかゝるやうに云ふ

善兵衛は目をおさへて互に苦痛を堪ゆる様

「もし何うでござります」と治兵衛は痛々しさうに「市兵衛様この病人、助かる工夫ござりませぬか」

「さうぢやの」と市兵衛は莨一服「此れを見捨てるわけには参らぬ、はて困つた」

「私ではお間に合ひませぬか、加持代を勤めることなりませぬか」と治兵衛は思ひに堪へ難ねて云ひ出だしぬ

「男ではなりませぬな」と市兵衛は座敷の中を見廻し「お家様は何うござります、あなたおそよどの〻代りなさることなりませぬか」

「私でも」と美伎子は膝を進めて「勤まりませうかな」

「あなたほど清浄なお方ござりませぬ、おそよどので出来ることお家様で出来ぬ筈ござりませぬ」

「私でお間に合へば、どのやうなことでも致します、私がお間に合うて旦那と秀司の苦痛が助かれば、此のやうな嬉しいことござりませぬ」

美伎子は何時の場合にも献身的真心ありき、良人の為め我が子の為めには、今迄試みたることなき加持代にもならんと云ふなり、神の座に立たんと云ふなり

「それではおそよどの代して下さりますか、それなら譯はない、旦那も若旦那も、今に苦痛を助けてお上げ申します」

市兵衛はいそ〳〵として準備にかゝりぬ

（三）

美伎子は苦痛を忍びて、その身加持代となるべく先づ身心を清めたりき、冬も漸く半ならんとして、布留の山より吹き下す風寒く、豊田山に星の光り凍りて夜は丑の刻近くなりき、美伎子は病める身を提げて、裏の井戸の邊に出で、頭より冷水を被ること幾十釣瓶と数知らず、天地神明に祈禱をかけて、

心を清め氣を落付け、氷の如く冷え切りたる身に白衣を纏うて、儼然神の座に立ちたりき、神の座は表座敷の床の間に敷きたる新莚の上なり、市兵衛は悲しく御幣を捧ぐ、丈よりも長き黒髪は幾十釣瓶の水に晒されて、肩より脊に倒れかゝる、雪よりも白き肌膚、雪よりも白き衣服、謹しんで御幣を持ち て神鏡の前に立ちたる時は、是れ神、是れ人、常の美伎子にはあらざりき、市兵衛はそれと相對し秀司と善兵衛はその左右に座を占め、治兵衛をはじめ、弦に來合せたる親類緣者はづらりと前に居并びき、市兵衛は丹精を擢んでゝ祈禱しぬ、冬の夜にも汗は瀧の如く流れ、目の内朱を流したる如く血走りて、息づかひ急しく、諸々の神の御名を稱へる聲も嗄れて、一心亂れず、三人の病氣平癒を祈念しぬ

折柄軒場に一陣の風颯と鳴り渡りて、綠の雨戸に落葉ばら〳〵とそゝぎ來たる

此時美伎子の面上に一道の光明閃めくよと見えしが、手に持つ御幣倒に立ちて、左右齊しくびり〳〵と顫ひ出しぬ、一座は関として物音なく、軒を打つて庭に外れたる北風、遠く鑵子山の頂に鳴るが聞え、布留川の水の音潺々と岸を噛んで葉末に凍る露の音幽かなり

市兵衛こゝぞと更に誠を擽づるとき、美伎子は宛ら明鏡をかけたる如き雨眼を見開きぬ、誠に曇なき明鏡をかけたるが如き目の色なりき

「天の將軍天降りたり」

一語嚴かに唇を逃り出づ、岩の恠洞に鳴る水の如き重き聲なり

一同ははッと平伏す、されど市兵衛は加持代の口より、聞くまじきことを聞きたるに驚きて、思はずも頭を擡げたり、その隙もなく第二の聲は續いて起る

「此の屋敷は世界初めの源の地場、世界一列助けに天降つた、皆が心得」

善兵衛も秀司も思ひがけぬ詞に不審の眉をひそめたり、市兵衛は合點行かず、再び何をか云はんとする時

「由つて此の家屋敷を申受ける、當家親子の物を申し受ける、速にお受けせ」

と恐しき聲に云ひ切つて「否應はあるまい」

はたと善兵衛を睨みつけたる目の光、日月の輝きに彷彿たり、善兵衛は詞なし

「今言ふたこと違背あるまい、今云ふたこと不承知あるまい、主人返答は何とある」

美伎子の有様近づき難き威厳あり、暫時して善兵衛はきつと覚悟しぬ、姿は美伎子なれど云ふことは美伎子にあらず、詞は常よりも重く聲は常よりも力ありて、しかも自らなる威光も添ひぬ、今の詞正しく神の託宣なり、御答申し上げねばなるまじ

「恐れながら申上げる、屋敷は先祖傳來のもの、善兵衛手一つに買ひ上げたものでござりませねば、一存にて獻上のこと取り計らうわけにまゐりませぬ、また小供は天より授かる所、これも善兵衛の自由にはなりませぬ、ことに家内はまだ乳呑兒を抱き居りまするで、將軍樣御意に從うことなりませぬ、此れ等事情御推量下されて偏へに御容赦を願ひ上げ奉りまする」

されど美伎子は耳を貸さゞりき

市兵衛は從來長の歳月加持祈禱に從ひたれば、屢次不思議の託宣を蒙りたる事あれど、今夜の如く凄じき恐しき樣を見たる事なし、第一は美伎子の持てる御幣なり、御幣の紙は重くだらりと垂れ居れるが例なるに、烈々たる火焔の燃ゆるが如く逆まに立ちて、恐しき神のお聲を傳うる如く、ざは〳〵鳴りぬ、是れ實に前代未聞の事、深き意味なくてはならず

第二は今まで絶えて耳にしたる事なき、天の將軍降らせたる事なり、八百萬の御神々〳〵、変る〳〵降り憑らせたまふことあれど、天の將軍御降りありし例を聞かず、そも〳〵如何なる御神か、そも〳〵如何なる御神か、す御神か、市兵衛はずッとすり寄る

「恐れながら御訊ね申し上げまする、天の將軍樣とは何誰樣御事でござりまする哺」

云ふ聲もまだ終らぬに、美伎子はきつと此方を向きて、

「天の將軍は日月ぢや」

その聲百雷の一時に落つる如くなりき、市兵衛は再びはッと平伏しき

(四)

美伎子は二十三日の夜、加持代として神の座に立ちたるまゝ、二十五の兩日、同じ事を繰り返すのみ、絶えて身をだも動かざりき、善兵衛秀司より食事を薦めたれど、頭を掉りぬ、二十五日の夜も更けて、草木も眠る丑滿頃となりたれど、きつと視開きたる兩眼は鏡の如くなりき

この不思議の有樣に、中山一家は上を下への混雜なりき、三昧田よりは美伎子の實父前川半七も來りぬ、日頃親くする間なれば床屋源右衞門も詰め切りぬ、この他一門緣者、それに同じ庄屋年寄仲間とて、福住村の庄屋勝田新右衞門、別所村の庄屋荻原伊兵衞(福住別所皆な同郡なり)も、使ひを受けて來り會しぬ

是等の知音親戚は二十四日の午時より、二十六日の朝未明に掛けて、區々の評議、區々の相談、この不思議の神命を什麼として御辭退申し上ぐべきかに就いて額を鳩めぬ、その結果、日月御憑りあらせられたるは有難けれど、氏も無く素姓も無き百姓の身に、行く〳〵御守り申し上ぐべき餘裕も無ければ、唯一圖に御立退きを願ひ奉る外無からん、日本の民として日月を尊信せぬはなけれど、斯る尊き御神の御宿としては、此家あまりに疎末なり、この身代餘りに貧し、善兵衛殿を眞さきに立てゝ、諸親類どもも付き添ひ、匆々御立ち退きを願ひ奉る外あらざらん

この一決に由りて、善兵衛を眞さきに、親類一同恐る〳〵神の座近く進み出でぬ、美伎子は儼然と立ちてありき。

「恐れながら申し上げまする、天の將軍樣とは日月の御神とござりまする氣、日本には外々に結構なる土地柄、又結構なる家屋敷もござりまするに、何を以て當家如き疎末場所へ御下りなさせられてござります、只速かに御退散の儀願はしう心得まする」

善兵衛は壁に額をすり付けぬ

「入込の身の因緣、屋敷の因緣に由つて天降つた」

美伎子の口より出る聲なれど、平生の調子にはあらず神々しかりき

「屋敷の因縁と申しまするとも」

善兵衛は再び問ふ

「追て知らせる」と鋭き聲にて云ひ終り、更に詞をついで「只今の詞を聞き入れねば、當屋敷を一夜の中に黒焦とする」

一語千萬斤、人々はその重みに地へぬ如き樣なりき、善兵衛は詞なかりき源右衛門と半七とは、善兵衛の詞の足らぬ處を補ふべく、等しく口を開かんとして、不圖頭を擡げたる時、美伎子の目はいかさまにも日月の如く光りて、はたと二人を睨み附けぬ、その恐しさに唇は痲痺れ、舌は石の如く硬ばりて、一語だも云ひ得ざりき、神の聲はいよ〳〵鋭く、一座人々の頭の上に落ち來る

「神の所思を妨ぐる者は、神罰立ち所に至り、子々孫々根を絶つ悲みに會はうぞよ」

神の命を奉ぜずば、一夜の中にこの屋敷を焦土に爲べしと云ひ、神の所思

を妨ぐれば、悉く一類を絶滅せんと宣ふ、然もその御聲は岩を撲つ巨濤の如く烈しかりき、暗を破る曉の鐘の如く大きかりき、託宣は又下る

「妻女は社に貰ひ受ける、三千世界が助けたい、家族家屋敷を天に差し上げ、此方へ貰ひ受けたい」

一絲亂れず、儼然たる聲なりき、善兵衛は平伏したるまゝ、半七は美伎子の身の上心元無く、美伎子の身體に障りあるまじきを氣遣ふわまり、思はず進み出で

「御託宣の次第、謹んで御受け申し上げまする、由て少も早くお美伎の身體を御立退きあらせられまするやう、改めて御願ひ申し上げるでござります」

されど美伎子は頭を振りぬ

「餘人の返答ではならぬ、主人の口より承知の旨聞きたい」

今は是非無し、今は神命に背くべきやうも無し、善兵衛はひづ〳〵と顏を瑩げて、

「お詞承知仕つてござります、當家一切の物、悉く御手許へさし上げるでご